

勝平アフター

猫林13世

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

退院間近の柊勝平。その友人である岡崎朋也が口にした結婚式。意識して妻である棕になかなか切り出せない勝平……

アニメでは登場しなかった柊勝平にスポットを当てた作品です。

目次

病室での語らい	1
姉妹の家飲み	5
再会	9
お誘い（脅迫）	14
再会の下僕	18
退院祝い	22
春原弄り	27
伝説のパン屋	31
思い出の中の朋也	36
リハビリ散歩	40
友人の運転で	44
営業の成果	48
ボケボケ夫婦	52
漸く…	56
棕の料理の腕	60
朋也の料理の腕	64
酔っ払いの告白	68
二日酔いの杏	72
勝平の心配事	76
再びの杏	80
勝平・棕のたくらみ	84
部屋までの道中	88
酔っ払いの会話	91
介抱する側	95

杏・朋也の気持ち

99

お誘い

103

それぞれの想い

107

待ち合わせ

111

昔の話

115

偶然の遭遇

119

相談したい相手

123

帰宅

126

焦る杏

129

三者三様

133

久しぶりの春原

137

素直になれない杏

140

ヘタレ・春原

143

酒の力

146

妹の説得

150

決意

153

春原で気晴らし

157

始まりの坂

161

人の恋路を邪魔する奴は

165

お義兄さん

168

ダブルデートのお誘い

172

純情夫婦

175

近況

178

はじめ

181

杏の相談事

185

病室での語らい

——やあ、久しぶり。それが僕が彼と五年ぶりに交わした言葉だった。

骨肉腫の手術を終え、転移が無いかを調べる為に入院していた病院からこつちに戻ってきたのがこの前。そして無事転移が無いと確認されて、僕はこの町で出会った友人と再会した。

岡崎朋也君、それが僕がこの町で出会い、そして僕に手術を受けるように説得してくれた一人だ。

「勝平さん、気分は如何ですか？」

「やあ、棕さん。今日もいい気分だよ」

病室にやってきた看護師さん「柊棕」。僕の奥さんだ。でもネームプレートには「藤林」の文字が書かれている。彼女は職場では旧姓の「藤林」を名乗っているのだ。

「僕もそろそろ退院だし、今後の事を考えなきゃね」

「当面はリハビリと落ちてしまった体力を戻す事に専念してくださいね」

「分かってるって。それは散々棕さんに言われてるし、昨日朋也君にも言われたからね」

再会してから朋也君は定期的にお見舞いに来てくれている。仕事が忙しいのか、決まって五時以降に病室にやってきて、三十分くらいお話をして帰っていく。たったこれだけなんだけど、病室からろくに出られない僕にとって、朋也君とおしゃべりの時間はかけがえのないものになりつつあるのだ。

「岡崎君も勝平さんの事を心配してるんですよ」

「分かってるよ。僕はこの町でかけがえのない友人と、愛する妻に出会って幸せなんだ」

朋也君が、「お前はたまに詩人になる」というんだけど、多分こう

いった事を素面で言ったりするからなんだろうな。

「今日は退院後の説明を先生から受けてもらいます」

「漸く僕も病院の外に出られるんだね」

手術を決意して五年。ろくに病院の敷地内から出る事が出来なかった生活とも、そろそろお別れの時なんだな。

「分かっているとは思いますが、退院してもしばらくは通院してもらわなきゃダメですからね？」

「分かっているよ。棕さんは心配性だな」

僕の事を必要としてくれる、あの時はこんな人が現れるとは思っても無かった。根なし草だった僕が運命の人と出会えたのは、棕さんのお姉さんのおかげだ。

「お前はただバイクに撥ねられただけだろうが」

何時もの時間に病室にやってきた朋也君にその話をしたら、呆れ顔でそう言われてしまった。

「まあ、杏のおかげで俺とお前も知りあったんだけどな」

「そうだよ。だから結局はお姉さんのおかげなんだって」

「……言い切るのは間違っていると思うんだがな」

朋也君と知り合うきっかけもお姉さん——杏さんが僕をバイクで撥ねたのが原因なのだ。

「でもさ、バイクに撥ねられるなんてたまにあると思うんだよね」

「そんな事が日常的にあったら危ないだろうが」

「何が悪い影響をもたらすか分からないんだから、バイクに撥ねられるのも悪くないと思うけどな」

「お前の思考はおかしい」

こうして他愛ない話だけでも、僕は朋也君とおしゃべりするのが本当に楽しい。五年前、知り合ったばかりの僕に寝場所を提供してくれて、その後も色々僕に付き合ってくれた珍しい年下の男の子。見た目は僕の方が幼く見えるかもしれないけども、これでも僕の方が二つ年上なのだ。

「そういえばお前ら、結婚式は如何したんだ？」

「え？」

朋也君が急に話題を変えたので、僕は一瞬ついていけなかった。

「お前がまだ入院生活が必要な時に結婚したんだろ？ まだ挙げてないんじゃないか？」

「うん……でも僕はずっと入院してたし、式を挙げるお金なんて無いし」

「まあ、その辺は藤林と話して決める事だからな。外部の俺がどうこう言う問題じゃないかもしれないが」

「朋也君、椋さんはもう『藤林』じゃ無いんだよ？」

朋也君は相変わらず椋さんの事を「藤林」と呼ぶ。高校の同級生で、五年ぶりに再会したら名字が変わってたなんて展開だったんだから仕方ないとは思ってるけども、それでももう結構時間が経っているのだ。

「だからってなあ、勝平……俺が名前で呼び捨てたらおかしいだろ？」

旦那のお前がさん付けなのに」

「旦那……朋也君、まだ照れるから」
「……………」

朋也君の冷たい視線が、僕に突き刺さっている。年下だけど容赦のないツツコミや、こうして僕に対して遠慮の無い態度で接してくれたのも、僕が放浪してた中で朋也君が初めてだったのだ。

「それじゃ、俺は帰るな」

「もうそんな時間？」

「また来るわ」

朋也君が片手を挙げて病室から出ていく。この光景ももう結構な回数見てるんだと思うと、どれだけ僕が朋也君に心配されてるのかが良く分かった。

「結婚式か……………」

朋也君に言われて考える。確かに僕がまだ検査が必要な時に棕さんと籍を入れただけで、式などは一切してない。それどころか棕さんにウエディングドレスを着てもらっても無いのだ。

「今度ゆっくり棕さんと話してみよ」

昨日当直で、今はおそらく自宅にいるだろう棕さんを思い浮かべ、僕はベッドに横たわる。でも、身内以外で来てくれそうな友人なんて、僕にはいないんだよな……………」

姉妹の家飲み

昨日当直だったから、今日はゆっくりと休もうと思っていたのだけど、夕方に来客があった。

「はい、何方ですか？」

『あたしー！ 椋、開けて〜』

「お姉ちゃん？」

鍵を開けて部屋に招き入れる。最近はお姉ちゃんも忙しいとかであんまり会ってなかったのに、何かあったのだろうか？

「いや〜病院に行ってみたら椋が休みだって聞いたからさ〜。じゃあこつちにならいるかなって思ってた来ちゃった」

「うんまあ……休みなら大抵家にいると思うけど」

実家を出て一人暮らしをしてお姉ちゃんと会う機会は激減した。それでもたまにメールとか電話とかで近況を報告したりはしてたから、本当に久しぶりだとは思わないんだけど。

「それで、何かあったの？」

「え？」

「だって、お姉ちゃんがわざわざ会いに来るなんて」

それこそお父さんかお母さんに何かあったとかじゃなきゃ、お姉ちゃんがこの部屋を訪ねてくるなんて考えられないくらい、お姉ちゃんとは会って無かったのだ。

「たまには姉妹仲良く呑みましょう。お酒持ってきたから」

「……私、そんなに強くないよ？」

「平気平気！ 椋が酔っ払ってもあたしがしっかり介抱してあげるから」

何時も通りお姉ちゃんの勢いに負けて、私はお姉ちゃんと二人で家飲みをする事になったのだ。

「それじゃあ、かんぱーい！」
「乾杯」

やけにテンションの高そうなお姉ちゃんに、私は何となくだけど嫌な感じがした。昔からお姉ちゃんがテンション高い時に限ってろくな事を言い出さなかったのだ。

「勝平さんもそろそろ退院なのよね？」

「そうだけど……お姉ちゃん、義弟相手にまださん付けなの？」

「う……しようがないじゃないの。勝平さんの方が年上で、結婚したっていつてもずっと入院生活で会う機会も無かったんだから」

「お見舞いとか来てたでしょ？」

「それでもよ」

居心地が悪くなったのか、お姉ちゃんは凄い勢いでお酒を呑んでいく。あんなペースでもつのだろうか……

「そういえばお姉ちゃん」

「ん〜？」

「最近勝平さんに会いに岡崎君が来てるんだけどね」
「ッ!？」

お姉ちゃんが分かりやすく動揺した。昔は私の事をからかってたお姉ちゃんだけど、こうしてみるとやはり双子なんだって思える。

「へ、へー……朋也が来てるんだ」

「岡崎君は勝平さんのお友達ですから」

その縁で最近私も少しお話する機会がありました。昔好きだった男の子が今の旦那の友人というのは、些か複雑ではあると思いますが、私は岡崎君に思いを伝えていませんし、岡崎君も岡崎君で鈍いところがあったので私の気持ちには気づいてない様子でしたしね。

「それで、朋也って勝平さんと何を話してるの？」

「さあ？ 岡崎君が勝平さんを訪ねてくる時間は、私も忙しいから。」

それに、勝平さんに聞いても教えてくれませんし」

男同士の語りいだからって何時も言ってますけども、岡崎君曰く大した話はしてないみたいなんですよね。

「朋也って何してるの？ 高校出てから音沙汰なかったけど」

「この町のリサイクルショップで働いてるみたいだよ」

正確には違うみたいだけど、岡崎君も説明が面倒だからってこれを通してるらしい。なんでも営業部長だとか言ってたけど、すぐに「俺しか営業してないからな」って笑ってたな。

「意外としっかり働いてるのね。てつきりニートかと思ってたけど」

「岡崎君は三年生の時ちゃんと就職活動してたじゃない。それはお姉ちゃんだって知ってるでしょ？」

進学校だった為に、私たちの代で就職活動をしていたのは岡崎君と春原君の二人だけ。春原君は地元で就職するからって最後の方は殆ど学校に来てなかったけど、どうやら無事に就職は出来たようだった。

「でも朋也が営業ねえ……脅しの間違いじゃない？」

「岡崎君はいい人だよ。それはお姉ちゃんだって分かってるでしょ？」

不良と言われていた岡崎君だけでも、それは周りが真面目過ぎるから故に言われていた事。遅刻や授業中の居眠りなど、よその学校ならば普通にあり得る事なのだ。

「まあ色々あったからねえ……」

「岡崎君がいてくれなかったら、私と勝平さんは、今こうして夫婦という関係に成れてなかったでしょうしね」

「あーはいはい。分かったから。そういえば……アンタたちって結婚式挙げたの？」

「挙げてないよ。婚姻届を提出して籍を入れただけ。大体勝平さんは

まだ退院してないし」

何時かとは思うけども、当面は勝平さんのリハビリに専念しなきゃいけないのだ。それに籍を入れて既に数年経っているのだ。今更という気持ちも何処かにあるのかもしれない。

「せめてお父さんとお母さんくらいにはドレス姿見せてあげれば？」

「ならお姉ちゃんでもいいじゃん。私よりお姉ちゃんの方が見せてあげれば？」

「でもさー。幼稚園の先生なんて出会いが無いわよ」

そういつて更にお酒を飲むお姉ちゃん……

「アンタたちがうらやましいわよ……」

「お姉ちゃん？」

「……スー……」

「寝ちやつてる……」

コップを持ったまま座り寝をしてしまったお姉ちゃんに布団を掛け、私は結婚式という言葉を自分の中で反芻してみたのだった。

再会

昨日棕の部屋で呑んで、朝まで寝てたらしいんだけど……途中から記憶が無いのよね……平日だからあたしも朝から仕事なので、棕の家でシャワーだけ浴びて部屋に着替えに戻ってそのまま幼稚園にやってきた。もちろんお酒の匂いはしないか確認済みだ。

「杏せんせいおはようー!」

「はい、おはよう」

朝から子供たちに元気に挨拶されるんだけど、今日は少し頭に響く……昨日呑み過ぎたかもしれないわね……

「あれ? 冷蔵庫の調子が悪いわね……」

職員室にある冷蔵庫から水を取り出して飲もうとしたら、あまり冷えてなかった。まあこの冷蔵庫もかなり古いものだし、そろそろ交換時期かもしれないって園長先生も言ってたしね。

「どうしようっかな……」

実はこの冷蔵庫は園長先生の思い出の品らしいのだ。一職員であるあたしの独断で捨てていいものでは無いんだけど……

「相談するか」

他の先生たちに冷蔵庫の調子が悪いと相談を持ちかけ、園長先生に報告した。壊れた訳じゃないならまだ使いたいという事だったので、町の修理屋に電話して修理に来てもらう事にした。

「こんにちは、〇〇産業です」

「御苦労さま……つえ、朋也?」

「杏? 何でお前が……」

修理に来た業者の人は朋也だった。そういえば昨日棕が、朋也は町のリサイクルショップで働いてるとか何とか言ってたような……

「あーここ、お前の職場か」

「そうよ！ 悪い？」

「誰も何も言って無いだろ？」

朋也は苦笑いを浮かべながら、「冷蔵庫を見せろ」と言ってきた。コイツに任せて大丈夫なのかしら、とは思ったけども、まあ見せるだけならと思いい職員室に案内した。

「これか？」

「そうよ。アンタ、直せるの？」

「見てみなきゃ分からん」

そういつて朋也は冷蔵庫を調べ始める。考えてみたらあたし、同級生が働いてるところ見るの初めてかもしれないわね……

「……なるほど」

「何がなるほどのなのよ？」

「ちよつと黙ってる」

「んな!？」

邪険に扱われたのが気に喰わなくて、あたしはつい高校時代の様に喰ってかかろうとしてしまった。

「これなら直せる。ちよつと道具取ってくるから待ってる」

そういつて朋也は乗ってきた軽トラに戻り工具とか色々持ってきた。

「藤林先生、ちよつといいかしら？」

「あつ、はい！」

園長先生に手招きをされて、あたしは朋也の傍から離れる。

「何でしょうか？」

「あの人、藤林先生の知り合いかしら？」

「……………」

しまったー!? つい朋也といると口調やらなんやらが高校時代に戻ってしまったのよね。職場で積み上げてきた大人しいイメージは、おそろくこれで崩壊しただろう。

「こ、高校の同級生です」

「そうなの。でも、あの冷蔵庫がまだ使えるなら嬉しいわね」
「大切なものですね」

今更だとは思うけど、あたしは仕事用の口調で園長先生と話す。これも全て朋也の所為ね。後で辞書でも投げつけたいわ!」
「おーい、杏? 修理終わった……っと、失礼しました」

園長先生の姿を確認した朋也が口調を改めた。どうやら口調が普段通りになってしまったのは朋也も一緒だった。

「ありがとう。それで、お幾らかしら?」

「そうですね……簡単な掃除と配線の交換だけです……これくらいですね」

電卓を叩いて料金を提示してくる朋也。意外と真面目に仕事はしているようだった。

「それで、後どれくらい使えるかしら?」

「そうですね……痛んでた配線は交換しましたし、後数年は大丈夫だとは思いますよ? もちろん、普通に使えばですけど」

朋也は意味ありげな視線をあたしに向けてきた。さすがにあたしだって冷蔵庫に八つ当たりはしないわよ。

「ではこれで。また何かありましたらよろしくお願いします」

朋也は料金を受け取ると一礼して去っていく。受け取った名刺にはちゃんと会社の名前と朋也の名前が印字されていた。

「なかなかいい人ね。藤林先生の恋人かしら?」

「い、いえ!? そんな関係じゃありませんよ……ただの同級生です」

チクリと胸が痛む。あたしはまだ朋也の事を吹っ切れてないのだからか……

「今度から園の家電の修理は岡崎さんに頼もうかしらね」

あたしに意味ありげな視線を向けてきた園長先生に、あたしは何も言い返せなかった……

「つてな事があつたのよ」

「それを言いにわざわざ……」

仕事終わりに椋の家を訪ね今日あつた事を話す。ちなみに帰り道で椋を捕まえて二日続けて家飲みをするつもりだったのだけど、さすがに椋に怒られた為、今日はお茶会という事になっているのだ。

「でも、岡崎君もしっかりと働いてるんだね」

「しかもこれ見よがしに名刺まで置いていつてさ」

あたしは持ってきた名刺を椋に見せる。

「あつ……この会社って患者さんの自宅の家電の修理も担当してるらしいよ」

「そうなの？」

「うん。この間患者さんのお婆さんから聞いたんだけどね……」

　　棕から聞かされた話は、朋也がそのお婆さんの家の洗濯機を修理した話だった。高校時代あれほどサボってた朋也も、仕事は真面目なんだなって思いながら棕の話聞いていたのだった。

お誘い（脅迫）

漸く退院する事が出来た僕の為に、週末退院祝いをしてくれる事になった。何故週末かと言うと、朋也君も杏さんも仕事が休みで、かつ春原君もわざわざ駆けつけてくれるらしいのだ。何故らしいとしか言えないのかというところ……僕は朋也君から「春原も呼ぶ」としか聞いていないからだ。

「退院したのはいいけど、特にする事も無いから病院にいても変わらないんだよね」

誰もいない部屋……僕は一人ごちて布団に入る。まだ一人で外出する事が出来ない僕は、棕さんが仕事に行ってしまうと部屋に籠っているしか過ごしようが無いのだ。

「あゝあ……病院にいれば棕さんに会えるのに……」

そんな事言っても入院費だってバカにならないのだ。退院の許可をもらったのに何時までも病院にとどまるのもおかしいし、何より病院にだって迷惑なのだ。

「朋也君は何してるんだらうな」

そろそろ仕事の時間も終わりだろう。そうなると朋也君も比較的自由な時間があるだろう。ちよつと前までなら病室を訪ねてきてくれたんだけど、さすがにこの部屋を訪ねてくる事は無いだろうな……だってここは棕さんの部屋だし……

「早く回復して僕も働かなきゃー!」

入院する前に借りていた部屋は、さすがに契約を解除している。難病とされ脚を切るしかなかった病気だったのだ。何時戻れるかわからない僕とずっと契約してくれるわけもないしね……

そんな事を考えていたら、来客を告げるチャイムが鳴り響いた。僕は宅配業者かと思い覗き穴を覗く。するとそこには……

「杏さん？ それに朋也君も……」

何故二人が一緒にこの部屋を訪ねてきたのか……当然の疑問が浮かぶ前に、僕の心は嬉しきでいっぱいになった。

「おじやまします、勝平さん」

「何で俺まで……」

「いいでしょ。どうせ仕事終わりで暇だったんだから」

「勝手に決めるな！」

「えつと……どうぞ」

家主である椋さんは不在だけど、とりあえず来客をもてなす為には二人を部屋に招き入れる。

「でも如何したの？ 二人一緒にここに来るなんて……」

「この間幼稚園の家電の修理に朋也が来たのよ。その名刺に書いてあった番号に電話してあたしが呼んだのよ」

「俺は迷惑だつて言ったんだけどな……」

「なによ!？ あたしが迷惑だつて言うの？」

「勝平はまだ退院したばっかだ。来客があっても困るだけだろうが」

朋也君の考えは実に一般的だ。確かに退院したての僕はろくに来客をもてなせない。だけど杏さんの気持ちもありがたいのだ。暇を持って余した僕にとって、この来客二人はとても嬉しかった。

「そういえば朋也、アンタ陽平に電話したの？」

「いや？ 勝平にかけさせようと思って」

「えっ、僕？」

まさかの朋也君のセリフに、僕は思わず固まってしまった。

「まあ嫌なら俺がかけるが」

「ううん、僕が春原君に電話するよ」

朋也君から春原君の電話番号を受け取り電話を掛ける。二回コー

ル音がして、寮長らしき人が電話に出た。

「そちらでお世話になっっている春原陽平さんをお願いします」

春原君に繋いでもらう為に、僕は自分の名前を告げ待った。

『勝平っていうなー!』

「うわあ!」

急に叫び声が聞こえ、僕は思わず朋也君に受話器を渡した。

「あーもしもし春原か? ……ああ、そうだ。それでお前明日仕事が終わったらかこつちに来い。……あ? お前俺の言う事に逆らうのか?」

朋也君が半分脅すような感じで春原君に話しかける。すると面白そうと言って杏さんが受話器を朋也君から受け取った。

「あ、陽平? 来ないなんて言わないわよね? ……そうそう、アンタは大人しくあたしと朋也の言う事を聞いてればいいのよ」

「うわあ……」

高校時代、春原君は二人の友人(自称)でからかわれたりパシられてたりしてたらしいけども……これは嘘でも無ければ誇張でも無かったんだろうな……二人とも春原君に対して高圧的だよ……

「じゃ、勝平さんに返すわね」

杏さんから受話器を受け取り、僕は春原君に話しかける。

「えっと……大丈夫?」

『ハイ、ボクハオカザキトキョウノイウコトヲキキマス。サカライマセン……』

「うわあ……」

なんだかロボットみたいな受け答えだったけども、如何やら春原君もこつちに来てくれるみたいだった。

「さて、それじゃあ呑むわよ！」

「明日も仕事だろうが……」

「細かい事は気にしないの！ 大体アンタだって呑むでしょ？」

「いや、俺は止めておく。車運転するからな」

「明日には抜けてるって」

杏さんが朋也君にお酒を勧めているけども、朋也君はそれを頑なに拒否している。なんだか逆ならあり得そうだなと思ってたけども、まさか杏さんがお酒を勧めるとは……

「勝平、この駄目な義姉を何とかしろ」

「僕には無理だよ……朋也君の方が付き合い長いんでしょ？ 何とかしてよ」

酔っ払う前から絡んで来る杏さんを、僕も朋也君も持て余し、結局
椋さんが帰ってくるまで杏さんの暴走は続くのだった……

再会の下僕

週末、僕は朋也君と棕さんと一緒に駅まで来ていた。駅に来た理由は東北からやってくる春原君を迎える為だ。

「何で杏のヤツは来てないんだ？」

「なんでも残業らしいですよ。お姉ちゃんも大変なんですよ」

「幼稚園の先生の残業ってなんだ？」

「さあ？ 私には分かりません」

朋也君と棕さんは同級生だと言う事もあって普通に会話出来る仲、夫としては妻自分以外の異性と仲良く話してるのを見たらつまらなイと思うか、相手に嫉妬を覚えるのだろうか、朋也君は僕の友達でもあるのでそんな気持ちは芽生えなかった。

「藤林がアイツを迎える必要はあったのか？ 俺一人で十分だったと思うんだが」

「お姉ちゃんの代わりですよ。それと岡崎君、私はもう『藤林』じゃないですよ」

「だけど、終って呼ぶのもなあ……」

「名前で構いませんよ」

棕さんがそういうと、朋也君は僕に視線を向けてきた。

「ん、なに？」

「いや、旦那がさん付けだからな、と思って……呼び捨ては拙いだろ、色々と」

「気にしすぎだと思うけど。僕も棕さんもそれで構わないって言うてるんだし」

「そうですね。岡崎君は少し気にしすぎです」

「そんなもんか？」

朋也君が訊ねてきたので、僕と棕さんはそろって頷いた。僕たちが呼び捨てにしあうには、まだまだ時間がかかるだろうけども、朋也君

が僕や棕さん呼び捨てにするのは、別に簡単な事だろう。そこに特別な感情など無く、普通に呼ぶだけなのだから。

「なあ勝平」

「如何したの？」

「お前の嫁ってこんな感じだったか？ 俺の知ってるのとちよつと違
うんだが」

「棕さんだって成長してるんだと思うよ」

朋也君が少し困った顔を浮かべてたけど、結局は僕たち二人の勢いに負け、棕さんを名前で呼ぶ事になった。

「おーい！ 岡崎ー！」

「ん？ ……どちら様で？」

「僕だよ！ 春原だよ！」

「春原？ ……俺が知ってる春原ってのは、金髪で白目がチャームポイントなムチャメンだぞ」

「どんな覚え方してるんだよお前は！ だいたい就活の時に髪の毛を黒くしたの、お前だって見ただろ！」

「……あーあー！ ラグビー部に袋にされて、杏や智代にボコボコにされてた自称親友の春原君じゃないですか。久しぶりです、お元気でしたか？」

「……お前は相変わらずだよね」

朋也君の春原君弄りが終わり、僕たちは再会を喜んだ。

「久しぶり。……えーと……あつ！ 冬原君！」

「惜しい！」

「惜しくねえよ！ だいたいさっきまで岡崎が『春原』って呼んでたでしょうが！ 君も相変わらずだね、柊ちゃん！」

「何時までその呼び方なんだよ。失恋してもう何年だ？」

朋也君が「失恋」という単語を口にするのと、棕さんが少し怖い顔をして春原君に近づいた。

「昔も言いましたが、春原君の趣味にとやかく口をはさむつもりはありませんが……勝平さんは駄目です」

「だから誤解だつて言ってるだろー!」

春原君が棕さんに襲いかかろうとした瞬間、朋也君の拳が春原君のお腹にめり込んでいた。

「グヘツ!」

「悪い、つい反射で手が出てしまった」

「岡崎君も、なかなかひどいよね……」

コンクリートに沈んだ春原君から棕さんを離し、僕は春原君に話しかける。

「仕事はどんな感じ?」

「大変だよ。みんな僕を頼り切っちゃってさー」

「へー。俺が芽衣ちゃんから聞いているのと情報が違うな」

「何で岡崎が芽衣から情報もらってるの!」

「この前メールで近況報告をな。その時ついでに春原の情報ももらった」

「お前……何時の間に芽衣と仲良くなってるんだよ!」

妹さんの事で、春原君が熱くなっている。だけど対する朋也君は至って冷静だ。

「駄目兄貴の唯一の友人である俺に、芽衣ちゃんが感謝してくれてるだけだよ。アドレスは手紙に書かれてたからな。はがきを使うより安いだろ、メールの方が」

「何で文通してんだよ!」

「はっはっはー。相変わらず春原は面白いなー」

「誤魔化してるんじゃないよ!」

「あーもう、うっさい!」

「グベエ!」

何処からか飛んできた英和辞書が、春原君の顔にめり込んだ。

「相変わらずのナイスコントロールだ、杏」

「アンタも相変わらず陽平を弄ってるのね、朋也」

杏さんも漸くやってきたので、僕たちは部屋に向かう事にした。

「……柊ちゃんも、なかなかひどいよね」

春原君が何か言っていたような気がしたけど、朋也君と杏さんに殴られて気を失ってしまったので確認出来なかった。

「それで、コイツは如何するんだ？」

「朋也が運べばいいじゃない」

「お前も殴っただろ」

「あたしは女だもん」

「……しょうがねえな。ほら、陽平君。目を覚ませ」

朋也君が春原君の頬をペチペチと叩く。すると春原君が目を覚ました。

「イテテ……なんだか身体中が痛いぞ？」

「そりや摩訶不思議だな」

「あれ？ 何で僕こんなところにいるんだ？」

「勝平の退院祝いをするからって、わざわざ来たんだろうが」

「勝平って言うなー！ 胸が！ 心が痛い！」

終始そんな感じで春原君を弄っていたけども、部屋に到着したらさすがに朋也君も春原君を弄るのを止めた。退院祝いだし、僕も少しは楽しまなきゃ。

退院祝い

僕の退院祝いをするために、春原君を含めたメンバーは棕さんの部屋に集合した。

「そういえば陽平、あんた仕事だったのに良くこの時間に来れたわね」
「半休取ったんだよ！ だいたい杏と岡崎がそうしろって言ったんだろ!？」

「えっ、そんなこと言ったっけ?」

「あんたら似すぎ！ 高校の頃から変わってねえよ！ この似たもの夫婦!」

「ああん?」

「ヒイ!」

春原君が朋也君と杏さんに睨まれて竦み上がった。あの眼光は確かに怖いよね。

「お姉ちゃんも岡崎君も春原君も変わってないね。高校の時のままだよ」

「棕ちゃんも変わってないよね……」

春原君は棕さんの事を名前で呼んだ。朋也君は遠慮して苗字で呼んでいたけど、春原君は無遠慮なんだな。

「それじゃ、さっそく呑むわよ！ 陽平、お酒買ってきて」

「僕が!？ 普通先に用意してるもんじゃないの!？」

「春原」

興奮した春原君の肩を朋也君が叩く。落ち着けどでも言うのだからか？

「止めるな岡崎！ 僕はこの暴君を倒し平和を手に入れるんだ!」

「俺ビールな」

「って！ お前も僕をパシるんですか!？」

「当然」

「うわあーん！ 上下関係なんて、大っ嫌いだー!!」

「……あいつ、財布置いていったぞ」

「じゃ、今のうちに陽平のお金でお酒でも買いに行きましょうか」
「お姉ちゃん……」

杏さんの冗談とも取れない感じに、椋さんが冷めた目を向けた。

「いやーね、冗談にきまつてるでしょ。だいたいお酒なら、すでに冷蔵庫の中で冷やしてるんだから」

「……お前、ほんと変わってないよな」

「なによ！ アンタだって陽平からかって遊んだでしょ」

「まあな」

杏さんと朋也君が笑いあって、それにつられて僕と椋さんも笑った。こうして笑えるくらいに僕は回復したんだって、改めて実感出来た。

「岡崎！ 財布落とした！ ……つて！ もう酒飲んでるし!?!」

「お帰り。お前の財布ならここに落ちてたから、俺と杏で一割もらつといたぞ」

「ちよつー!?! 何勝手に取ってるんだよ!」

「冗談に決まつてるだろ？ だいたい千円しか入ってない財布なんていらねえよ」

春原君……なんでそれしか入ってないのさ。

「そんなことないだろ!?! ちゃんと五千元入って……ない!」

「まあ吞めつて。吞んで忘れちゃえ」

朋也君が春原君にお酒を注いで吞ませる。ちなみに五千元は最初から入っていなかったのだ。

春原君が酔いつぶれて、僕たちは生温かい目で春原君を見つめていた。

「こいつ、なんでこんなに弱いんだ？」

「知らないわよ。そもそも陽平が弱いのは昔からでしょ」

「そうだったな」

「……お酒の話じゃなかったんだ」

椋さんが呆れたように二人を見つめていると、朋也君がふと思い出したように僕に言ってきた。

「そういえば勝平、お前ちゃんと椋に聞いたのか？」

「……まだ」

「何々？ 何の話？」

酔っぱらった杏さんが朋也君の肩に自分の腕を回してくつつく。朋也君は鬱陶しそうにその腕を払い、椋さんに杏さんの相手を任せた。

「はやいとこ言っちゃまわないとどんどんタイミングを失うぞ」

「そうは言ってもさあ……」

ついこの間まで入院していた僕に、結婚式を挙げられるようなお金はない。さすがにそこまで椋さんに出してもらうのは間違ってるだろうし……

「せめてドレスくらいは着せてやれよ。写真屋にあるだろ、貸衣装とか」

「でも……」

「とりあえずちやんと相談はしろよ？ 一人で抱え込むような問題でも無いだろ」

朋也君はそれだけ言うと、コップに残っていたビールを一気に飲み干した。

「杏はともかくとして、このスノピーは如何するんだ？」

「如何するって？」

「ここに寝かせておいていいのかって話だよ。杏はまあ……姉妹だから問題は無いだろうが、こいつは完全なる赤の他人だろ？ 泊めるのか？」

「もうそんな時間？ 結構呑んだんだね」

「お前策か？」

「どうだろう？ お酒呑んだの初めてだし」

そもそも入院してたからなあ……成人しても外に出る機会なんて無かったし。

「掠は……駄目だなありや。完全に酔っぱらってる」

「うわあ……」

掠さんは、杏さんと一緒に布団に倒れこんで眠ってしまったている。

「じゃあないか。この馬鹿は俺の部屋に連れてく。おら、起きろスノピー」

「痛い……」

春原君を蹴り起こして朋也君は自分の部屋に帰ってしまった。そういうえば、僕朋也君が何処に住んでるのか知らないや……

「……そういうえば、この部屋僕が片付けなきゃいけないのかな？」

朋也君は帰っちゃったし、掠さんと杏さんは寝ちゃってるし……

「僕の退院祝いなのに、なんで僕が後片付けをしなきゃいけないんだろう……」

誰に愚痴るわけでもなくそう眩き、僕は空き缶や空き瓶を片付ける
のだった。でもまあ、楽しかったから良かった。

春原弄り

退院祝いの翌日、今日は休日という事もあって僕たちの部屋には泊まっていた杏さん、そして春原君を連れてきた朋也君が朝から集まっている。

「僕、昨日の記憶が無いんだけど……」

「あれだけ呑めば記憶も飛ぶだろ……てか春原、お前は散らかすだけ散らかしてさっさと寝ただろうが！ 片づけた俺の身にもなりやがれ！」

「痛っ！ なんだよ！ 僕は何もしてないだろ」

「酔っ払いの後片付けなんて、面倒な事させただろうが！ 人の部屋をあれだけ散らかしておいて」

帰ってから何があったんだろう……この場所ではさっさと酔い潰れた春原君だけでも、朋也君の部屋で起きたのかな？ まあ着替えたりお風呂入ったりとしただろうし、起きたのは間違いないかな。

「あたしも……殆ど記憶が無いわ」

「お前も、次の日が休みだからってものすごいピッチで呑んだからな……棕が引いてたぞ」

ちなみに棕さんは朝から仕事なのでこの場にはいない。

「うっさいわね！ だいたいアンタだって呑んだでしょうが！ 何で平然としてられるのよ！」

「俺はお前らほど呑んでない。それに、勝平の呑む姿を見て呑む気が失せた」

「えっ、僕？」

確かに朋也君は途中からお茶とかを飲んでたけど、まさかその原因が僕だったとは……

「一番呑んでた勝平が平然としてるんだから……お前、入院中に呑んでたのか？」

「ううん、昨日が初めてだよ？」

「生粋の策だな……いや、粋と言うべきか」

「ううう……勝平って言うな」

「まだ言ってるの、アンタ。ホント気持ち悪いわね」

杏さんが泣き始めた春原君をゲシゲシと蹴る。朋也君は見慣れた光景だという目で二人を見てるけども、僕からしたら驚きの光景だ。

「そういえば陽平、アンタ何時帰るの？」

「今日一日のんびりして、明日帰る」

「何処に泊まるのよ？」

「そりゃ大親友の岡崎君の……」

「……え？ 誰が誰の大親友だつて？」

興味なさそうに新聞を読んでいた朋也君が、春原君の発言に質問する。

「お前も高校時代から変わってねえよな……このやり取り何回やったか分からないぞ」

「ふーん……」

「少しは興味持てよ！ お前の話をしてるんだぞ！」

「うっさいー！」

「ゲバっ!？」

頭を押さえながら杏さんが部屋に置いてあつた英和辞書を春原君に投げつける……何で英和辞書があるのか、とか色々言いたかったけど、朋也君が僕の肩に手を置いて首を左右に振ったので、僕は深入りしないようにした。

「ちようどいいや。勝平、お前掠にまだ言っていないんだろ？ 杏に手伝ってもらったらどうだ？」

「何を？」

「えつと……その……なんていうんだろう……」

急に話せと言われても心の準備というものがある。だけど朋也君に僕の気持ちなんて分かるわけが無いし、杏さんも興味津津という顔で僕の事を見つめている……何処となく棕さんと似てるから恥ずかしいんだけど……

「勝平と棕の結婚式の事だ。コイツが入院してる時に、籍だけ入れて終わりらしいからな。俺にはよくわからんが、女は結婚式とか、ウエディングドレスだとか着たいんじゃないのかって話を勝平にしたんだ」

「そうね……棕も興味が無いわけじゃないでしょうけども、何分仕事忙しいからね……それに、勝平さんも当分はリハビリでしょうし」

確かに僕はまだまともに歩くことすらままならない。杖などを使えば一人でも短い距離なら歩けるけども、長距離ともなると補助が必要なのだ。

「そ、そういう朋也君や杏さんは如何なのさ!」

「ん?」

「二人にはそういうった相手とかいないの?」

苦し紛れの反撃。こんな事でこの二人が止まるはずが無いと僕も分かっている。

「いねえよ、そんな相手」

「私もないわね。子供相手って結構大変なのよ。自分の出会いを探してる余裕なんてないくらいにね」

「僕もないな」

「……………」

「あれ? 何で二人は僕をそんな目で見てるの?」

いきなり会話に加わってきた春原君を、朋也君と杏さんはゴミを見る目で眺めている。

「あの……僕何かしました? ……お願いだから何とか言ってください

い！」

無言の攻撃に、春原君の豆腐メンタルはズタボロになっていく……相変わらずからかい甲斐がある人だなく。

「コイツはさておき、俺や杏の職場で出会いを求めるのは間違ってるような気もするがな」

「そうね。アタシの職場には異性の同僚なんていないし」

「俺んところも同じだ。男数人の小さな会社だし、外回りでも出会いなんて無い」

しみじみとお茶を飲みながら語る二人。ちなみにそのお茶は二人の機嫌を取ろうと春原君が淹れたものだ。

「お茶くみもまともに出来ないのね」

「それで仕事とか出来てるのか？」

息の合った攻撃で、再び春原君弄りを開始する二人。僕から見たらこの二人はお似合いなんだけどな……でもそんな事口にすれば彼のようになるって分かっているんで黙っている。だって昨日似たような事を言った春原君がひどい目に遭わされてたからね……

伝説のパン屋

朝から陽平弄りをして遊び、程よい時間になったので四人でお昼を食べに行こうって話になった。

「勝平は大丈夫か？ なんならコイツに何か買ってこさせるが」

「陽平、あたしメロンパンとクロワッサンで良いわよ」

「何で僕が買いに行くのが前提なんですかね？」

春原君が朋也君と杏さんに文句を言おうとしたけども、二人はそれには付き合わずに話を進めていく。

「杏、お前パンで良いのか？」

「あんまり食べると吐きそうだしね。それで、朋也は何食べるつもりなの？」

「そうだな……テキトーにおにぎりでも買ってこさせるか。春原、俺はそれで。金は立て替えといってくれ」

「あつ、あたしも」

「お前ら……僕をなんだと思ってるんだよ！」

「えっ？ 下僕」

息の合った二人に、春原君は泣きながら部屋から出て行った。

「ちくしよー！ 似たもの夫婦なんて、大っ嫌いだー!!」

「おい、まだ勝平のリクエスト……って、仕方ないバカだな。それじゃ、食いにでもいくか」

「そうね」

春原君が出ていってすぐ、朋也君と杏さんが立ち上がった。

「えっ、いいの？」

「なにが？」

「だって、春原君が買いに行ってるでしょ？」

目の前で春原君が走り去っていったのを、二人も間違いなく見てる

はずなんだけどな……

「冗談だ。ピザでも頼むか」

「そうね。勝平さんもまだ自由に歩ける訳じゃないしね」

「やっぱり春原君は無視なんだ……」

まあそれが彼なんだろうけども、二人はホントに息がピッタリだなあ。

朋也君と杏さんが半分ずつお金を払い、僕たちはピザを食べる事にした。そのタイミングで春原君が部屋に戻ってきた。

「買ってきたぞ……って！ 何でピザなんて頼んでるんだよ！ 僕に買いに行かせたのは何だったんだよ！」

「えっ？ 暇つぶし」

「アンタらやっぱり似過ぎ！ 似たもの夫婦!!」

「ああん?」

「ヒイ！」

「あはあ、朋也君たちのやり取りって昔のままだね」

ほんの数週間……一か月くらいかな、僕たちは濃密な時間を過ごし

ていた。あの時はまだ僕も病気の事を隠してたし、こんな時間が訪れるなんて思ってたな。

「まあ春原は買ってきたパンでも食べてろよ」

「こんなに食えるか！」

「……ねえ、この七色に光るパンって何？」

「え？ ……ああ、パン屋のおっさんがお勧めだっけ言うから買ったんだけど」

杏さんの手には、本当に七色に光っているパンが握られている。あれって如何やって光ってるんだろう？ それ以前に食べても大丈夫なんだろうか？

「よし！ じゃあじゃんけんで負けた春原が、このパンを食べるってゲームしようぜ」

「いいわね。じゃあ早速……」

『負けた春原』って、負けた岡崎と杏は!？」

「じゃんけん……」

「えっ？」

「ぼん」

春原君がグー、朋也君と杏さんがチョキ。

「よっしやー！」

「くそ、じゃんけんぼん！」

「よし、連勝！」

「早く負けなさいよ。じゃんけんぼん」

「如何だ三連勝！ って！ 僕が負けるまで続けるんですかね？」

「当然」

まあ負けた春原君がこのパンを食べるんだから、朋也君と杏さんが負けても意味は無いんだけどね。

「それってイジメだよね!？」

「買った責任って言葉、知ってるか？」

「アンタのお金で買ってきたんだものねえ。もちろんアンタが食べるわよね？」

「はい、食べさせていただきます……」

二人に睨まれて、春原君は七色に光るパンを口に含んだ。勇氣あるなあ……

「うっ……」

「春原？」

「ちよつと陽平？ 大丈夫なの」

「……お前にレインボー！」

「はっ？」

「グフ……」

奇声を上げたかと思ったら、その後すぐに春原君は白目を剥いて倒れた。

「……さて、俺たちはピザでも食うか」

「そうね……」

二人とも見なかった事にした!?

「勝平も食うだろ？」

「う、うん……」

春原君には申し訳ないけども、僕も今の一連の騒動は無かった事にして食事をする事にした。

夕方になってから漸く春原君が意識を取り戻し、明日仕事だからって先に帰る事になった。

「じゃあな春原」

「たまには遊びに来なさいよ」

「絶対来ない！ 僕をイジメて遊ぶんだろ、どうせ」

「……………えっ?」

「チクショー！ やっぱりアンタら息ピッタリっすね!」

最後の最後まで春原君を弄って楽しんでる二人だけど、少し寂しそうに見えるのは僕の間違いじゃないんだろうな。

「ほら、これ持って帰れよ」

「忘れ物は駄目よ」

「ありがとう……………って！ このパンはもういらないから!」

春原君に手渡されたのは七色に光るパン。さっき一つ食べてたのにまだあるんだ……………

「せっかく買ったんだ。家族にも食べさせてやれよ」

「人間じゃ無ければ美味しいんじゃない?」

「僕も家族も全員人間だよ！ どんな家族想像してるんだよ!」

「…えっ? お前（アンタ）みたいの!」

最後の最後まで、本当に春原君を弄り倒した二人は、満足したように僕たちの部屋に戻っていく。夜も騒ぐつもりなんだろうか……………

思い出の中の朋也

仕事を終え家に帰ってきたら、完全に酔っ払ったお姉ちゃんと、それを何とかしようとしている岡崎君がいた。

「あつ、棕さん！ 棕さんも手伝って」

「勝平さん、これはいつたい……」

「杏が大量にビールを飲んでな。こんな時間から酔っ払ってるんだよ」

確かにお姉ちゃんの前には、大量のビールの空き缶が置かれていた。転がって無いのは、勝平さんと岡崎君が何とかしたんだろうなと考える。

「お姉ちゃん、ホント酒癖が悪いんだから……」

「らって！ 幸せそうな勝平さんを見てはら、飲まなきゃひやつれらへらいんらもん！」

「呂律が回らなくなるまで飲むな！ 大体明日も仕事だろうが！」

お姉ちゃんが暴れ出しそうになってるのを何とか止めている岡崎君がツツコミを入れる。そういえば高校時代からこの二人がツツコミを担ってたんだっけ。

「アンタだって幸せそうな二人をみれ、何かおもっらでしよ？」

「棕、この酔っ払いをどうにかしてくれ！」

「ええ!? 私ですか!？」

「お前の姉だろ」

確かにそうなんです、私ではお姉ちゃんをどうにか出来るかどうか……

「別に勝平でもいいが。義姉だろ？」

「僕じゃ無理だよ」

「ああもう！ 面倒だ！」

岡崎君は、手近にあつた雑誌を丸めてお姉ちゃんの後頭部を叩きました。

「うー！」

「無理矢理寝かせるに限るな」

酔っ払いの相手に慣れていているような岡崎君の行動に、私と勝平さんは引っかけかりを覚えました。

「朋也君、酔っ払いの扱いに長けてるのは何で？」

「あ？ ああ、親父がアル中で酒癖が悪かったからな。高校入る前まではしょっちゅう叩いて寝かしてたんだよ。あの事故の後からはまったく関わらなかつたがな」

「二事故？」

私と勝平さんは同時に首を傾げ、岡崎君に説明を求めました。

「俺の右腕が肩より先に上がらないのは知ってるよな」

「うん。何となく聞いた気がする」

「私も。それで岡崎君は体育の授業に出ないって聞いた事があります」

「まあサボってたのは別の理由もあるんだけどな。で、その怪我の原因が酔っ払った親父との喧嘩でな。割れた窓ガラスで肩の神経が傷ついてな。当時はバスケをやってたけどその怪我が原因でバスケも出来なくなり、推薦で高校に入ったのはいいがバスケも出来ずにただうだうだと過ごしてたんだよ」

「そうだったんだ。朋也君って色々大変な人生を過ごしてたんだね」

「お前に言われたくはないがな」

そういつて岡崎君は笑いました。高校時代にその事を聞いてれば、もう少し岡崎君の力になれたのかもしれないなかつたと思いましたが、岡崎君は多分気にするなど言って終わっちゃうんだと思いました。

「そんじや、この酔っ払いは二人に任す。俺も明日朝早いから帰るわ」

「うん。じゃあね、朋也君」

岡崎君を見送り、私たちは気まずい空気を感じていた。

「気軽に聞いていいような内容じゃ無かったね」

「そうですね。でも、岡崎君の事をもっと知れたっていうのは良かったと思います。勝平さんを説得する時に、岡崎君は自分の身上を話してくれました。多分ですけど、今回も私たちになら教えてもいいと思ってくれたんだと思いますよ」

「そうだね……僕が孤児だったって言った後、朋也君は片親だつて教えてくれた。その時僕は、朋也君はその残った親に愛されてるんだと思っただ。でも、如何やら違つたみたいだね」

「岡崎君も春原君も、色々を抱えてたんですね」

春原君は確か、部活の先輩ともめ退部に追いやられたんでしたっけ。前にお姉ちゃんから聞いたような気がするんですが、正直あまり興味が無かつたんですね……

「朋也君はさ、高校生の時荒れてたんだよね？」

「一般的な不良とはまた違いましたけども、確かにあの高校では荒れていたと表現されても仕方なかつたような気がします」

「でもね、僕と一緒にいる時は普通の男の子だった。年下だけど容赦のない、だけでちゃんと僕の事を考えてくれる優しい人だった」

「そうですね。私も岡崎君に助けてもらつた事があります」

高二の時の球技大会。私はお姉ちゃんと間違えられて試合に参加させられた事があります。その時ボールを思いつきり踏んづけてしまつて足を捻つてしまいました。周りは私のドジに笑つたのに対して、岡崎君はその周りに怒り、私の事を心配してくれました。まあその時岡崎君は私をお姉ちゃんだと思つてたんですね。

「うくん……朋也、アンタ何で……」

ちようどしんみりしたところでお姉ちゃんが寝言を発しました。

そのタイミングに私と勝平さんはそろって笑いだしました。やつぱりお姉ちゃんはまだ、岡崎さんの事を想ってるんだな。私たちの心配よりもお姉ちゃんの方が心配だよ。

「ご飯作りますね」

「うえ!? 大丈夫、朋也君が買ってきてくれてるから」

「そうですか」

一瞬勝平さんが嫌な顔をしたような……気のせいですかね。

リハビリ散歩

棕さんがお休みの日、僕は棕さんに付き添ってもらって外を歩くのが日課になっている。リハビリは病院でもちやんとしてるんだけど、少しでも早く一人で歩けるようになりたいのだ。

「勝平さん、疲れましたか？」

「え？」

考え事をしていたので足を止めていたら、棕さんが心配そうに僕の顔を覗きこんできた。ああ、やっぱり棕さんは優しくて美しい人だな

……

「本当に大丈夫ですか？」

「うん、平気。ちよつと棕さんの美しさを再確認してただけだから」

「勝平さんたら……」

照れてしまい僕から視線を逸らす棕さん。結婚したといつても長い間、僕は入院生活で棕さんと二人で過ごした時間はそれほど多くは無い。だからではないが、結婚して数年経つものにも関わらず、僕たちは付き合いたての恋人同士のような反応を見せるのだ。

「勝平さん、あれって岡崎君じゃないですか？」

「えっ、朋也君？」

……
この時間なら朋也君は仕事のはずだ。こんな場所にいるはずが

「ホントだ」

棕さんの視線の先では、朋也君が女性にお礼を言われているようだった。遠目では分かりにくいのが、朋也君が女性を脅してるなんて発想は僕たちの中には起こり得ないのだ。

「行ってみますか？」

「そうだね。まだ朋也君もあそこにいるし」

今は外回りなのだろうか？ 回収に使つてると聞いた軽トラも見当たらないのを見ると、多分そうなんだろうな。

「こんにちは、岡崎君」

「ん？ よう、勝平に掠か。何かあったのか？」

「ううん。ちよつとりハビリ代わりにお散歩してたら朋也君を見かけたから」

「あの、本当にありがとうございました」

「いえ、それではお氣をつけて」

僕たちが話しかけたからだろうか、女性が改めてお礼を言つて朋也君から離れていく。朋也君も穏やかな表情で女性を見送り、僕たちに視線を戻した。

「あの女性は？」

「ん？ ああ、道を聞かれただけだ」

「それにしても随分と感謝してましたが……」

「なんでも二十分は困つてたらしいんだが、誰ひとり声を掛けてくれなかつたらしい」

最近はそのいう事も多いらしいね。携帯やらで色々と調べられるし、他人と無理に関わろうとするなんて面倒だという考えが主流になつていたりとか……最近の若い者はって考えはおかしいかな？ 僕だつて一応は「最近の若い者」なんだから。

「じゃあ俺も行くわ。ご近所回りをして営業中なんでな」

「そう、じゃあまたね」

朋也君は僕と掠さんに会釈をして僕たちが歩いてきた道を進んでいつてしまった。何時か朋也君とも一緒に歩ける日が来るのかな？

「それじゃあ勝平さん。そろそろ私たちも行きましょうか」

「うん、そうだね」

「お昼のお買いものをしていかないと。もう材料もありませんし、美

美味しいものを勝平さんに食べてもらいたいですし」
「そ、そうだね……」

棕さんの料理の腕は、高校時代からさほど進歩していない。それでも、窓を開ければ空から鳥が降ってこなくなっただけマシなのかもしれないが……

午後は二人で部屋でのんびりしていたのだが、夕方近くなって杏さんが部屋を訪ねてきた。最近毎日来てるような気がするのは僕の気のせいなのだろうか？

「ちよつと聞いてよ棕」

「なに？ 如何かしたの」

「あたしの専門学校の同期が結婚するらしいんだよね」

「そうなんだ」

「『そうなんだ』って、アンタ反応薄いわね！ 同い年が結婚するのよ！？」

「そんな事言われても……私はもう結婚してるし」

「あゝ……そうでしたね……アンタに愚痴ったあたしがバカだったわ」

口で文句を言いながら、杏さんは僕を見てきた。何となく居心地が悪かったので、僕はあくまで自然にその場から移動する事にした。

「ちよつと勝平さん、何処行く気？」

「と、トイレだよ」

もう何回もこの視線を浴びているけども、杏さんが疑っている時の視線は本当に鋭くて怖い。朋也君は慣れているようだったけども、僕はあの境地に至るまで何年かかるんだろうな……

「お姉ちゃん、勝平さんに八つ当たりは止めてよね」

「分かっているって。ただちよつとアンタたちがうらやましいって思っただけよ」

「羨ましい？」

「ほら、出会ってすぐに意気投合したみたいだったし、その後も順調に……いや、色々あったけど二人の关系的には問題なく進んで結婚したでしょ？ あたしもアンタたちみたいに運命の出会いってものをしてみたいわねくって思ってただけよ」

逃げ出した手前すぐに戻れないので、僕は廊下で二人の話を聞いていた。確かに色々あったけども、僕と涼さんの関係には特に大きな障害は無かったな。

「なら岡崎君は？ お姉ちゃんとあそこまで付き合える人は他にいないし」

「な、何でそこで朋也なのよ！ あたしとアイツはそんな関係じゃないしー」

「でもお姉ちゃん、岡崎君の事好きだよね？」

「ッ!？」

そっか……杏さんは朋也君の事が好きなんだ。今度朋也君に会ったらそれとなく聞いてみようつと。

友人の運転で

棕さんとリハビリ代わりに散歩をしていたおかげで、僕の脚の回復は普通より早い感じなのだそう。それでもまだ一人で歩くには不安が残ってるので、こうして杖を使っているのだけでも。

僕の見たい目は朋也君よりも幼い感じなので、こうやって杖をついていると周りの人が子供なのに大変そう、という視線を向けてくる事があるのだ。僕は声を大にして言いたい。僕は立派な大人だと。

まあ僕が歳より幼くみられるのは今に始まった事じゃないし、朋也君も最初は僕が年上だとは気づいてなかったしね。

「よう」

「？」

病院帰りに背後から声をかけられて、僕は振り返る。こんな風に声をかけてくる知り合いなんて、僕には一人しか思い当たらないから特に誰だと思える事も無かった。

「朋也君、如何したの？ こんな場所で」

「近所に家電の修理に来てたんだよ。そうしたらお前の姿が見えてな」

「そっか」

「乗ってくか？」

朋也君は自分が運転してきた軽トラを指差す。僕は免許を持っていないから運転は出来ないけども、何時かは自分で運転してみたいという希望は前からあるのだ。

「邪魔じゃない？」

「大丈夫だ。俺も後は戻るだけだし、お前の……いや、お前らの家に寄るくらい問題無いぞ」

朋也君は僕の部屋ではなく棕さんの部屋だという事を思い出したのか、わざわざ言い直す。意外と律儀なんだよね、朋也君って。

「じゃあお願いしようかな。この間歩いて帰ってたらお婆さんに心配されちゃったし」

「仕方ないだろ。お前みたいな若いヤツが杖ついて歩いてるんだから」

「そんなに心配されるような事じゃないんだけどな……今だって念のために杖を使ってるだけなんだから」

そんな事を話しながら、僕は朋也君の運転する軽トラに乗り込んだ。荷台には様々な工具が乗つけられてたり、回収した家電製品も無造作に積まれている。

「あれって如何するの?」

「ん? ああ、修理出来そうなら会社で直す。無理そうなら修理の練習に使ったり、使えそうな部品だけ取り出して後は処分だな」

「なんだか大変そうだね……」

「まあな。でも、直して使えそうなら持って帰っても良いって言われているから、意外と便利だぜ」

「そうなんだ」

自分で修理したものを使えるってなんだか羨ましいな。自分の手で壊れたものを直す、なんだか男らしい感じがする仕事だ。

「そういうえば勝平は携帯持っていないんだっけ?」

「えっ? うん、この間まで入院してたし、親しい友人も殆どいないしね」

「まあ俺も就職するまで携帯なんて持ってなかったけど、意外と便利だぞ」

「朋也君は春原君とやり取りとかしてるの?」

「いや? あのバカとはしてない。その妹からは偶にメールが来るがな」

朋也君は前に一度だけ春原君の妹さんと会った事があるらしいのだ。その時に春原君の近況を知らせてほしいと頼まれて文通を始め、

今はメールでやり取りしているらしいのだ。

「そういえば椋からメールも偶に来るぞ」

「えっ!? 朋也君、何時の間に椋さんとメールアドレス交換してたの？」

「再会して暫くしてから。お前の近況とか色々な」

「そうだったんだ……」

自分の奥さんと友人がメールのやり取りをしてるなんて、なんだか複雑な気分だな……まあ椋さんに限って浮気は無いだろうし、朋也君もそんな事をするような人じゃないって分かっているから安心なんだけど。これが春原君なら疑うんだろうけどね。

「……勝平、実は椋から相談を受けてるんだが」

「ん？ どんな内容？」

「最近お前がこそこそと何かを調べてるって。あれって結婚式の事か？」

……椋さんにバレてたんだ。僕的にはバレ無いように細心の注意を払っていたつもりなんだけども……

「黙ってるって事は凶星か。いい加減話しちまえよ。言いにくいなら俺が言ってやろうか？」

「うん……ううん。僕が言うよ。椋さんだって心配してくれてるんだ。夫である僕がその心配を取り除かないといけないよ」

「そうか……ほら、着いたぞ」

話しながらだったのか、病院からここまで短く感じた。きっと朋也君が一緒だったからなんだろうけども、恥ずかしいからそんな事は声には出さなかった。

「早めに言っちゃえよ。うだうだしていると椋が更に心配するだろうし」

「うん、ありがとう」

朋也君に手を振り、僕は部屋の中に入って考える。確かに最近色々調べてみたけども、やっぱりお金がかなり掛ってしまうのだ。そうなるど貸衣装などで済ませるのまありかなって考えたんだけど、こちら辺は椋さんと相談しなければならぬ部分なのだ。朋也君の言うように早めに相談しないとずると先延ばしになってしまうだろう。

僕は誰もいない部屋で一人ぶつぶつとその事について呟きながら考え込んでいた。この光景を誰かに見られたら、今度は頭がイカレたのではないかと脳外科に連れて行かれそうなくらい、僕は一人でブツブツと呟いていたのだった。

営業の成果

会社に戻ると社長から呼び出された。

「なんです？」

「悪いが、ここに向かってくれ。急ぎで修理を頼みたいそうさ」

「分かりました。ですが、何故俺なんです？ 他にもいたでしょうに」

外回りを担当していたのが俺なのだから、会社には数人の社員が残っていたはずだ。急ぎというなら俺ではなくそっちを向かわせた方が早かったのじゃないだろうか？

「お前を」指名だったんだよ。早く行ってこい」

「はあ……分かりました」

「ご指名とか言われてもな……この苗字に見覚えは無いし、営業で訪ねた家でも無いんだけどな……」

軽トラを運転しながら、俺は何故自分が指名されたのかずつと考えていた。ここ最近営業のおかげで顔と名前を覚えてもらってはいるけども、それでも訪ねた事の無い家から依頼があった事は無い。もしかして誰かから噂を聞いて頼んだのだろうか？ それでも俺を指名する理由が分からない……まあ考えても仕方ないので止めるか。昔から考えるのは面倒だからしてこなかったのだから。

「ごめんください、〇〇産業です」

「はい」

到着して家の中にいる人に声をかける。チャイムがあればよかったのだけでも、如何やらこの家にはチャイムが無いようだったので声をかけたのだ。

「ごめんなさいね、わざわざご指名しちゃって」

「いえ……それは問題ないですが、何故自分を？ 何処かでお会いしましたっけ？」

家から出てきたのは七十歳くらいの老婆だ。俺の記憶の限りでは会った覚えは無い。

「岡崎さんの事はご近所さんから聞いたんですよ。若いのにしっかりと
していて仕事も出来る人だって」

「そうですか」

確かにこの辺りで前修理作業をした事がある。なるほど、そこから聞いて俺を指名したのか。

「それで、修理が必要なものはどちらに？」

「これなんですけどね」

家の中に案内され、俺は指差されたテレビを修理する為にまずは調べる。随分と年季の入ったテレビで、これなら買い換えた方が良くかもしれないと思ったのだが、わざわざ修理を頼むと言う事は何か思い入れがあるのだろう。

「これなら直せそうですね。ちよつと道具を取って来ますので待っていてください」

軽トラに積んである工具を取りに戻り、俺は修理を始める。慣れたものだが、修理中にじっくりと見られるのは如何しても居心地が悪いのだが……

修理を終え料金を受け取って俺は会社に戻ってきた。さつきはまだちらほらと残ってるやつらもいたが、今は社長だけだった。

「戻りました」

「おう、ご苦労さん」

「これ、今日のお金です」

外回りで得た利益を社長に渡して、俺は私服に着替える為に更衣室へと移動する。更衣室と言ってもロッカーが置いてあるだけの普通の部屋なのだが。

「おい、岡崎」

「はい？　なんですか」

「お前、最近成績が良いじゃねえか。この調子で頼むぞ」

「はい！」

俺がここに入った時には社長と二人だけだったけども、今では少ないが後輩もいる。とはいっても外回りにはまだ出てないペーパーなのだが。

「お先に失礼します」

「おう」

社長に一声かけてから、俺は会社を後にして部屋へと帰る事にした。途中で見知ったような女の背中を見つけ、俺はとっさに隠れた。

「……って、何で俺が隠れなきゃならんのだ」

よくよく考えてアホらしくなり、俺はその背中に声をかける事にした。

「よう、お前も今帰りか？」

「あつ、岡崎君。はい、私もついさつき終わりましたので」

「大変そうだな」

「それは岡崎君も同じです。そういえば、勝平さんを乗せてくれた軽トラって岡崎君のですよね？　ありがとうございます」

「いや、それは別に良いんだが……何でお前が知ってるんだ？」

勝平を乗せたのはさつきだ。家に帰って無い椋がその事を知ってるのはおかしいような……

「たまたま見ていた患者さんがいまして、特徴から岡崎君かなって」

「特徴？」

「勝平さんと親しげに話す少し年上風で目つきが鋭そうな男の人って」

「……俺は年下だし、それほど目つきも鋭く無いぞ」

高校時代には多少そんな事を言われた事もあるが、今はそんな事は無いはずだ。

「遠目で見たら岡崎君は大人っぽいのでしょうか。それに、勝平さんと比べれば十分鋭い目つきをしてるんだと思いますよ、岡崎君は」

「アイツと比べるなよな……」

全体的にぼやつとしてる勝平と比べられたら、大抵の人間の目つきは鋭いと言われるだろうな……

「良かったら寄っていきませんか？　腕によりをかけて料理を作りますので」

「い、いや……勝平に悪いし、どうせ杏が入り浸ってるんだろ？　杏に食べさせてやったら如何だ？」

「お姉ちゃん、私の料理食べてくれないんですよ」

……さすが姉、自分の妹の料理の腕がどんなものか知ってる様だな。俺は何とか理由をつけて椋たちの家に寄る事を断り自分の家に帰る事に成功した。スマン、勝平……椋の料理はお前が処分してくれ。

ボケボケ夫婦

退院祝い以降、私は朋也に会っていない。椋や勝平さんとは良く会ってるらしいんだけども、こうもタイミングが合わないものなのかしら？ ひよつとして朋也があたしを避けてるとか？

「お姉ちゃん、何怖い顔してるの？」

「別に怖い顔なんてしてないわよ！ ……って椋？ 何でここにいるの？」

「何でって……ここは私の家なんだけど」

そうだった。あたしは今、椋の家に遊びに来てたんだっけ……「えつと……それで？ 勝平さんの様子がおかしいのは何時からなの？」

「うん、ちょうど退院祝い辺りからかな……」

退院祝い……じゃあ心当たりがあるわね。

「きつと春原菌に感染したんじゃない？」

それは昔朋也が作り出した恐ろしい菌の名前。感染するとヘタレになり、最終的には陽平のような残念な人間になってしまうというウイルスだ。

「そんなわけは無いと思うけど……春原菌って何？」

「そつか。椋は知らないんだっけ」

「うん……春原君が関係してるってのだけは分かるけど」

「それよ。アイツみたいになっちゃう菌だって朋也が言ってた」

「お姉ちゃん、それって岡崎君の冗談だよね？」

「そうよ？」

まさか本気で椋が信じるなんて思っていないし、場を和ませる冗談としては結構なものだと思ったのだけでも、椋の表情は冴えなかった。

「冗談はさておき……」

「さておくんだ……」

「勝平さんが挙動不審なのは何かサプライズでも企画してるんじゃないの？ いや、あたしは知らないけどさ」

実際あたしは勝平さんが何を考えているのか、何を調べているのかなんて分からない。友人の朋也なら知ってるのかもしれないけど、義姉であるあたしには相談しにくい事もあるんでしようね、きつと。

「そうなのかな？ 今日だって一人で出かけちゃうし。もしかして浮気とか!？」

「それは無いでしょ。勝平さん、椋にメロメロなんだし。それに収入もないリハビリり生活中の中性的な男性と関係を持つような物好きもそうそう居ないと思うけど」

まああの見た目でお金持ちなら引く手あまたでしょうけども、勝平さんは現在無職、しかもリハビリり中なのだ。浮気なんてしている暇なんて無いでしょうしね。

「やっぱり岡崎君に聞くしかないのかな……」

「椋、アンタ朋也の連絡先なんて知ってるの?」

あたしは名刺をもらったから電話出来るけども、椋があの名刺をもらってるとは考えにくいし……

「普通に携帯の番号とアドレスは教えてもらったけど? 勝平さんに何かあったら連絡してほしいって」

「ふ、ふくん……そうなんだ」

朋也のやつ、アタシとはアドレス交換してないのに椋とはしたんだ……人の妹にちよつかい出すようならタダじゃおかない……って、何を考えてるんだあたしは。

「お姉ちゃんは岡崎君とアドレス交換してないの?」

「えっ? ええ、特に連絡する必要もないしね」

「ふくん」

椋があたしの事を疑ってる目をあたしに向けてくる。双子だから分かるのか、それともかつては同じ男を好きだったからなのかは分からないけど、椋はあたしがまだ朋也の事を少なからず想っている事に気が付いている。

「今度勝平さんと三人で岡崎君と出かけようと思ってるんだけど、お姉ちゃんも来る?」

「えっ!? 何であたしまで……てか、何で朋也が一緒なのよ」

「だって岡崎君、私とも勝平さんともお友達ですし、貴重なツツコミですもの」

「あ……アンタたちは自分がボケだって自覚はあったのね」

確かに椋と勝平さんの両方と友人関係で、この二人相手にツツコミを入れられるのは朋也だけだろう。何せあたしは椋の姉で勝平さんの義姉、そして陽平は友人ですらないものね。

『酷くないですかね、それ!』

「……? 椋、あんた今何か言った?」

「ううん。何も言っていないよ?」

「そう……空耳かしら」

何か聞こえたような気がしたんだけど、如何やら空耳だったらしい。あたしも疲れてるのかしら……

「ただいまー。あれ? 杏さん、いらしてたんですね」

「おじやまてるわよ。ところで勝平さん、何処に行ってたのかしら?」

「リハビリを兼ねて散歩に。あとはブラブラと」

「椋は連れずに?」

「何時も連れ添わせたら椋さんも大変だろうし。それに、何かあったらちゃんと電話するから大丈夫ですよ」

そういつて勝平さんは買ったばかりの携帯を取り出して見せてくれた。まあこの人が浮気をする甲斐性なんてない事は分かっている

「だけど、やっぱり気になるのよねえ……」

「そういえばさつき、この近くで朋也君の軽トラを見たよ」

「岡崎君、まだ仕事なんですかね」

「朋也君も忙しいらしいから……この時期は家電製品が壊れやすいのかな？」

「如何でしょう？」

このボケボケ夫婦の会話に付き合うのは結構疲れる。それでもあ
たしがこの部屋に入り浸ってるのはやっぱ、一人で部屋にいてもつま
らないからなのかしら？ あたしも誰かと付き合って結婚でもすれ
ば、こうやって妹夫婦の家に入り浸る事も無くなるのかしら……その
答えは当分得られそうになさそうね。

漸く…

朋也君に散々言われたからではないが、僕は遂に棕さんに例の事を相談する事にした……のは良いのだけでも、いざ切り出そうとするとなかなかタイミングがつかめないものだな……

「棕さん、如何かしたのですか？」

「えっ!? ……うん、あのちよつと聞きたい事があるんだけど」

「なんででしょう？」

棕さんの瞳を見ると決心が揺らぐ……別にやましい事をしていないわけでもないのに、何でなんだろう……

「棕さん？」

「えつと……棕さんってドレスとか似合いそうだよな」

「はあ……？」

何でこんなヘタレた展開になっちゃうんだよ……これじゃあ春原君と大差ないじゃないか……

「あの、棕さん。もしかして結婚式とか考えてくれてるんですか？」

「えつと……はい……」

結局自分から切り出す事が出来なかった挙句に棕さんに言い当てられてしまった……これじゃあ朋也君に手伝ってもらった方が良かったよ……

「前に朋也君に言われたんだ。『もしかしたら棕さんは結婚式をしたんじゃないか』って」

「そうですか、岡崎君が……」

棕さんは少し考えてから、僕に視線を改めて向けてきた。

「実は私もお姉ちゃんに言われてたんです、『アンタたち結婚式はしないの』って」

「そうだったんだ……でも、何で朋也君も杏さんも？」

「分かりません。ですが、私は別に結婚式なんてしなくても、勝平さんと一緒にいられるだけで幸せです」

「うわあ……なんだか恥ずかしいや」

僕だって棕さんがいてくれるだけで幸せを感じるけど、改まって言われるとにやけちゃうしなんだかむずむずする。

「じゃあせめて写真だけでも。そういう貸衣装とかがある場所があるんだ」

「でも、お金掛りますよね？ それに勝平さんはまだリハビリ中です」

「うん……」

棕さんの稼ぎだけで生活しているので、現状の僕はいわゆる「ヒモ」。何とも情けない状況なのだ……

「それに、お姉ちゃんや岡崎君にとやかく言われる筋合いは無いですし」

「え？」

「だって二人とも独り身ですし、決まった相手もいませんしね」

「確かに……」

朋也君も杏さんも、恋人もいなければ親しい異性もいないって言うてたな、そういえば……仕事が忙しいらしいけども、もう二人とも仕事には慣れてきてるはずなんだけどな……

「おっじやましませーす！」

「……何で俺まで捕まらなければならなんだよ」

「いいじゃない。どうせ一緒に遊びに行く友達なんていないんでしょ？」

「お前に言われたくない！ 妹夫婦の家に入り浸ってるようなヤツにはなー」

噂をすれば影……では無いだろうけども、タイミングよく杏さんと

朋也君がやってきた。朋也君は来たような感じでは無かったけども。

「お姉ちゃん、またなの？」

「良いじゃない別に。子作りしてる訳じゃないんだし」

「……お前って実は春原と大差ないんじゃないか？」

「へ？ 何だよ」

朋也君は素面で撃退したけども、僕と椋さんはそうはいかなかった。顔は真っ赤になってるし、お互いの顔を見る事も出来なくなってしまうているのだ。

「あれ？ 二人とも、如何かしたの」

「お前のせいだ、お前の」

「あたし、何か変な事言った？」

「自覚なしかよ……」

朋也君がいてくれたから何とかかなりそうだけでも、もし朋也君がいなかったら僕たちは気まずい雰囲気の中で過ごさなければならなかったのだろうな。

「ありがとう、朋也君」

「はっ？ なんだよいきなり……」

「岡崎君がいてくれるおかげで、何とかかなりそうです」

「……そういう事か。お前の姉ちゃんって大概だな」

「昔からです……」

「何よ！ あたしが何をしたって言うのよ！」

「ハア……自覚なしか」

とてつもない爆弾を投下したにも関わらず、本人はその事に気づいていない。これ以上性質の悪い事は無いだろうな……

「あーなんかイラつく！ とりあえず呑むわよ！」

「お前、呑み過ぎ。お茶にしとけ」

朋也君も慣れたものなのか、この家のお茶の場所を心得ているよう

だった。すばやく杏さんからお酒を取り上げると、淹れたばかりのお茶を杏さんに手渡す。

「お茶なんかじゃやってられないわよ！」

「面倒なヤツ……」

そう言いながら朋也君は僕と椋さんの分のお茶も淹れてくれた。

「大体、何で俺までお前に付き合わにやいかんのだ」

「良いじゃない別に！ 腐れ縁よ！」

「それから、事あるごとにこの部屋を訪れようとするな。勝平たちにも迷惑だろ」

「だから別に良いでしょ！ 姉が妹の部屋を訪ねて何が悪いのよ！」

「限度つてものを考えろって言ってるんだ。二人だってゆっくりしたい時があるだろ」

「じゃあ何処に行けって言うのよ？」

「知らん。そんなの自分で考えろ」

杏さん相手にここ迄言える朋也君に、僕と椋さんは羨望の眼差しを向ける。だって何時も言いくるめられて終わっちゃうんだもん……

椋の料理の腕

写真を撮るのは、とりあえず僕のリハビリが終わり就職先が決まったらと言う事で落ち着いた。でも一人で悩んでたのに、なんだかあつさり決まったなあ……

「そういえば勝平さん」

「ん？ 何、椋さん」

僕からの話が終わったのを見計らって、今度は椋さんから何か話があるようだった。

「勝平さんはお姉ちゃんとう崎君の関係を如何思いますか？」

「朋也君と杏さんの？ ……仲は好きそうだよ。あと息も合ってる」

この間の春原君弄りは絶妙なコンビネーションを見せてくれたし、普段からあの二人が素の自分を出せているのは互いがある時だけだと思っっている。

「勝平さんも気づいてると思いますけど、お姉ちゃんはう崎君の事が好きなんです」

「へえーそうなんだ……？ ええ!？」

しれっと椋さんが言ったからあまり大した事ではないのかと思っってしまったが、少したつて重大な事だった事に気がついた。杏さんが朋也君を好き？ いったいいつからなんだろう……あとその事を朋也君は知ってるんだろうか？

「その反応……まさか勝平さん、気づいてなかったんですか？」

「う、うん……だつてあの二人は出会った時からあんな感じだったし……それに朋也君もそんな事気にしてない感じだし……」

「まあおそらくう崎君も気づいてないでしょうけど……だつてお姉ちゃんは高校時代からう崎君の事が好きなんですもの」

「そ、そうなんだ……」

と言う事はだよ？ 僕と出会った時には既に杏さんは朋也君の事が好きだったんだよね？ それなのにあの二人は僕と棕さんの事を気にしたりしてたの？ 自分たちの事は棚に上げて？

「岡崎君、高校時代は結構モテてましたし……まあ直接誰かが告白した、と言う事は聞きませんでしたけど」

「ひよつとして棕さんも？」

「ええ……ですが、勝平さんが私の運命の人でしたし……」

「う、うん……そうだね……」

あまりにストレートな表現に僕と棕さんは揃って頬を真っ赤に染めてしまった。言われた僕は兎も角、言った棕さんまで真っ赤になるなんて……結婚してもう何年目なんだよ、って朋也君がいたらツッコまれそうな展開だ。

「如何やら勝平さんが悩んでる時に岡崎君に色々相談していたようですし、今度は私たちが岡崎君とお姉ちゃんの恋を応援する番だと思うんですよね」

「そうだね！ 朋也君にも、杏さんにも色々相談に乗ってもらったし、今度は僕たちがあの二人の幸せを後押しする番だよね！」

棕さんと二人意気込んで、僕はとりあえず話しやすい朋也君を部屋に呼ぶ事にした。何故杏さんじゃないのかというと、こんな事言い出したら棕さんと僕、揃って怒られそうだったからだ……

部屋に来た朋也君に僕たちの思いを伝えると、朋也君は苦笑いを通り越して呆れ顔を浮かべた。

「自分たちの事もままならないのに人の事にちよつかい出すのか？」

「だいたい杏もいい迷惑だとか言うぞ、絶対」

「あうう……」

朋也君に呆れられて、僕と椋さんは揃って肩を落とす。せつかく決意したのにあっさり拒否されるなんて……しかも確かに朋也君の言うとおりなだけ……

「それで？ お前らの結果はどうなったんだ？」

「うん……とりあえずは僕のリハビリが終わって就職先が見つかったらって事になった」

「そっか……まあ椋がそれで良いなら良いんじゃないやね？ 勝平だって無理はしたくないだろう？」

朋也君が買ってきてくれた惣菜を椋さんがお皿に移している間、朋也君は僕の気持ちを言い当てた。確かに無理をして椋さんに負担はかけたくないし……そもそも、今僕は収入が無いし貯金も無いのだ。これ以上椋さんの稼ぎに甘えるのは避けたい。

「そういえば岡崎君、この部屋に来る時何時もおかずを持ってきますが、たまには私の料理も食べて下さいよ。勝平さんも美味しいうって言ってくれますし」

「そ、そうか……おい勝平、ちよつと来い」

「う、うん……」

朋也君に廊下に誘われて僕はその後続いた。椋さんには見えな

かったのだろうか、今の朋也君の顔はなかなか怖い……

「お前、真実を言っただけでやるのも優しさだと思っぞ」

「で、でも……お弁当箱を開けたら空から鳥が降ってきた時と比べれば大分……」

「基準が低すぎだ！」

「あうう……」

朋也君に小突かれて僕は情けない声を漏らす。確かに朋也君が言っている事は最もだと僕も思う。だけでも棕さんが僕の為に一生懸命作ってくれた料理を残すなんて……僕にはそんな事出来ないのだ。

「杏や俺の事を考える前に、お前の嫁さんの料理の腕を何とかする方が先だろ。このままじゃいずれ死ぬぞ」

「そ、そこまで我慢してるつもりは……はい、何とかします……」

朋也君に睨まれて、僕は大人しくいうとおりにする事にした。普段優しい朋也君ばかりだったから忘れてたけど、高校時代は不良だと言われてたんだ……実際に喧嘩とかをしてた訳ではないんだろうけど、睨まれたら怖いのは確かだ……僕の方が年上なのに、朋也君は容赦ないからなあ……

朋也の料理の腕

腕によりをかけて料理を作ろうとしたら、廊下に出ていた勝平さんと岡崎君が戻ってきた。

「なあ掠」

「はい？ 何でしょうか、岡崎君」

「何時も邪魔してばっかだし、今日は俺が作ってやるよ」

「えっ、朋也君料理出来たんだ」

「一応一人暮らしたしな。コンビニや弁当屋のもんばっかじゃ飽きるから覚えた」

「そう、なんですか。じゃあ今日はお願いいしても良いでしょうか？」

本当は私が作りたかったんですけど、せつかくの岡崎君の好意ですし、勝平さんも興味津々な顔をしてましたのでお願いする事にしました。

「それじゃ、冷蔵庫の中を見せてもらおうぞ」

「あるものは好きに使ってください」

「そうか」

岡崎君が冷蔵庫の中身を確認している間、勝平さんは岡崎君と私を交互に見て頷きました。

「勝平さん、如何かしたんですか？」

「ううん、僕の奥さんと友達は料理が出来るのに、僕は出来ないってのがちよつとね……」

「仕方ありませんよ。勝平さんは長い間病院生活でしたし、その前は放浪の旅をしてたんですから」

私たちが出会ったのもその放浪の旅で勝平さんがこの街を訪れたから。そのおかげでこうして結婚までたどり着いたんですから、家事が出来ないなんて事で些細な事ですよね。

「やっほー！ 遊びに来たわよー！」

「お姉ちゃん……」

「あれ？ キッチンから料理をしてる音がしたけど、棕も勝平さんもいるじゃない？ 誰が料理してるの？」

「朋也君ですけど」

「えっ!? アイツ、料理出来たんだ!？」

やっぱりお姉ちゃんも驚いてる……まあ岡崎君のイメージから考えると、キッチンに立って料理をするなんて想像も出来ないですけどね。

「うっせーな、聞こえてるぞ」

「あつそ。それじゃあ、アンタの料理の腕がどんなものか確かめてあげるわよ」

「偉そうに言ってるけど、ただ飯を食いに来ただけだろ」

「あつたりー！ まあ、せいぜい期待しないで待ってるわよ」

「この女……」

岡崎君はお姉ちゃんを一睨みしてからキッチンに戻っていきました。多分、お姉ちゃんに何を言っても駄目だと悟ったのでしょよね……

「本当はあたしが作ろうかと思ってたけど、朋也が作ってるならそれでもいいわね」

「お姉ちゃん、私が作ろうとすると全力で止めるのに岡崎君の時は止めないんだね」

「それは……だって……」

お姉ちゃんがしどろもどろになる。本当は私だって分かっているのだけでも、勝平さんやお姉ちゃんが我慢しながらも食べてくれるので「次こそは！」と意気込んで作るのだ。まあ、意気込みと結果は必ずしも比例しないのだけでも……

「でも、朋也が料理してるなんてなんだか新鮮……というか違和感が半端無いんだけど」

「まあ朋也君も一人暮らしが長いって言ってたから大丈夫じゃないですか？」

「如何かしらね……少なくとも陽平よりはマシだとは思うけど」

「お姉ちゃん、春原君の料理を食べた事あるの？」

「えっ？　あるわけないでしょ」

想像でけなされる春原君っていったい……まあ彼は高校時代からそんな扱いだったような気もするけど……

「出来たぞ」

「じゃあ審査してあげようじゃないの」

「何で家主でも無いお前が偉そうにしてんだよ……」

「あーもう！　細かい事を気にしてんじゃないわよ！　それでも男なの!?!」

「全然細かくないだろ！　何でお前はそんな大雑把なんだよ！　それでも女なのか!?!」

この二人も高校時代ときほど変わってないな……お姉ちゃんがあ言えば岡崎君がこう言う。岡崎君は高校時代不良って言われてたけども、その岡崎君と普通に話してたのはお姉ちゃんが初めてだった気がする。まあ春原君は同性だという事でカウントしてないけど。

そしてお姉ちゃんの本性……というか素の性格を知ってもそのままお姉ちゃんと付き合ってくれたのは岡崎君くらいだった。同性からはカツコイイという事で好評だったけども、異性からは気が強い、って思われて少し敬遠されてたんだよね……

「とりあえず食べさせなさい！　アタシを満足させられたら黙ってあげるわよ！」

「ホント偉そうだよな、お前って……」

最終的には岡崎君が折れるので、お姉ちゃんも気にせず強気でいられるんだろう。この二人が本気で喧嘩……というか言い争うのは見た事が無い。なんだかんだで岡崎君は優しいから……

「僕も食べたいな」

「ほら。椋の分もあるぞ」

「ありがとうございます」

お姉ちゃんが手をつけようとしてるのを抑えて、岡崎君は私と勝平さんにも料理を渡してくれた。

「うん……美味しい」

「凄いです、岡崎君！」

「……まあ、悪くないわね」

「素直じゃ無いやつ……」

お姉ちゃんに視線を向けながらため息を吐く岡崎君。やつぱりこの二人はお似合いだと思っうんですよね……まあお姉ちゃんに怒られるから口には出しませんが。

「じゃあこれからは朋也がこの家の料理を担当する事ね！」

「俺はここの住人じゃねえ！」

「細かい事は気にしないの。それじゃ、楽しみにしてるわよ」

「だから、全然細かくないだろ……」

岡崎君、お姉ちゃんは物事の捉え方が大雑把なんですよ……諦めてください……

酔っ払いの告白

岡崎君の作ってくれたご飯を食べながら、お姉ちゃんが持ってきたお酒を飲む。今日の食卓には私が作ったり用意したものは一切存在しなかった。

「朋也、アンタ少しはまともに料理が出来たのね」

「一人暮らした。嫌でも出来るようになる。ってか、お前はまた飲んでるのか……」

「飲まなきゃやってられないのよ。子供相手つてのも色々ストレスが溜まるのよ」

「自分が好きでなったんだろうが」

お姉ちゃんの相手は、今のところ岡崎君がしてくれている。ちなみに勝平さんはそんな岡崎君の隣で、岡崎君が作ったご飯を美味しそうに食べている。

「ねえ朋也君」

「なんだ？」

「僕もこれくらい出来るようになるかな？」

「しらん。それは勝平の努力次第だろ」

「そっか」

「勝平さんも聞きなさい！ よその子を預かるつてのは大変なんだからねー」

岡崎君に話しかけた所為で、勝平さんもお姉ちゃんの愚痴に巻き込まれてしまった。

「(それにしても、岡崎君の料理……間違いなく私より美味しいです……)」

自分の料理が壊滅的なのには気が付いている。でも作らなければ上手にならないのも分かっている。私は機会を見つけて料理を作っているのだけでも、お姉ちゃんも勝平さんもそんな日に限って食

欲不振を起こすのだ。

「いや、本当は食べたくないんだろうな……私だって分かっているもの……」

自分が作ったものを自分で食べて気分が悪くなった事だつてある。如何してお姉ちゃんは料理上手なのに私は上手く作れないんだろう……

「朋也！ もう一本！」

「お前、飲み過ぎだろ……明日も朝早いんじゃないのか？」

「うっさいわねー！ アンタには関係ないでしょ！」

「やれやれ……」

完全に酔っ払っているお姉ちゃんに呆れながらも、岡崎君はビールの缶をお姉ちゃんに手渡す。勝平さんではないけども、やっぱりこの二人の相性はいいんだろうな、と思ってしまう。

「掠？ あんまり食べてないが、口に合わなかったのか？」

「い、いえ！ 美味しいですよ！ ただ……私のより美味しいのがちよつと……」

「そうか」

岡崎君はそれ以上何も言わずに、自分で淹れたお茶を啜りました。

「朋也！ アンタは何で飲まないのよ！」

「お前なあ……車運転する人間に飲酒を勧めるなよな、罪に問われるぞ」

「バレなきや罪にはならないのよ！」

「いや、なるだろ……」

普段ツツコミのお姉ちゃんだけでも、岡崎君の前では結構ボケたりもしている。というか、お姉ちゃんにツツコミを入れられるのが岡崎君だけなのだ。

「そろそろ本格的に酔っ払ってきてるな、コイツは……」

「ごめんなさいね、岡崎君。お姉ちゃんの相手を押し付けちゃって」「いやまあ……邪魔してるのは俺と杏だし、家主である椋が気にする事じゃないんだが……」

「でも、杏さんの相手は本当なら僕か椋さんがしなきゃいけない事だし……」

勝平さんも同じように気に病んでいるようで、岡崎君に申し訳なきような顔を見せている。

「あたしは酔ってないわよ!」

「酔ってるやつは全員そうやって言うんだよ」

「大体ね、アンタがもう少し甲斐性があれば、あたしだってこんなに悩まなくて済むのよ!」

「? 何の話しをしてるんだ、お前は」

「お、お姉ちゃん!」

遂に告白するのかと一瞬焦ったけども、お姉ちゃんはそこまで言うて酔い潰れてしまい、寝てしまった。

「……結局何が言いたかったんだ、コイツは?」

「さ、さあ……何でしょうね?」

「何だろうね……」

お姉ちゃんの気持ちを知らない岡崎君とは、結構本気で首を傾げているが、気持ちを知っている私からすれば、何で気づかないのだろうと不思議でしようがないのだ。

「もしかして、杏さんは朋也君の事が好きなんじゃない?」

「コイツが俺を? ……」

勝平さんが冗談めかして言った真実に、私は心臓が止まりそうになるくらいビツクリした。一方の岡崎君は少し考え込んでいる。

「まあ、真実は兎も角として、酔っ払いの戯言を真に受けるのもバカらしいからな。悪いが片づけとこの酔っ払いの相手は任すぞ」

「帰るの？」

「ああ。明日も早いからな」

岡崎君は何か結論を出した風でしたが、その事は私たちには言わずに帰ってしまいました。

「勝平さん」

「ん？ 何、棕さん？」

「お姉ちゃんは本当に岡崎君の事が好きなんですよ」

「……………そうだったね」

少し間が空きましたが、勝平さんは本気で驚きました。まさか本当に忘れてたとは…………

「何となく相性は好きそうだとは思うけど、本当に杏さんが朋也君の事を…………」

「前にも話しませんでしたっけ？ お姉ちゃんは岡崎君の事を高校時代から好きだったんですよ」

「そういえば聞いた気がする…………でも、あまり関係ないから覚えてなかった…………」

勝平さんは意外なところで抜けていますからね…………そんな事を思いながら、私は酔い潰れたお姉ちゃんを眺めているのです。

二日酔いの杏

昨日椋の部屋でビールを飲んで、朋也に何かを言ったような気がするのだけでも、残念ながらあたしの記憶にはその事が残っていない。そんなに飲んだつもりは無いのだけでも、起きた時にかなりの頭痛があたしに襲い掛かった。

「痛ったー……」

「お姉ちゃん、最近お酒の量が多くない？」

「椋……おはよう」

あのまま椋の部屋に泊まり、寝起きながらも状況の整理をする。一回着替えに帰らなきゃ駄目そうね……

「おはようございます、杏さん」

「勝平さん……頭に響くからあんまり大きな声は出さないで」

「ご、ごめんなさい……」

おそらく目を細めたからだろう、勝平さんの顔に恐怖が浮かんでるのは。

「朋也は？」

「岡崎君はちゃんと帰ったよ。お姉ちゃんと違ってお酒も飲んでないから」

「少しくらい付き合ってくれてもいいじゃないのよね。勝平さんもそう思うわよね？」

「えっ……そ、そうですね」

「お姉ちゃん、顔洗って来て」

寝不足と二日酔いと不機嫌が相まって、あたしの顔は普段からは想像も出来ないくらい怖かったのだろう。勝平さんは完全に引き攣つてるし、椋も私に顔を洗うよう命令する。

「うっわ……」

そして洗面台で自分の顔を見たあたしは、そんな声を漏らしたのだ
……

仕事自体はつつがなくこなしたのだが、一日中頭痛は付きまわった。

「(掠に言われてるし、最近のあたしは確かに飲み過ぎよね……)」

自覚はあるし飲まないでおうと思う事もある。だけど朋也を見かけると如何してもあの部屋に誘い、如何してもお酒を飲みたくなるのだ。

「(最近のあたしは如何かしてるわね……)」

朋也に対する恋心は、高校卒業と同時に置いてきたはずなのに、最近またあたしの中で燻っているのだ。それほど迄に、あたしは朋也の事が好きだったようだ。

「(勝平さんが退院して、朋也と合う機会が増えたのも原因かしらね)」

朋也と勝平さんは友人だ。だから朋也が勝平さんに会いにあの部屋を訪れても問題は無いのだが、あの部屋はあたしの妹と義弟の生活

の場でもあるのだ。だからあたしもあの部屋を訪れるのに抵抗は無い。

「(間に陽平でもいれば楽なんだけどね)」

この前もだが、あたしと朋也の間には何時も陽平がいた。二人で弄ってパシって罵って、陽平で遊んでる時はこんなにも緊張する事は無いのだ。

「(いつそのこと朋也に伝えて返事をもらっちゃおうかしら……)」

朋也があたしの事好きなんて可能性は万に一つも無いだろう。だって朋也はあたしと二人つきりでも何も変わらないんだし……

「(なんだか腹立たしいわね……)」

今更ながらに、朋也の態度に腹立たしさを覚えた。うら若き乙女と一緒にいても何も変わらないって、それってかなり失礼なんじゃないかしら……ううん、絶対に失礼よね。

帰り道に一人ブツブツと呟きながら歩いていると、前に良く見知った背中を見つけた。何年も一緒に生活してきた背中だ、見間違える事は無い。

「掠」

「お姉ちゃん？ 今帰りなの？」

「アンタは今から仕事？」

「うん。だから今日は部屋に行っても勝平さんしかいないよ」

「あたしだって毎日あの部屋に行ってるわけじゃないんだけど……」

自分で言っておきながら、最近のあたしはあの部屋を訪ねる頻度が高いと思っている。あそこに行けば一人じゃないし、朋也に会える可能性が高いからだ。

「お姉ちゃん、まだ辛そうだけど」

「大分マシよ。朝なんかホントヤバかったもの」

さすがに一日経てばアルコールは体内から排出されている。けども気持ち悪さが残ってるのは否めないのよね。

「朝も言ったけど、最近お姉ちゃんはお酒飲み過ぎだと思う」

「分かってはいるんだけどね……幸せそうな妹夫婦を見ると、如何しても自棄酒を飲みたくなるのよ……」

「じゃあ部屋に來なければいいのに……」

「一人じゃ寂しくしてお酒を飲んじゃうのよね……」

「……………」

椋が呆れてるのが分かる。もしこれがあたし自身の話ではなく他の誰かの話しだったらあたしも呆れるだろうし……

「じゃあ岡崎君に告白でもしたら？」

「なっ！ 何でそこで朋也の名前が出てくるのよ！」

「だってお姉ちゃん、岡崎君の事好きなんでしょ？ しかも高校時代から」

「うっ……………」

双子だけに隠し事は出来ない、むしろ隠そうとした分だけ気づかれるだろう。

「もし私に遠慮したままなのなら、もうその必要は無いからね」

「分かってるわよ……あんたにはもう勝平さんがいるものね」

高校時代に椋に「朋也が好き」と相談された時はかなり焦ったわ。でも結局椋は朋也ではなく勝平さんを選んだのだ。

「それじゃ、私はもう行くね」

「頑張ってね」

椋を見送りあたしは自分の家へと続く道を歩き始める。今日はお酒も飲まないし、あの部屋にも行かずにまっすぐ帰ろう。そう決意してあたしは自分の足に前進を命じたのだった。

勝平の心配事

勝平から呼び出されて、俺は二人の部屋を訪れる事になった。最近
は杏がしよっちゆう遊びに来てるとかで遠慮していたのだが、相談が
あるのなら仕方ない。

「おーい、勝平。来たぞ」

扉越しに声を掛ける。高校時代に病院を訪れた際に気まずいタイ
ミングだった事があったので、出来る事なら椋と二人きりの時には訪
れたくないんだよな……

「やあ、いらつしやい」

「今日は一人なのか？」

「杏さんも最近は来てないし、椋さんは今日遅番だから」

「そうか。だけど何で杏の名前が先なんだ？」

「別に深い意味は無いよ」

まあそうだろうけども、若干の引っかけかりを覚えたのはたしかなの
だ。

「まあいつか。ほれ、差し入れ」

「わざわざありがとう。さあ、上がって」

勝平に招かれ部屋の中へと入る。一週間ぶりくらいだが、この部屋
はちゃんと掃除してあるので不快感は無い。

「最近は如何だ？ 歩けるようになったか？」

「一応は杖が無くても大丈夫かな。でもまだ遠出とかは難しいかも」

「仕方ないだろ。五年間入院してたんだから」

勝平と近況を話しあいながら、買ってきたものをツマむ。少々行儀
は悪いかもしれないが、別に男同士なので手づかみでも気にはならな
い。

「それで？」

「ん？ 何、いきなり」

「相談があるって言うから来たんだろ」

「ああ。そうだったね」

「こいつは……恐ろしく自分勝手に、恐ろしく記憶力が悪いやつだな

……

「杏さんの事なんだけどね」

「杏？」

勝平から杏の事で相談されるとは思ってたので、俺は面食らった。

「何でそんなに驚くのさ？」

「いや、てつきり掠の事かと思ってたから……まさか勝平から杏の事を相談されるなんて思ってもみなかったからだ」

「そう？ お義姉さんの事なんだし、別に不思議ではないと思うんだけど」

「で、杏のヤツに何かあったのか？」

「うん……いや、詳しい事は僕は知らないんだけどね」

そんな前置きをしてから、勝平は視線を逸らした。

「おい、そこまで言っても何も言わないなんて無しだからな」

「朋也君……目が怖いよ？」

別に睨んでいるつもりは無いのだが、如何やら俺は目を細めるだけで怖いらしいのだ。

「まあいいけど……最近、杏さんがこの部屋に来ないんだけど……」

「別にいいだろ。この部屋はアイツの家って訳じゃないんだよ」

「でもさ！ 退院してからほぼ毎日来てたのに、もう三日も来てないんだよ？ 心配……」

「……三日？」

勝平の言った日数に引っかけり、俺は勝平の言葉を遮る。それくらいなら別に仕事が忙しい、とか何とかで片付きそうな疑問なのだが……

「なあ勝平、念の為に訊くが」

「……何？」

「お前、杏のアドレスや番号を知ってるよな？」

「うん……」

「心配なら連絡すれば良いだろ。それでお前の疑問は解決する」

「でも、何でも無いのに連絡するのって失礼じゃないかな？」

「妹夫婦の家にほぼ毎日入り浸ってた義姉に遠慮する事なんて無い。むしろ放っておけ」

どうせ勝平と椋のラブラブっぷりに中てられて寄り付かなくなつたとか、そんなところだろうし……

「う〜ん……そうだ！ 朋也君が連絡すればいいんだ！」

「はあ!? 何で俺が杏に連絡なぞせにやならんのだ」

「だって僕が連絡するよりも、朋也君がしてくれた方が杏さんも嬉しいだろうし」

「何を根拠に……そもそも、たった三日寄りつかなかっただけで心配するなんて、お前は随分と心配性なんだな」

俺だったら一月連絡が無くても気にならないだろうな。

「だってあの杏さんだよ!? 何時まで経っても椋さんと仲良しで、なかなか妹離れ出来ないあの杏さんが三日も来てないんだよ？」

「そもそも、お前が退院するまで杏と椋はさほど会ってなかったんじゃないか？」

「そうなの？」

「俺が知るか！ だいたい、俺だってお前が退院するってまで杏とも椋とも会ってなかったんだ」

だから三日会わないくらい如何って事無いと思うのだ。

「そうなのかな……やっぱり気になるし、朋也君、連絡してみてよ」
「断る」

「断るまでコンマ五秒無かったよ、朋也君……って、何で断るのさー！」
「俺は気にならないからだ」

事実のみを端的に告げて、俺は下ろしていた腰を上げさっさと帰宅する事にした。これ以上勝平の心配性に付き合っていたら明日の仕事に支障が出るかもしれんからな。

「じゃあ、もし明日も来なかつたら朋也君に電話するから。そうしたら朋也君が杏さんに電話してよね」

「一々俺を巻き込むな。気になってるのはお前で、俺は全く気になつて無いんだよ！」

「だって……僕じゃ杏さんから何かを聞き出す事なんて出来ないし……」

「まあ、確かに……」

勝平じゃ言いくるめられて終わりの様な気がする。それは否定しないし、出来ない。

「せめて一週間くらいにしろよ」

泣きそうな勝平に根負けして、俺はそう告げてから部屋を出た。別に杏が一週間顔を見せなくても勝平的に何の問題も無いと思うんだけどな……

再びの杏

朋也君に相談を持ちかけてから四日、つまり杏さんがこの部屋に寄り付かなくなつて一週間が過ぎた。杏さんが部屋に来なくなつた原因に、棕さんも心当たりが無いらしく、この数日間、僕と棕さんは常にそれとわししながら過ごしてきた。

「……それで、やっぱり俺が聞くのか？」

約束の一週間を我慢し、これ以上我慢したらノイローゼにでもなりそうだったので、僕は早朝から朋也君を呼び出したのだ。

「だって僕や棕さんじゃ聞き出す事は出来ないだろうし、朋也君だって聞いてくれるって約束したのね？」

「まあ……だけど、杏が来なくなつたのって、そんなに重要な事か？」

もともと別々に生活してたのが、たまたま交り合つただけで、また普段の生活に戻つただけだろ？ それに、杏だって仕事が忙しくなつただけかもしれないし、他に遊ぶ友達がいるかもしれないだろ」

「ですが、お姉ちゃんが一緒に遊ぶ友達なんて、同僚の中にはいなかったと思ひますが……それに、忙しいのは前からですし……」

「そうは言つてもなあ……俺だって勝平に呼ばれる以外で、最近この部屋には寄り付いてないんだぞ？ 杏だって呼ばれば来るが、わざわざ毎日顔を見せる必要もないだろう、って考えてるのかもしれないぞ？」

朋也君の言っている事は確かにそうだ。でも、あの杏さんがそんな遠慮をいきなりするとは、僕にも棕さんにも思えないのだ。

「とりあえず、仕事があるから俺は行くぞ。帰りにまたここに寄る」

「じゃあ、それまでに杏さんが来なかつたら朋也君が電話してね」

「仕方ないな……」

仕事前にわざわざ呼びつけて、申し訳ないとは思つてたけど、それ以上に杏さんの事が心配だったのだ。朋也君は軽く手を振つて部屋

から出て行き、仕事場へと歩いて行った。

「お姉ちゃん、何もなければ良いんですけど……」

「そうだね……杏さんの事だから何かの病気って訳じゃないだろうけども……」

「元気が撮り得ですからね……」

何気に酷い事を思いながら、僕と棕さんは朋也君が再びこの部屋を訪ねてくる迄の間を悶々と過ごすのだった。

そろそろ朋也君の仕事が終わる時間になった時、不意に誰かが扉の前に立った気配がした。普段なら気配なんて分からないのに、何でこのタイミングだけ分かったのだろうか。

「何方ですか?」

扉を開けながら確認する。するとそこには……

「お久しぶり」

「杏さん!」

「えっ、お姉ちゃん!」

「……一週間姿を見せなかった杏さんが立っていた。

「如何したんですか？ 最近来なかったのに」

「いや、自分の生活を見詰め直したら、私って椋と勝平さんのイチヤツク時間を奪ってるかもって思ってたさ、自重してたんだよね」

「そうならそうって、言つてよお姉ちゃん！ いきなり来なくなったから心配してたんだから」

「そうらしいわね。さっき朋也からメールで教えてもらったわ」

如何やら杏さんが顔を見せたのは、朋也君がメールで僕たちの状況を知らせてくれたかららしい。

「まさかあたしが来なくなつた事を気にしてる、なんて思つても無かつたわよ」

「だって、あれだけ毎日来てたのに、いきなり顔を見せなくなるんだもん……」

「そんな状況で、心配しない訳無いじゃないですか」

「そっか……ごめんね」

杏さんは、少し気まずそうに舌を出して謝った。

「よう」

「朋也！ アンタ、いきなりメールしてくるなんて！」

「勝平と椋が心配のし過ぎで胃に穴が開くんじゃなかつて思つてな。電話よりメールの方が楽だったし」

「朋也君！ 杏さんが来てくれた！」

「だから言つただろ。呼べば来るんじゃねえかつて。そんじゃ、俺は帰る……」

「ちよつと待ちなさい！ あたしを呼びつけたんだから、今日はとことん付き合つてもらおうわよ」

「俺は明日も仕事なんだよ！ お前にとことん付き合つてたら朝になるだろうが！」

久しぶりに杏さんが部屋に来てくれた。そして朋也君と相変わら

ずのやり取りをしているのを見て、僕も棕さんも思わず笑ってしまっ
た。

「なに？ いきなり笑って、如何かしたの？」

「ううん、お姉ちゃんが来たんだなくって思って」

「やつぱり杏さんと朋也君は面白いなーって」

「コイツと同等に思われるのは甚だ不本意なんだが……」

「なによ!? あたしだってアンタと同じって思われるなんて最悪よ！

まだ芋虫と同じって言われた方がマシよ」

杏さんって、本当に朋也君の事が好きなんだろうか……今の発言は
とてもじゃないが、好きな人相手に言うような言葉じゃ無かった気が
するんだが……

「ああそうか！ じゃあそこら辺で芋虫でも捕まえて一緒に呑めばい
いだろ！ 俺は帰る」

「待ちなさいよ！ あたしとじゃ呑めないって言うの!？」

「お前が言ったんだろ！ 芋虫の方がマシだって。だから俺は帰るん
だよ」

そう言っつて朋也君は杏さんの手を振りほどいて、本当に帰ってしま
いました。

「……お姉ちゃん、ツンデレってレベルじゃないよ、今の……」

「僕もさすがに言い過ぎだと思えます……」

「分かってるわよ……さすがに反省してるんだから……」

杏さんが再びこの部屋を訪れてくれたのは嬉しいけど、この気まず
い雰囲気は如何にかしてほしかったな……

勝平・棕のたくらみ

お姉ちゃんのツンデレ発言が原因なのかは分からないけど、ここ最近岡崎君がこの部屋を訪ねる事が無くなってしまっている。もともと、岡崎君はそれほど頻繁にこの部屋に顔を出す気は無かったのだが、あの日を境に連絡も全く無くなってしまったのだ。

「朋也君、やっぱり怒ってるのかな？」

勝平さんも、あの発言が原因だと思っっているらしく、岡崎君がまだ怒ってるのかと気にしている。

「お姉ちゃんは昔から岡崎君と春原君に対しては口が悪かったからね。まああれが素なんだけど、上手く猫被ってたから……岡崎君も本気にはしてないとは思うんですけどね……」

語尾が小さくなっていくのが自分でもわかる。それほどまでに自分の姉に対して確信が持てないのだ。

「僕があんな事言われたら、きつと立ち直れないと思うんだよ……」
「勝平さん以外でもそうだとは思いますが……さすがに芋虫以下って言われたら立ち直れませんって……」

昔はミジンコとか言ってた気もしますが、お姉ちゃんは岡崎君に対しては特に口が悪くなってるように気がすんですよね……本当にお姉ちゃんは岡崎君の事が好きなんですか？

「そう言えば、あの日以来杏さんも来てないよね？」

「あの後自己嫌悪に陥ったらいいですからね。今も反省してるんじゃないですか？」

いくらお姉ちゃんでも、あれは言い過ぎたと思っただけのも、反省するくらいなら言わなければ良かったのに……

「連絡してみようか」

「岡崎君にですか？ 私も何度かしてますけど、返事は普通に來ます

よ」

「そうなんだ。じゃあ僕もしてみよう」

勝平さんが岡崎君にメールを送ると、十分後に返事が来ました。

「朋也君、仕事が忙しいんだって。それに、あの事は気にしてないらしい」

「まあ、岡崎君もお姉ちゃんとの付き合いが長いですからね。お姉ちゃんの言葉を一々真に受けてたら身が持たないって分かってるんでしょう」

まあ問題は、岡崎君の方ではなくお姉ちゃんなんですけど……

「今日の夜、朋也君来てくれるってさ」

「本当ですか？」

「うん。明日休みだし、久しぶりに会いに行くってメールに書いてある」

勝平さんに見せてもらった岡崎君の返事には、確かにそう書いてありました。

「じゃあ、お姉ちゃんも呼んでみましょうか？」

「うーん……杏さんが大丈夫ならいいけど、まだ引き摺ってるなら止めておいた方がいいと思うんだよね……」

「ですけど、何時までも引き摺ってたら立ち直れませんし、きっかけを作ってあげる必要があると思うんですよね」

勝平さんが心配してる事は分かりますが、お姉ちゃんに幸せになってもらいたいと思ってる私としては、何時までも岡崎君と距離を置いているお姉ちゃんを見ているともやややすめるのです。

私はお姉ちゃんに今晚ウチに来るようにメールを出し、晩御飯を気合いを入れて作ろうと決心した。

お姉ちゃんと岡崎君が来る時間が近づいてきたので、ご飯の準備をしようと思ったのですが、勝平さんに止められ、二人が来てからの方がいいと説得された。

「ほら、杏さんも朋也君も何か持つてくるかもしれないでしょ？ そうなると余っちゃうし……」

「そうですね……お姉ちゃんは兎も角、岡崎君が手ぶらで来る可能性は低いですし」

岡崎君はこの部屋を訪ねる時、必ずと言っていいほどの確率で何かを差し入れてくれる。高校時代不良と呼ばれていた彼だが、根は優しいのだ。

「それにしても、杏さんって本当に朋也君の事が好きなの？ あの発言だけ聞くと、むしろ嫌つてるとすら思えるんだけど……」

「お姉ちゃんの恋愛レベルは、小学生男子と同レベルですから……好きな人に意地悪をしたくなるっていうアレです」

「ああ……でも、杏さんは女性だよね？」

「だから意地悪じゃなく、暴言なんですよ……しかも微妙に演技力が高いので、それがまるで本音かのように思えるのが問題なんですよね……」

本音ではないんだろうけども、暴言を吐く時は完全にそれが本音かのような表情、感情で言葉を紡ぐので、お姉ちゃんの事を良く知らない人には、口の悪い女だと思われてしまうのだ。

「でも、杏さんって年下の同性に人気だったんですね？」

「下手な男子よりも男らしかったですからね……」

カラツとした性格、面倒見が良い先輩、そんなお姉ちゃんに後輩たちは結構本気で惚れていたんだろうな。

「今日は朋也君と杏さんに仲直りしてもらって、そこから何とか発展してくれればいいんだけどな……」

「そこは私たちが考える事ではなく、お姉ちゃん次第でしょうね」

同じ血が流れているはずなのに、如何してお姉ちゃんは恋愛に奥手なんだろう？ 私はこんなにもあっさり勝平さんと付き合い、結婚までしているというのに……

部屋までの道中

椋があたしを部屋に招くなんて、絶対に何か裏があるに違いない。実の妹に対してあんまりだとは思うが——いや、実の妹だからこそこんな事を思うのかもしれないわね。

「勝平さんも何か噛んでるのかしら……そうなるにあたしと朋也の事かもしれないわね」

あの二人が企んでいる事なんて、想像するだけで何となく分かっってしまう。それだけあの二人が分かりやすいのか、それともあたしの勘が鋭いのか……おそらく前者であろう。

「別に気にしてもらおうほど落ちぶれてはいないのよね……」

単純に、今更朋也に告白するなんて出来ないだけで、きつかけさえあればおそらく、あたしはあつさりと朋也にこの想いを伝える事が出来るだろう。そう、きつかけさえあれば……

「高校時代にも、何度かそんなきつかけはあったんだけど、どのタイミングも陽平が邪魔したのよね……」

思い出しただけで、あのバカ面に辞書を投げ込みたくなってきた……今度呼びつけてぶつけてやろうかしら……

物騒な思考はとりあえず抑え、あたしは二人の部屋に向かうべく家を出る。本当なら今日一日はゆっくり過ごそうと思っていたのだけど、可愛い妹とその夫の誘いを断るわけにもいかないのよね。

「何か持っていないと駄目よね」

万が一、億が一の可能性で手ぶらであるの部屋を訪ね、椋の手料理をごちそうにならなければならぬ、などと言う地雷は踏みたくなかった。

「ん？ 杏？」

「朋也……やっぱりあの二人ね」

「そうらしい」

椋たちの部屋に向かう途中、あたしは朋也に会った。これだけであ
の二人の仕業だと決めつける事が出来るわね。

「何で呼び出されたんだ、俺たち？」

「さあ？　でもまあ、部屋に着いたらたつぷりと尋問してあげるわよ」
「……ほどほどにしてやれよ」

あまり興味が無さそうな感じで、朋也がそう呟いた。相変わらずの
日和見主義なのかしらね。

「ところで朋也、その袋の中身はなに？」

「あ？　テキトーに摘まめるものをな。間違っても手ぶらであの部屋
を訪れようとは思わねえから安心しろ」

「そうよね……我が妹ながら、あの料理の腕は如何したものかと悩ん
でるのよね……」

勝平さんがガツンと言わないから、ここまでずるずると来ちやつて
のような気も、しないでもないのだけでも、やっぱり一番の原因はあ
たしがキツチリと教え込まなかったかしらね……

「椋は働いてるし、勝平が長い間入院してたからな。腕を磨くにも食
べさせる相手がいなかったのも原因かもしれないがな」

「こうなったら勝平さんに毎日椋の料理を食べてもらって、腕を磨い
てもらおうしかないわね！」

「お前は勝平に『また入院しろ』と言うのか？」

朋也の発言を「酷い！」と言えなかったのは、心のどこかであたし
も似たような事を思ってたからなのだろうかしら……それとも、椋の
料理を毎日食べていればあるいは、などと考えてしまったのかしら
……

「とりあえず、椋の料理の腕を何とかするのは相当な覚悟と時間が必要
だと俺は思うんだが」

「そうよね……勝平さんだって退院したばかりなのに、また病院に逆戻りになる可能性のある事なんてしたくないでしょうし……」

「……他人の俺が言うならともかく、実姉であるお前が言うとは驚が可哀想に思えるのは気の所為か？」

「気の所為でしょうね。だってあたしはそんな事思わないし」

朋也と軽口を叩きながら道のりの半分を過ぎた。最近朋也と話して無かったから、会ったら気まずいかななんて思ってた数分前の自分がバカみたいに思えるくらい、あたしと朋也は自然に会話している。「そう言えば、勝平のヤツが『杏さんが来ないんだけど』ってメールを送ってくるんだが、何とか出来ないか？」

「そんな事あたしに言わないで勝平さんに直接言えばいいじゃない」

「お前、泣きそうになってる勝平にそんな事言えるか？ 捨てられた子犬の様な目で見られるんだぞ？」

「……無理ね」

中性的で若干童顔な勝平さんの泣きそうな顔を想像して、あたしはあっさりと掌を返した。あんな顔をされたら言いだせないわよ……

「とにかく、あたしに文句言われても困るんだから、アンタが直接勝平さんに言いなさいよね！」

「なに怒ってるんだよ……逆切れにも程があるだろ」

「切れてないわよ！ あたしを切れさせるなんてあんたには無理だから！」

「……はいはい」

高校時代なら、朋也も大声で反論してきたんでしようけども、最近の朋也はここで一步引くのだ。だからあたしも調子が掴めずにいるのかもしれない……何で朋也相手に調子が掴めない事を気にしているのか。その事はあまり深く考えないようにしているのだけだね……

酔っ払いの会話

朋也君と杏さんを待っている間、何度か棕さんが料理をしそうになったけども、僕はそれを全力で、かつ作らせないように必死になっている事に気づかれないように頑張っていた。

「お姉ちゃんや岡崎君ばかりに準備させるのは、やっぱり悪いですよ。今日は私たちが呼んだんですから。私たちがホストなんですから」

「朋也君も杏さんもそこは気にしないって。それに、もう外にいるみたいだし」

視線を逸らした先に、杏さんが手を振っているのが見えたので、僕は棕さんの意識をそちらに向けさせた。これ以上は厳しかったので、このタイミングで杏さんと朋也君が来てくれたのは本当にありがたい事だったのだ。

「やつほー！ 来たわよ」

「お姉ちゃん、岡崎君と一緒に来たんですね」

「コイツがあたしについてきたのよ」

「目的地が一緒なのに、何でわざわざ別の道をいかにかいかんのだ」

「はいはい。心優しいあたしは、別にアンタの事をストーカーだとは思ってませんわよ」

杏さんの気持ちを知らなかったら、何でこんなにも悪辣な言葉を吐くんだろうって思ったかもしれないけど、気持ちを知っている上でも、やっぱり悪辣な言葉にしか聞こえないのは何でだろう……棕さんが言うには、杏さんはツンデレだかららしいのだけでも、最早ツンデレって言葉で如何にか出来るレベルの悪辣さでは無いような気がする。

「勝平、ちよつとこっち来い」

「ん？ 如何かしたの、朋也君」

杏さんの悪辣な言葉には特に反応しなかった朋也君だけでも、何か

思う事があるらしく僕に対して手招きをしている。

「いったい何の用だ？」

「何の事？」

「惚けるな。今日俺と杏を呼んだ理由は何だ？」

朋也君が目を細め睨んで来る。朋也君としては睨んでるつもりは無いらしいんだけど、僕から見れば十分睨んでると言える目だ。

「偶には、四人でのんびり過ごせたらなっさ」

「本当にそれだけだな？」

「うん……」

訝しむ朋也君の視線に耐えながら、僕は本当の理由を隠した。まさか「二人の仲を進展させようと思って」などと本当の事を言えば、朋也君は怒るか呆れるかして帰ってしまうだろうから。

二人が差し入れで持って来てくれたもので晩御飯を済ませ、僕たちはお酒を飲む事にした。まあ、病み上がりでお酒に強くない僕と、杏さんがいるから、という理由で朋也君はお茶を飲んでいただけでも……つまりは姉妹の飲み会に、僕と朋也君が参加している感じなのだろうか。

「なあ勝平、お前、本当になにも隠し事をしてないんだよな？」
「そ、そうだよ？」

「目が泳いでるし言葉が疑問調なのは何故だ？」

「それは……その……」

「まあ勝平、怒らないから言ってみろ」

「……本当に怒らない？」

「やっぱり隠し事はしてるんだな」

「あつ！」

朋也君の誘導尋問じみた仕掛けにまんまとはまり、僕は今回の招集理由を朋也君に話す事になってしまった。

「……なるほどな。余計なお世話だ」

「でも、棕さんの話だと、杏さんは高校時代から朋也君の事が……」

「あたひがらんらって？」

「……もう酔っ払ってるのかよ」

朋也君に事情を説明し、思い至った理由を話そうとしたら杏さんが絡んできた。既に酔っ払ってるらしく、普段以上にスキンシップが過激だ。

「らいはいへー！ あんはがもうしゅこひひやつきりしゅてきゅれれ
ば……」

「何だって？」

「なはらー！」

「……さっぱり分からん」

既に呂律が回らない杏さんの言葉を何とか理解しようとしたけども、僕も朋也君もさっぱり理解出来なかった。

「ほれはー！ おねひゃんらってをはるいんじゃはいんでふはー？」

「らにひよ、ひょうらって朋也の事をひゅひってひったしやないのー
！」

「……スマン棕！ 杏も黙れ！」

「ゴフツ!?!」

「えっ、なに？ 朋也君、今なにをしたの？」

良く分からない会話をしていた二人が急に黙った、と思ったら、朋也君が強制的に黙らせたようだった。

「訳の分からない会話を聞かされるのも面倒だったからな。少し寝てもらった」

「状況だけ見たら、朋也君が二人を酔わせて気絶させて、この後襲うのかと思うよね？」

「そんな思考をしているやつとの関係は改めた方がいいんだろうか」

「じよ、冗談だから！ 冗談だからそんなに睨まないでよ」

「だから睨んでねえっての」

朋也君に睨まれて、僕は身の危険を感じて必死に言い繕った。朋也君は睨んでないって言うけども、あれは完全に睨んでるって表現出来ると思うんだよね……ああ怖かった。

介抱する側

酔い潰れた二人——潰したのは朋也君だけでも——を寝かせて、僕は朋也君と向き合った。

「朋也君は、杏さんの気持ちを知ってるの？」

さつきもだけど、杏さんは何度か告白を試みているのだ。まあ、酔った勢いって言うのも多分にあるんだろうけども……ついでは言え、呂律が回って無くなを言ってるのか分からない状況なのもあるのかもしれない。

「さすがに気づくだろう。俺だってそこまで鈍くない」

「じゃあ、僕のお義兄さんになつてくるの？」

「おいおい、随分と話しが飛んでるぞ」

「そんな事は無いよ！ 杏さんは高校時代から朋也君の事が好きんだから！」

僕が言っているのか、と一瞬迷いはしたけども、何時まで経っても気持ちを伝えない杏さんと、知ってても自分からは切り出さない朋也君に苛立ちを覚えたのか、僕は訊いた。きっと僕も酔っ払ってるんだろう。

「だから何だ？ 好きな時間は長くとも、俺と杏は友達だ。今はその関係で間違いない」

「じゃあ、朋也君は杏さんがちゃんと告白したら如何するのさ？」

「さてな。そんなの、その時にならなきゃ分からないだろ。コイツの場合は冗談で済まそうとする可能性だってあるしな」

そう言いながら朋也君は湯飲みに残っていたお茶を一気に飲んだ。僕もそれに合わせてコップに入っている液体を飲み干す……あれ？

これって僕のコップだったっけ？

「勝平？ 何だか顔が赤いんだが」

「ひよんなことにやいよ〜」

「……それは酒だぞ」

朋也君に言われて、僕はコップに残っている匂いを嗅いだ、うん、間違いないとお酒だ。

「ひやれ？ にやんでともにやきゆんが三人もいるによ？」

「……寝ろ」

朋也君に一撃を喰らわされて、僕は意識を手放した。ああ、杏さんや棕さんもこんな感じだったのかな……

意識を取り戻した時、朋也君はこの部屋にはいなかった。でも帰ったわけではないと思う。だって酔っ払った三人を置いたまま、鍵を開けっぱなしのこの空間に無防備な人間を放置出来るほど、朋也君の正確は歪んでいない。

「じゃあ何処に行ったんだろう……」

周りを見渡してから、僕は外が明るくなってきているのに気がついた。いや、完全に日が昇っていた。

「あれから随分経ったんだな……」

三人共、今日が休みだったから良かったけど、誰か一人でも仕事
だったら大変だったんだろうな……

「棕さん、杏さん、そろそろ起きて下さいよ」

僕より先に朋也君に寝かされた二人がまだ起きてないのは、ちよつ
と変な感じがするけども、普段から疲れがたまってるんだろうなって
事で何とか納得した。

「……頭痛い」

「……私もです」

「うん、実は僕も痛いんだよね……」

二日酔い、ではないだろう。だって痛いのは頭の内側ではなく外
側、つまり朋也君に叩かれた場所なのだから。

「朋也は？」

「分かりません。何処かに出かけてるのかもしれないです」

「帰ったんじゃないですか？ 岡崎君がこの部屋に泊まった事は無い
です」

「でも、普段は僕が起きてるから朋也君は帰ってるんだと思うけど」

「えっ、なに？ 昨日は勝平さんも酔い潰れたの？」

「はい……コップを間違えまして……」

普段飲まないから仕方ないのと、一気に呷ったのが原因で酔っ払っ
てしまったのだ。

「おっ、さすがに起きてたか」

「朋也君！ 何処に行ってたの？」

「ちよつと買い物に。ほら、朝飯」

朋也君が買ってきてくれたもので朝食を済ませ、僕たち三人は昨日
の事を反省、迷惑をかけた朋也君に謝罪をする事にした。

「昨日はごめんなさい」

「私も、途中から記憶が曖昧でして……途中までお姉ちゃんとか何を話してたのは覚えてるんですが……いったい何を話していたんでしょうか……」

「あたしも、棕と話してた、って事は覚えてるのよね……でもその内容までは……ねえ朋也。アンタ聞いてたんでしょ？　どんな話しをしてたのか教えなさいよ」

「お前らの会話は呂律が回って無くて、何言ってるのかさっぱりだった」

朋也君は謝る、って言ったの从上から目線で問い掛けてきた杏さんにも普通に対応している。これが噂通り元不良だったのなら喧嘩になってもおかしくないんだろうな……やっぱり朋也君は不良じゃなかったんだろうな。

「大体な、お前ら酒に弱いんだからほどほどにしろよな！　毎回介抱する俺の身にもなれってんだ！」

「「ごめんなさい……」」

これにはさすがの杏さんも反論出来なかったようで、素直に頭を下げていた。それにしても、なんだかんだで面倒見が良いんだよね、朋也君って。初めて会った時から思ってたけど、これはもう確信しているんじゃないだろうか。

杏・朋也の気持ち

子供たち全員を無事見送って、あたしはついたため息を吐いてしまった。原因は分かっている、朋也だ。

最近また掠たちの部屋に行くようになって、あの場所では朋也と頻繁に顔を合わせる事が出来るのだ。そもそも、あそこ以外では滅多に会わないんだけど……

「何であたしが朋也の事で頭を悩ませなきゃいけないのよ……」

八つ当たりも甚だしいのだけでも、あたしはこのモヤモヤの責任を朋也に押し付ける。そうすれば少しは気持ちが悪くなるから……

「(高校の時からだけでも、如何してあたしは朋也相手に素直になれないのかしら……)」

思っても無い事を言ってみたり、必要以上にキツイ事を言ってみたり、完全にツンデレだと自分でも分かっているのだ。むしろ、最近ではツンデレ、って言葉では抑えられないくらいの酷さだったりもしているのだ……

「(朋也だから許してくれてるけど、他の男だったら怒ってるでしょうね……)」

それなりに付き合いが長いからか、朋也はあたしの暴言も軽く流してくれる。もしかしてMなのかとも思ったけども、陽平に対する朋也の態度から分かるように、アイツは完全なるDSなのだ。

「(でも、DSな朋也が好きって事は、あたしって実はMなのかな?)」

あたしも陽平に対してはかなりのDSだとは思うけども、朋也ほど酷くは無いと思っている。第三者から見たら五十歩百歩なのかもしれないけど……

「(誰か相談出来る相手っていたかしら……)」

携帯のアドレス帳を開き、色恋の相談が出来そうな相手を探す。だけど残念ながら、あたしのアドレス帳の中には、色恋に強そうな名前は登録されていなかった。

「あの子は流れで結婚しただけだし、あっちは出来ちゃった婚だし……」

よくよく考えると、あたしの周りってまともな恋愛をして結婚した友達っていないのね……

「(いつそ涼に……って、あのポンコツ夫婦に相談したら、次の日には朋也に知られちゃうわよね)」

実の妹と、その旦那を捕まえて酷いとはあたしも思うけども、実際のところあの二人はポンコツなのだ。特に相談事に対しての酷さは目を見張るものがある。

「あーあ、こんなに悩むなら、高校時代に朋也に告白しておくんだっただ……」

結果がどうであれ、今こんなにも悩む事は無かっただろうし……

「(振られたら未練とか残るのかな……それとも、すっぱりと切り替えられるのかしら?)」

あたしの性格上、後者の可能性が高いだろうけども、そこまで行く勇気があたしには足りない。普段思っても無い事をすばずば言えるのに、どうして肝心な事は言えないんだろう……

最近、杏のあたりが強くなってる気がする。理由は何となく……と
いうかほぼ間違いなくアレなんだろうけども、それでも酷いだろう
……

「(気持ちを知ってて黙ってる俺も悪いんだろうけどな)」

実を言うと、杏の気持ちは高校時代から何となく知っていた。だが
確証が無かったので放っておいたのだが、まさかここまで引き摺って
るとは思わなかった……

「(椋や勝平には何とかしてと頼まれるし、杏は杏で面倒くさいし
……)」

俺の中で、杏は友達だ。そこは間違いない。だが、一人の女性とし
て考えるとどうだ？

「(家事全般は問題ないらしいが、性格に難あり……あれを好意の裏返
しとして受け止めるだけの器量が、俺には無い)」

素直な杏つてのも気持ち悪いが、あそこまでツンデレってる杏も傍
迷惑なのだ。だから俺に椋と勝平が相談してくるのだろう。

「(面倒だが杏の話聞くしかないのか……)」

アイツが何で最近当たり散らしているのかは明白だ。だが決めつ
けるのは些かカッコ悪いだろ？ だって自惚れという可能性だって
捨てきれないのだから……

「(これが春原なら、百パーセント自惚れだと言いきれるんだがな
……)」

仕事を終えてからの方が疲れる、というのは何だかおかしい気がするが、半分は自分の優柔不断さが招いた事なので諦めるとしよう。

俺は杏がいるであろう勝平たちの部屋に向かう為に、スーパーによつて軽く摘まめる物を購入した。だって手ぶらで行つて椋の料理を食わなければならなくなるのは御免だからだ。

お誘い

珍しくお姉ちゃんが何の連絡も無く訪ねてきた。最近はここに来る前にメールで知らせてくれてたんだけど、今日は何の連絡もなしだったので、少し驚いた。

「お姉ちゃん、何かあったの？」

「ちよつと相談したい事があったんだけど……やっぱいいわ」

「何それ、凄く気になるんだけど」

「あんたたちに相談しても解決する未来が見えないのよね」

私と勝平さんを見て、お姉ちゃんは深いため息を吐きました。確かに私たちは相談事を解決できる、と言い切れるだけの自信はありませんけども、相談する事ですつきりする事だつてあると思うんですけど。

「棕さん、朋也君も来るって。今メールがあった」

「岡崎君も？ 珍しいですね」

お姉ちゃん以上にこの部屋を訪れる回数が減っている岡崎君も今日ここに来る、なんてかなりの偶然が重ならなければ起きなかつたでしょうね。

「と、朋也が来るの!? あたし帰る！」

「お姉ちゃん？ もしかして今更岡崎君に会うのが恥ずかしくなつた、とかじゃないよね？」

「そ、そんなわけ無いでしょ！ なんであたしが朋也に会うのが恥ずかしいとか思わなきゃいけないのよ！ 大体朋也なんて高校時代からほぼ毎日顔を合わせてたんだから、今更恥ずかしいとか思う訳無いでしょ！」

「だよね？ じゃあ別に慌てて帰る必要も無いよね？」

「それは……」

普段から私の方が言いくるめられるので、ここぞとばかりにお姉

ちやんを言葉で攻め立てる。攻める、と言っても私が言っている事はお姉ちゃんが反論出来ないと分かかって言っているのでより性質が悪いんだろうな。

「何だか朋也君も相談したいらしいから、杏さんも一緒にどうですか？」

「で、でも……朋也が相談するならあたしは邪魔かなーって」

「そんな事ないよ、お姉ちゃん。岡崎君だってお姉ちゃんを邪魔だなんて言わないと思うよ」

「そうだね。朋也君はそんな事を言う人じゃないもんね」

知ってか知らずか、勝平さんも私の援護射撃をしてくれる。ここでお姉ちゃんを帰したら、それこそ岡崎君と顔を合わせる機会が減ってしまうのだから。

「掠、アンタ面白がってない？」

「そんな事は無いけど？ それとも、お姉ちゃんは私がお姉ちゃんを苛めてるとか思ってるの？」

「そ、そんなわけ無いわよ……」

私の心の裡が分からないお姉ちゃんは、妹を疑う事に抵抗があるよ。うなので、こうやって攻めればすぐに諦めてくれる。

「それじゃあ、岡崎君が来るまでお姉ちゃんの相談したい事を聞くよ？」

「だ、大丈夫よ……自分で何とかするから」

頑なに相談したくなさそうだったので、これ以上聞き出そうとするのは止めておこう。だってこれ以上しつこくしたら、お姉ちゃんが逃げちゃいそうだったので。

扉の向こうが騒がしい。まあこの部屋は何時もの事か。

「おーい、勝平。来たぞ」

「いらつしやい、岡崎君」

「掠か。これ、差し入れ」

「何時もすみません」

恐縮しながら俺が買ってきたものを受け取る掠。別に大したものを持って来ている訳ではないので、そこまで恐縮されると、こっちの方が申し訳なく思う。

「やっぱり今日もいたか」

「なによ？ あたしがいたらいけないの？」

「いや、お前の分も買ってきたから、いなかったら余るな、と思っただけだ」

「そ、そう……ならいいのよ
「？」

杏に何時ものキレが感じられなかった。まあ最近様子がおかしいとは知ってたし、原因が俺かもしれないというのも、何となく知ってるので、これ以上つつく事はしないでおこう。

「いらつしやい、朋也君。それで、相談したい事って？」

「いきなりだな……まあいつか。お前から聞いた杏の様子なんだが、ホントにおかしいな」

「でしょ？ だから朋也君なら何とか出来るんじゃないかって思っ
た」

「何とかねえ……」

少し考えるフリをして、俺は杏に視線を向けた。もともとの話を
する為にこの場所に来たので、杏がいなかったら来た意味が無いの
だ。

「なあ杏」

「なによ？」

「今度の休み、気分転換に何処かに行かないか？」

「あんたと二人で？」

「嫌なら勝平たちも一緒でも良いぞ」

「……悪くないわね」

コイツと二人で遊びに行くなんて、昔でも無かったな……春原や他
の連中も一緒ならあったかもしれないけど。

「ごめんなさい、その日は私仕事です」

「そうなの？」じゃあ勝平さんだけでも」

「僕と一緒にじゃそれほど遠出出来ないでしょ？ だから気にせず二人
で行ってきてください」

「……じゃあ朋也、詳しい事はまた後で決めましょう」

「おう」

意外と乗り気な杏に面食らいながらも、俺は後ろで嬉しそうにして
いる勝平と掠に軽い睨みを利かせておいた。こうなる事を狙ってた
癖に、白々しかったからだ。

それぞれの想い

朋也にデートに誘われた。もしかしたら朋也はデートじゃなく単純に気分転換で遊びに誘ったのかもしれないけども、事情を知らない人たちから見れば、あたしと朋也の二人が恋人同士に見えるのかもされない。

「出かけるのは明日なのに、何であたしは今から緊張してるんだろう」

約束の時間は明日の午前九時。現時刻は午前十時なので、まだ一日近く先なのに、あたしの鼓動はずっと早いテンポを刻んでいる。

「落ち着け……朋也はデートだなんて思って無いんだから」

悲しい自己暗示。だけどこうでもしなければ、あたしの心臓は大人しくなってくれない。早鐘を打ち過ぎて疲れてしまうかもしれないのだ。

「とりあえず、明日着る服を決めないと……」

本当に心臓を落ち着かせたいのなら、明日の事は考えずに普通に生活するのが一番なのだろうけども、それだけはどうしても出来そうにないので、あたしは出かける事以外の事を考えて落ち着かせる事にした。

「改めて見ると、あたしつってろくな服持ってないのね……」

幼稚園の先生なんて、お洒落する機会など殆ど無い。加えてあたしには恋人なんていなかったのだから、機動性重視の服装になってしまうのだ。要するに、デートに着て行くような服を、あたしは持っていないのだ。

「つてー！ デートじゃないんだってばー！」

誰に言い訳するでもなく大声でツツコミ、あたしは頭を抱える。

「あーどうすればいいのよー！ 誰か相談出来る相手は……」

真つ先に思いついた相手は椋。妹の椋なら相談しやすいと思ったのだけでも、あたしとあの子じゃ決定的に違う部分があったのを思い出して止めた。

「他の部分は同じくらいなのに、何であの子はあんなに成長してるのかしら……」

自分の身体に目を落とし、そして頭の中で椋の身体の一部を思い浮かべる。双子と言っても、あたしと椋とでは決定的に違う場所が存在するのだ。

「今度秘訣でも聞いてみようかしら……」

あたしも小さくは無いけども、椋と並ぶと霞んでしまうのだ。それくらいあの子の胸は大きいのである。

「そう言えば最近また大きくなってるとような気が……」

もしかしたら、勝平さんに揉まれているのかもしれない。別におかしい事は無いわね、夫婦なんだから……

「でも、それが秘訣だと言われたら、あたしは誰に揉んでもらえば良いんだろう……」

そんな相手などいないし、今も朋也とデートだと考えるだけで早鐘を打つくらい、あたしは異性との付き合いが乏しいのだから……

杏を気晴らしに誘ったのは良いが、アイツはそれで元に戻るのだろうか……勝平や棕からそれとなく誘えというオーラが出ていたし、杏の気持ちを何となく知ってる身としては、誘わざるを得ない感じがしていたのも理由の一つだ。

「俺は、杏の事をどう思っているんだ？」

高校時代からの友人、悪友、容赦なく言い合える数少ない異性。あげればきりが無いだろう。だいたい、高校時代に俺や春原に普通に話しかけていたのは、高校三年の時を除けば杏くらいなものだ。

委員長つて事も多分にあったのだろうが、アイツはそんな事関係なく話しかけてきてただろう。とにかく一緒にいて楽なのだ。

「(楽つてのは一番大事だよな……)」

一緒にいて疲れる相手と付き合うのは大変だろう。例えそれが恋人だろうが友人だろうが関係なく、一緒にいるなら出来るだけ楽な相手が良いと思う。

「(まあ、棕や勝平は少し大変だけどな)」

あの二人は基本的には大変ではないのだが、二人とも頭のネジが緩いのか、とんでもない大ボケをかます時があるのだ。その点だけは何とかしてほしいのだが……

「(杏も、酒さえ飲まなければめんどくさくは無いんだよな)」

弱いくせに酒を飲みたがるので、毎回介抱させられている身としては、何としてでも酒を断ってほしいと思う今日この頃、それさえなければ本当に杏と一緒にいて楽な異性だと言えるだろう。

「(明日、自分の気持ちをちゃんと考えるとするか)」

目を逸らしてきた……いや、分かかって触れようとしなかった事柄に触れなければいけない時が来たのだろう。俺はとりあえず今はこの事を考えないようにして、仕事に集中し直す事にした。

「(そもそも、俺は杏の事を友達だとずっと思ってきたんだから)」

そう自分に言い聞かせ、俺は目の前の仕事に集中する事にしたのだった。

待ち合わせ

杏と出かける為に、俺はアイツと待ち合わせをしてその場所で待っている。約束の時間は午前十時。現時刻は午前十時半……完全に遅刻だ。

「杏のヤツが遅刻なんて珍しい……いや、ある意味昔のままか」

アイツは高校時代から遅刻が多く、酷い時はバイクに乗って学校まで来ていたからな。

「勝平と初めて会った時も、杏はバイクに乗ってたな……」

つまりは俺も杏も遅刻していた時に、運良く——いや、運悪く？

勝平が俺たちの前に現れてそのまま杏のバイクに撥ねられたのだ。

「さすがに今日はバイクで来ないだろうな……」

アイツが遅刻＝バイクで移動する、という考えが頭の中をよぎり、俺は思わず苦笑いをしてしまった。高校時代は兎も角、今は俺もアイツも携帯を持ってるんだから、連絡して遅れる事を伝えれば良い。

「まさか、忘れてるんじゃないだろうな？」

一抹の不安を覚えて、俺は携帯を取り出した。杏からの連絡は来っていない。

「アイツ、何やってるんだ？」

別に電車を使わなければこれない場所を待ち合わせ場所にしたわけでも、アイツの家からものすごく遠い場所にしたとか、そんな事は一切ないのだ。

「ご、ゴメン……待った、よね？」

「まあそれなりに。どうしたんだ？」

これが待ち合わせ前の時間なら、俺も平均的な気遣いは出来ただろ

う。だが既に三十分以上待たされた上に、何の連絡も無かったのだ。これくらい嫌みは許してもらいたい。

「別に大した事じゃないんだけど……緊張で吐きそうになってたのよ」

「……緊張？」

何を今更、と笑おうとしたが、杏の顔を見てその事は出来なくなつた。杏の顔には本当に緊張の色が濃く出ており、今も少し気持ち悪そうにしているからだ。

「なんなら中止にしても良いが……」

「そこまでしなくても大丈夫だから！　そ、それより、少し休んでいい？」

「あ、ああ……どこか入るか？」

あまりの酷さに俺も慌てる。近くの喫茶店に入り、杏が落ち着くまでここにしようと決めたのだった。

杏さんと朋也君がデートという事で、僕はリハビリがてらその二人を尾行する事にした。ちなみに棕さんは本当にお仕事なので、今回は僕一人での行動となる。

「朋也君は待ち合わせ時間より前に来た、でも杏さんはまだのようだね」

待ち合わせ時間は、杏さんから教えてもらった棕さんから聞いている。だけどその時間を過ぎても杏さんの姿は一向に現れないのだ。

「何してるんだらう？　もしかして当たり前過ぎて忘れてるとか？」

高校時代からの付き合いなら、二人で出かける事もあつたかもしれないし、杏さんにとって朋也君と出かける事は特別じゃなく当たり前なのかもしれない。

そんな事を考えながらの三十分強、漸く杏さんの姿が待ち合わせ場所から確認出来た。その表情は凄く疲れていて、更に調子も悪そうだった。

「もしかして、緊張して体調崩したのかな？」

棕さんも初めてのデートの時に似たような感じで遅刻して、似たような顔をしてたからおそらくそうなのだろう。変なところで双子なんだと実感させられた。

「朋也君も慌てるし」

普段冷静な朋也君も、あの杏さんの姿を見たら冷静ではいられなかったようで、凄く心配そうに杏さんの顔色を窺っている。

「どうやらお店の中で休憩するらしい」

慌ててその店に近づき——バツチリ朋也君と目が合ってしまった。

「あ、あわ、あわわわわ……」

杏さんに断りを入れて、朋也君が腰を浮かせた。そして迷うことなく僕のところにやってきた。

「お前も暇だな」

「えつと……何時から気づいてた？」

「何となく最初から。てか、あれだけ声を出してたら普通気づくだろう」

「どうやら僕は考えを全て声に出していたらしい。自分では心の中心だけにとどめてたつもりだったのに……」

「杏には黙っておくから、大人しく帰れ」

「うん……僕に尾行は無理だって分かったからね」

「考えを声に出してしまってる時点で尾行者としては失格だろう。そもそもあつさりと対象に気づかれるんだから、これ以上尾行しても意味は無い。」

「僕は注文した飲み物を一気に飲み干すと、すぐにその店から逃げ出した。その所為で会計を忘れたんだけど、どうやら朋也君が払ってくれたようで飲み逃げとして追われる事は無かった。」

「今度朋也君にお金返さなきゃ……」

「その事に気付いたのが家についてからだったので、僕はただただ気まずい感じに陥ってしまったのだった。」

昔の話

とりあえず落ち着きを取り戻したあたしは、朋也と一緒にブラブラと歩く事にした。本当なら電車を使ってどこかに行く予定だったのだけでも、あたしの体調を気にしてか朋也がそう提案してくれたのだ。

「悪いわね、ホント……遅刻した挙句に予定を変更させるなんて」

「気にするな。別に大した予定を組んでた訳でも無いんだ」

「そうなの？」

「俺とお前の二人だからな。テキトーに歩いてても楽しめるだろうし、気になった場所に寄るって感じで良いだろうと思ってたからな」

確かにそれでも十分楽しいだろう。なんといってもあたしと朋也は昔からそんな感じで付き合ってたんだし、それが大人になっても変わらないのは嬉しい事だ。

でも、ちよつとだけ残念に思っている自分がいる事に、あたしは驚いた。何がそんなに残念なのかは、自分では分からないフリで誤魔化したのだけでも……

「しかし、この街も変わらないよな」

「そうね。あの店って昔陽平に奢らせた場所よね」

「あつたな、そんな事も。あの時の春原の顔、最高にヘタレだったよな」

「うんうん。まあ、陽平は何時もヘタレだったけどね」

「違うない」

高校時代の事を思い出して、朋也と談笑する。こういう風に特に意識することなく会話出来る時は問題ないのだ。だけど、一度意識してしまうともう駄目。朋也とまともに会話する事すらままならなくなってしまうのだ。

「今度春原の地元にも行ってみるか」

「何しに？」

「アイツの高校時代の『武勇伝（笑）』を広めに」
「面白そうね。でも、あたしもアンタもそこまで暇じゃないわよね」
「そうなんだよな……春原みたいに土日祝日が確実に休みってわけでもねえしな。特に俺は」
「あたしも運動会とか色々行事があつたりするからね。やっぱり陽平にこつちに来てもらって、それでパシらせるのが一番よね」
「そうだな。アイツは俺たちにパシられる為にこの街に来るんだもんな」

どうしても話題は共通の知人（下僕）である陽平の事になってしまふ。近況報告とかそんな事で盛り上がり上がるほど、あたしと朋也は会って無い訳じゃないのだから。

「そういえば、ボタンのやつは元気なのか？」

「ボタン？ あの子なら幼稚園にいるわよ」

「マジで!？」

「うん。子供たちに大人気なのよね。乗れるって」

「……あの子供だったボタンがそんなに」

「人間とは違うからね」

そう言えばボタンって、朋也に懐いてたのよね。何でか分からないけど、朋也にはあつさりと心を開いたのよ。もちろん、最後まで陽平には心を開かなかつただけでも……

「ねえ朋也」

「ん？」

「今度ボタンの散歩に付き合ってよ」

「散歩？ アイツ、まだ散歩するのか？」

「当たり前でしょ！ それに、ちゃんと見て無いと野生のイノシシと勘違いされて狩られちゃうし」

「近所じゃ有名なんじゃないのか？」

「こころ辺一带なら知ってるでしょうけど、全員がこの街の人、って訳じゃないでしょ」

「それもそうか……別に構わないぜ。俺も久しぶりにボタンに会いたいし」

「じゃ決定ね！ 今度電話するわ」

思わぬ形で朋也に電話する機会を得たわね。

「(ありがとう、ボタン！ 今日の晩御飯はお好み焼きにしてあげるわね)」

心の中でボタンに感謝して、その印としてボタンの好物を作っ
てあげる事にした。

「この交差点」

「ん？」

「お前が勝平を撥ねた場所だよな」

「……嫌な事思いつかせないでよね」

「お前、俺や勝平以外の人間を撥ねたりしてねえだろうな？」

「失礼ね！ あたしがそんな事するように見えるわけ？」

「見える」

そりやそうよね……逆切れだつて分かってるし、実際に朋也と勝平
さんの事を撥ねてるんだから……

「安心しなさい。あたしが撥ねた事あるのはアンタと勝平さんだけ
よ」

「安心出来るか！ そもそもあれはどう考えても交通事故だろうが
！」

「うっさいわね！ 昔の事をグチグチと言つてるとモテないわよ！」

「大きなお世話だ！」

周りの人が聞いたらかなり物騒な会話なんだろうけども、あたしと
朋也の間ではそれほど物騒な会話ではない。むしろ昔から続いてい
る言い争って楽しむ、つて感じなのよね。

素直になれないけど、こうやって昔の感じのまま言い合えるの

は、やっぱり朋也だけなんだと思った。

偶然の遭遇

棕さんも仕事で、朋也君と杏さんは二人でお出かけなので、僕は今部屋に一人だ。別に珍しい事ではないんだけど、最近是谁かしらと一緒にいたので、久しぶりに一人だと何だか調子がくるってしまう。「もう一度尾行しようにしても、今朋也君たちが何処にいるかなんて分からないし……散歩でもしよう」

こんな事になるのなら、帰ったフリをして朋也君たちを尾行し続ければよかったよ……まあ、すぐに朋也君にバレて終わってたかもしれないけど。

「漸く杖が無くても歩く事は出来るようになってきたし、このまま順調に行けば近いうちに出かけるのに杖が必要じゃなくなるだろうな」

今でもとりあえず持っているだけで、あまり使う機会は無いのだ。執念か、はたまた生来の回復力なのかは分からないけど、僕はかなりのスピードで回復していつているらしいのだ。

何故らしいとしか言えないのかと言えば、病院でもそう言われるだけで原因がハッキリと分からないからだ……お医者さんが分からない事を、僕が分かるはずも無いのだ。

「でも、散歩と言ってもな……ここら辺は既に何十回と歩いたし、目新しい何かが見つかる訳もないしな……」

別に新発見をしたい訳ではないんだけど、何十回と歩いた見慣れた光景を楽しむのは、少し難しい事ではないかと僕は思っている。

改めてじっくり見直したところで、些細な発見すらなくくらいに僕はここら一带の景色を見ているのだ。それしか暇をつぶす方法がなかったから……

「病院は明日だし、やっぱり散歩しか暇をつぶせる事は無いかな……料理をしようにしても、僕一人じゃまだ何も出来ないし……」

朋也君と杏さんに掠さんがいない時料理を習っているのだけでも、僕の現状の腕では何一つまともに作る事は出来ないだろうと分かっているの、食材の無駄になってしまう行為は避けるべきだろう。「さて、考えても散歩しか選択肢は無いんだし、大人しく散歩に出かけるとうまいか」

誰に聞かせるでもなく、自分自身を納得させる為に呟いた言葉で、僕は散歩に出かける決心をしたのだった。

「今日はどのあたりを歩こうかな」

散歩はかなりの回数しているのだけでも、こうしてルートを考える時は未だにわくわくする。何か新しい発見があるんじゃないかと、心のどこかで期待してるんだらうな。

「商店街の方にも行ってみようか」

僕があまり近寄らない場所だからこそ、何か新しい事が見つかるかもしれない。そんな淡い期待を抱きながら、僕は商店街へと続く道を歩き始めた。

商店街に到着し、僕はブラブラとショウウィンドウを覗き込む。所

謂ウインドウショッピングだ。

「(こうやって見るだけでも結構面白いんだな……今度朋也君か杏さん、棕さんと一緒に来てみよう)」

昔からこういつた事をする方ではなかったもので、今更ながらに楽しさに気付いた。この事は朋也君たちは知ってるんだらうか？

「あれ？」

そんな事を考えていたからか、前方に朋也君らしき人影を見つけた。でも、今日は杏さんと二人で何処か遠出してはるはずの朋也君が、この街の商店街にいるなんて事が……

「勝平、お前まだいたのか」

「……一度帰ってまた散歩で出てきただけだよ。それよりも、朋也君たちこそ何で？」

「杏の体調が優れなくてな。遠出は諦めてブラブラと歩いてたんだよ」

確かに杏さんの顔色は、何時もの感じより少し気分が悪そうに思える。でもそれは、それなりに付き合いがある人間だけが見抜けるような僅かな変化だ。それを見抜くとはさすがが朋也君だ。

「じゃあ僕も一緒にしてもいいかな？ 一人でブラブラしてもあまり楽しくないし」

「まあ、そういう事情なら仕方ないな。杏も構わないよな？」

「あたしは問題ないわよ。むしろ勝平さんがいてくれた方が安心出来るし」

「如何いう意味だ」

杏さんの軽口に朋也君が合わせる。これが僕だったら言葉通りに受け取ってへこむとこだけど、朋也君はあれが冗談だとすぐに見抜いたのだ。

やっぱりそれなりの付き合いと、元々の相性の良さが原因なんだろう

うな。この二人は一緒にいてかなり自然にふるまえているのだ……
なのにどちらも想いを伝える事をしないのは何でだろう？ 僕には
その事が不思議でしようがないのだ。

そんな事を考えながらも、僕はその事を口に出さずに二人とブラブラ
ラしていた。だって聞いて怒らせたら怖いから……

相談したい相手

朋也と一緒に出かけるとっただけで、あたしはあんなにも体調を崩すなんて思っても無かったわね……おかげでただ商店街をブラブラと歩いたり、気になったモノを見たりするだけになってしまった……
「（よく考えれば、朋也と二人だけって高校時代もそんなに無かったわよね……）」

あつたとしてもせいぜい学校の敷地内、もしくは坂を下る少しの間だけだったはず……それじゃあ緊張しちゃうのも仕方ないのかもしれないわね……

「ねえねえ朋也君、これって棕さんに似合うかな？」

「そこに似たようなヤツがいるんだから、そいつに聞いたらどうだ？」

「ちよつと！ 双子だからって同じように扱うのは止めてよね！」

「別に同じように扱ってねえよ。ただ俺に聞くより双子の姉がいるんだから、そつちに聞いて言ったただけだろ」

どうしても朋也にはこうやって強く当たってしまう。本当はもっと素直になりたいのに……あたしってばホント恋愛下手なのね……

「うくん……杏さんと上手くイメージ出来ないよ」

「じゃあ自分の頭の中で棕に似合うかどうかイメージするんだな」

さつきから朋也は勝平さんに引つ張られて棕へのプレゼント選びに付き合わされている。ぶっちゃけると勝平さんが朋也の相手をしてくれているから、あたしは平常心を取り戻そうと努力出来てるのだ。

「だいたい勝平。お前そんな金持ってるのか？」

「え？……止めておこう」

値札を見て勝平さんが手に持っていた小物を元あつた場所に戻した。気持ちは大事だけでも、それ以上に大事なのはお金。つい最近ま

で入院していた勝平さんにそれだけのお金があるとも思えないものね……仕方ないわよ。

「そうだ。朋也君、さっきは奢らせちゃってごめんね」

「別に構わん。それよりも、杏はさっきから随分と大人しいな」

「へ？ ……別に良いでしょ！」

「まあ構わないが……まだ気分でも悪いのか？」

あたしの顔色を窺うように、朋也がしゃがんで視線を合わせてくる。それだけであたしの心は落ち着きを失い、見るからに動揺してしまうのだ。

「べ、別に問題無いわよ！ それよりも早く次の場所に行きましょう！」

「……そうだな」

明らかに疑ってる顔をしている朋也だったけども、深く追求してあたしが逆切れするのを嫌ったのかそれ以上追及はしてこなかった。

「朋也君、何処か安くていいお店知らないかな？」

「何となくニュアンスがおかしいが……別に焦る必要は無いんじゃないかな？ お前が一人で問題なく出かけられるようになって、仕事先が見つかった後でも遅くないと思うぞ？」

「でも、棕さんには散々迷惑かけちゃったし……」

「棕はお前の面倒をみるのを迷惑だと言ったのか？」

「そんな事言わないよ！」

朋也の質問に勝平さんがムキになって答えた。その答えを聞いて、朋也は軽く笑って言う。

「なら焦る事は無いだろ。好きで面倒みてくれてたんだから、お礼はもう少し自立してからでも」

「朋也君……うん、そうするよ」

ほんとコイツって他人の相談事を聞いて解決する事だけには長けてるわよね……高校時代も周りの問題を自分の問題のように背負っ

て解決してたし……

「さて、勝平の悩みも解決した事だし、そろそろ次に行こうぜ。何時までもここにどどまってたら店の人に迷惑だしな」

「そうね……」

あたしの悩みも、朋也に相談出来れば解決するのかしら？ てか、

悩みの種である朋也に相談するなんて、どう頑張っても無理よね……

「ねえ杏さん」

「なに？」

「朋也君に告白はしないんですか？」

「っ!? な、なに言うのよ!」

「痛いっ!?!」

つい恥ずかしくなって勝平さんに攻撃してしまった。

「ご、ごめんなさい」

「ううん、僕も悪かったですから」

叩かれた箇所をさすりながら、勝平さんは笑いながら許してくれた。その光景を、朋也が呆れながら見てたのに気づいたあたしは、気恥かしさから視線を逸らしたのだった。

帰宅

仕事から帰ってきたら、部屋で勝平さんとお姉ちゃんがグダグダしていた。どうやら岡崎君はいないらしい。

「ただいま」

「あつ、棕……お帰り」

「お姉ちゃん、今日は岡崎君とお出かけじゃなかったの？」

「それが気分悪くなっちゃって……ここら辺をブラブラしただけで、途中から勝平さんも一緒に歩いてただけよ」

「勝平さんも？」

今日はノンビリ過ごすつて聞いてたけど、勝平さんお出かけしたんだ。

「二人の様子が気になってね。こつそりと後をつける予定だったんだけど、すぐ朋也君に見つかっちゃってさ」

「岡崎君は視野が広いですからね。簡単に見つかっちゃいますよね」

実際高校時代に遊び半分の後をつけたらすぐに見つかっちゃいましたし。

「それはアンタや勝平さんがどんくさいからでしょ。朋也はそんなに感が鋭い方じゃ無いと思うけど」

「普段は鋭かったじゃん。恋愛関係には確かに鈍かったけど」

高校時代、岡崎君の事を好いていた女子は結構多かったのだが、不良というレッテルと、岡崎君自身の鈍感さでついに誰とも付き合わずに岡崎君は卒業してしまったのだ。

「大体、朋也が誰かと付き合ってくれてれば、あたしだって何時までも引きずる事も無かったのに」

「岡崎君に普通に話しかけられる女子は少なかったから。それに、岡崎君はあんまり興味なさそうだったし」

「そうだね。何時も春原君をいじめて遊んでたりしてたもんね」

岡崎君と知り合ったばかりの勝平さんですら、当時すでに岡崎君と春原君が対等な友人関係では無い事に気づいていたのだ。まあ、本当に仲が良いからあんな事も出来てたんでしょうけどもね。

「違うわよ、勝平さん。アイツは苛めてたんじゃなくってパシってただけよ」

「どう違うんですか？」

「友達だから、冗談で済むような事しかアイツはやって無いわよ。本当に苛めるようなヤツなら、さすがに陽平だって朋也とつるんだりしなかったでしょうし」

「そう言えば、岡崎君って怒ると怖いけど理不尽に怒ったりはしなかったもんね」

高二の時、私がお姉ちゃんの間違えられて出場した球技大会の試合で、私がへまして転んで周りが笑った時も、岡崎君はその笑った人たちを一睨みし、私を心配してくれた。もし本当に不良だったのなら、あんな事はしてくれなかったのかもしれないしね。

「朋也君って怒るんだ」

「怒るわよ。確かに怒ると怖いけど、あたしたちには怒った事は無いわね、そう言えば……：注意とかはされたけども」

「お姉ちゃん、委員長だったのにサボったりしてたからね」

「お互い様だったのよ？ それなのに朋也はあたしを注意するんだもん」

「お姉ちゃんまで不良だと思われるのを避けようとしてたんじゃないの？ 岡崎君だって遅刻やサボりなどで不良だって思われてたんだし」

「……：そういうえばそうよね。普通の高校ならそんなの全然不良じゃないし」

今頃になって気が付いたようで、お姉ちゃんは納得したように手を打ちました。

「よく考えれば、あたしも不良だって思われても仕方ないような生活をしてたのね……」

「それにお姉ちゃんも岡崎君や春原君と普通に話してたし」

「だって別に遠慮するような相手じゃないし」

「そうかもしれないけど、他の人は話しかけられなかったし」

男子は少しくらいは話しかける人がいたけど、女子であるの二人に話しかけられる人は多く無かった。むしろ殆どいなかった。

「だいたいねーアイツらを怖がる理由が分からないのよね」

「春原君は見た目から敬遠されてたし、岡崎君は普段から寝不足で細目がちだったからね」

「今は少しましになってるからね」

社会人になり、規則正しい生活をしているから今の岡崎君は高校時代より怖さを感じない。もともと私たち姉妹は岡崎君の事を「怖い」と思った事は無いんですけどね。

焦る杏

朋也と出かけてから暫く経ったある日、携帯がメール着信を告げる。メロディからして仕事先とか同僚からではない。

「誰、こんな時間に……」

まだ朝と呼ぶには暗すぎる時間だ。普通なら誰が相手だろうと半ギレして返信しても怒られないだろうと考える時間だ。

「えっと……朋也!?!」

メール差出人を確認して、あたしは大声を上げて飛び上がった。まさか朋也からメールが来るとは思って無かったからだ。

「いったい何の用なのかしら……」

興味津津ながらも少しビクビクしながら、あたしはメールを開いた。

「えっと……今日の午後、二人で何処かに行かないか。これってひよっとして……」

デートのお誘い？

今日は日曜で確かに予定は空いている。でもいきなり言われても心の準備とか色々あるのよね……でも朋也は深い意味は無く誘ってるのかもしれないし……

「って！・年頃の女性をなんの意味もなく誘う訳無いわよね……」

朋也だつて男だ。下心皆無で近づいてくる訳無いわよね……これが陽平とかだつたら一発で下心アリと判断出来るのに……

「えっととりあえずは……」

速攻で顔を洗いう着替えを済ませたあたしは、相談する為に椋の家へと急いだ。確か昨日は早番で、今朝は家にいるはずだしね。

まだ少し暗い時間に目が覚めた僕は、棕さんが起きるより早く朝食の準備を終わらせるためにキッチンへと向かう。ここ最近朋也君や杏さんに教わって少しは料理が出来るようになったのだ。

「まあ、二人に比べるとまだまだ何だけどね……」

誰に聞かせるでも無い呟きをこぼして、僕は調理を開始する事にした——のだが、外に人の影が見えたのでその手は止まってしまった。「誰だろう、こんな時間に……?」

早朝とはいえ日曜日だ。こんな時間に訪ねてくる人に心当たりは無い。朋也君はこんな時間に来ないし、杏さんだってまだ寝てるだろうし……

「勝平さん、棕、起きてる?」

「杏さん?」

一応は周りの部屋に気を配ってるようで、小声だったけども僕たちには気を使って無い感じだった。

「ちよっと待って下さいね」

僕は扉のチェーンを外して鍵を開ける。何の用事かは分からないけど、こんな時間に訪ねてくるなんて余程の事なんだろうな。

「えっと……こんな朝早くに何の用ですか？」

「ちよつと急用よ。椋、起きてる？」

「……あれ？ お姉ちゃん……何でこんな時間に？」

椋さんが目を覚まして時計に目を向けた。時間を確認してから、今度は杏さんが来た理由を訊ねた。

「と、と、と……」

「とっ？」

普段ハッキリと物事をいう杏さんが言い淀んでいるのを、僕と椋さんは不思議に思い視線を合わせた。そして杏さんに視線を向けた。

「朋也にデートに誘われた！」

「……はい？」

杏さんの発言に、僕と椋さんは揃って声を上げたのだった。

お姉ちゃんの相談を聞きながら、私は呆れながら聞いていた。そもそもまだ眠いので、半分以上寝ながら聞いていた。急に叩き起こされ

てあまり私には関係ない事を相談されているのだ、興味も失せ舟を漕いでしまうのも仕方ないと思う。

「ちよつと掠… 聞いているの?」

「う、うん……聞いているよ」

テキストに相槌を打っていたのだけでも、遂にお姉ちゃんが私が聞いて無いんじゃないかって思いました。

「こんな時間にデートの誘いなんてどう思う?」

「どうって……普通に予定が空いたからお姉ちゃんを誘ったんじゃないの?」

「そんな簡単に異性を誘えるものなの?」

「岡崎君、高校時代から普通に誘ってたと思うけど」

お姉ちゃんや他の女子と一緒に行動してたりしてたもんね。その行動力は尊敬されていたもんね……主に他の男子から。

「とりあえずお姉ちゃん、こんな時間に来てその事を相談しに来たの?」

「どうよ?」

「……ハア。お姉ちゃん、さっさと覚悟きめて告白すればいいじゃん。

岡崎君だってお姉ちゃんの気持ちに気づいてると思うよ?」

私が呆れながら言ったセリフに、お姉ちゃんは驚いたような顔をしていた。もしかして気づかれて無いつて思ってたのだろうか……

三者三様

あれから暫く経ち、世間はお盆休み間近になっていた。あの日から、あたしと朋也は滅多に顔を合わせなくなってしまった……互いに仕事が忙しくなったのと、あたしが朋也と顔を合わせるのを嫌ったからだ。

「ほんと、どうしちゃったんだろう、あたし……」

仕事の帰り道、一人誰に聞かせるでも無いセリフをこぼす。あたってばもつとサツパリとした性格のつもりだったんだけど……

「ん、メール？ 誰かしら」

最近では滅多になる事の無い携帯が、メールの着信を告げた。あたしは少し面倒だと思いつつも、鞆から携帯を取り出してメールの相手を確認した。

「勝平さん？ いったい何の用かしら」

ここ数カ月あの部屋にも寄って無い。だから偶には顔を見せてほしいとかそんな感じの内容だと勝手に解釈して内容を読まずに携帯を鞆の中に戻す。

「家に帰ってから確認すれば良いわよね」

またしても一人呟いて家路を歩く。このメールが後の私の人生を大きく左右する事になるものだと、今のあたしには知る由も無かったのだ……

勝平からメールが着て、その内容を確認して俺は呆れた。

「春原のヤツ、何で俺や杏じゃなく勝平にメールしたんだ？」

その内容とは、お盆の時期に春原がこつちに遊びに来ると言う事だったのだが、先に言ったように、何故勝平にその事をメールしたのかは不明だ。

「だが、もうそんな時期か……」

暫く勝平や椋、杏とも顔を合わせる事も無く仕事していたからな……気づいたら会社内で俺が一番成績が良くなっていたのだ……まあ元から一位か二位の成績だったのだが、ここ何カ月かはぶつちぎりの一位だ。

「だからって給料が上がる訳じゃないんだけどな……」

今年の給料は既に額が決まっているので、成績が反映されるのは来年の給料から……だから成績上位だからといって今すぐ贅沢が出来るわけでもないのだ。

「そういえば春原のヤツ、仕事出来てるのか？」

高校時代を思い出すだけだが、アイツが何かをちゃんとした事などあっただろうか……勉強、部活、恋、生活態度、何一つまともに来たためしが無いように思えるんだが……

「まっ、春原の事だから職場でもパシられてるんだろうけな」

俺はそう結論付けてさっさと家に帰る事にした。ここ最近勝平

や棕のボケを相手にする事も、杏の理不尽な怒りに曝される事も無いのでゆっくりと休む事が出来ているのだ。

「あれはあれで楽しかったけどな」

会おうとすれば何時でも会える。その考えがあの家へ足を向かわせる事を億劫にさせているのだろう。だが、それでも構わない。生きてれば何時でも会えるし、機会があればこうやって集合出来るんだからな。

朋也君と杏さんにメールを送り、僕はホッと一息吐いた。最近は二人とも遊びに来てくれないので、棕さんが仕事の時僕は一人でこの部屋でのんびり、もしくはハリハビリの為の散歩をしなければならないのだ。

「二人とも働いてるから仕方ないけど、もう少し会いに来てくれてもいいんじゃないかな……」

ちよつと前までは、杏さんは毎日のようにこの部屋に遊びに来てくれてたし、朋也君も週に二、三回は顔を見せてくれていたのに、あの日を境に二人ともこの部屋に顔を見せる事を躊躇ってしまっている

のだろう。

「杏さんは兎も角として、朋也君まで来なくなるなんて……ちよつと意外だな」

朋也君は杏さんの気持ちに気づいていながらも気にせず付き合ってたはずなのに、今更恥ずかしくなったとかそんな事は無いと思うんだけどな……

「まあ、春原君でも役に立つ事はあるんだね」

他の誰かが聞けば、間違いなく酷い事を言ってると思われるだろうけど、朋也君と杏さんの中では春原君はそんな位置づけなのだ。だから僕も似たような評価を春原君にしているのだ。

「折角会えるんだから、朋也君と杏さんの関係が少しでも進展してくれると良いな……もしかしたら、朋也君が僕のお義兄さんになるかもだしね……」

他の人だとあまりピンとこないけど、朋也君となら僕は仲良くやっていける。だって朋也君は僕の数少ない友達なのだから。

久しぶりの春原

いよいよお盆になり、朋也君も杏さんも春原君も休みが取れる事になった。ちなみに春原君は今日の午後にはこの街にやってくる事になっっているのだ。

「どうでもいいが、アイツは向こうに友達がいらないのか？」

「バカねー朋也。陽平に友達なんているわけないでしょ？」

「それもそうだな」

「……………」

本人がいなくてところで朋也君と杏さんが酷い事を言っているのを聞いて、僕と棕さんは言葉を失った。これが高校からの付き合いが折りなるコンビネーションなのだろうか。

「ところで朋也、最近全く会わなかったけど、忙しかったの？」

「それはお互い様だろ。そもそも、勝平が退院する前の五年間、全く会わなかったんだから不思議は無いだろ」

「そうかもしれないけど……………ここ数ヶ月はちよくちよく会ってたじゃない」

「別に無理して会う必要も無かっただろ。会える時に会えばいいんだし」

朋也君の言ってる事はまったくもってその通りだった。僕が入院してる間、朋也君と杏さん、そして棕さんとの間に交流は無かった。かろうじて棕さんと杏さんの間には交流はあったけども、今みたいに頻繁に会っていたわけでもないのだ。

「それにしても、何で俺たちが春原の出迎えなんてしなきゃいけないんだ？」

「ホントよね。本来ならアイツが私たちを歓迎しなきゃいけないのに」

「でも、春原君はこの街に住んでる訳じゃないんだし……………」

「そうですよ。春原君もわざわざここっちに来てくれるんですから、せ

めて出迎えくらしいは……」

「いや、気に喰わない（わね）」

僕と椋さんの精一杯フオローも、朋也君と杏さんのコンビネーションの前に撃沈してしまった……やっぱりの二人は息ピッタリだな……

「やあ！ お出迎え御苦労！」

タイミング良く（悪く？）春原君が改札から現れて偉そうな態度を試みさせた。

「あつ？ 誰だお前」

「お巡りさーん！ なんか変な人が声掛けて来たんですけどー！」

「ちよつ!?! 何言ってるんだよ！ 僕だよ！ 春原陽平だよ!!」

「春原陽平?..」

春原君が必死になって言い寄ってるけど、朋也君と杏さんはふざけてる感じをさせない雰囲気醸し出している。

「なあ杏、こんなやつ知り合いにいたっけ？」

「あたしは知らないわね」

「そんな事言わないでくださいよ……僕だよ、貴方たちの知り合いの春原陽平だよー」

「……そう言えばそんな知り合いがいたかもしれないな」

「高校の時にそんな名前男子生徒がいたかもしれないわね」

「思い出してくれた？」

必死に思い出せてもらおうとしている春原君の顔を見て、朋也君と杏さんの顔に悪い笑みが浮かんだ。

「あー思い出した。自称親友の春原君じゃないですか！ お久しぶりです、元気でしたか?..」

「あー朋也の親友（下僕）の陽平君じゃないですか、思い出したわ!..」
「あんたたち、相変わらず酷いですね……」

春原君が棒泣きしている横で、朋也君と杏さんがお腹を抱えて笑いだした。

「相変わらず面白いな、春原は」

「弄り甲斐があるわよね、陽平って」

「思い出してくれたのは嬉しいけど、あんたらヒデエよ！ 相変わらず似たもの夫婦！」

「ああん？」

「ヒイ！」

朋也君と杏さんに睨まれて春原君は竦み上がってしまったている……まあ僕もあの目で見られたら竦んで何も出来なくなってしまうだろうな……

「とりあえず行こうよ、春原君も久しぶりなんだからさ」

「そうだな。何時までもコイツの相手をしててもつまらないもんな」

「そうね。陽平の相手をして時間を潰すのはもったいないもんね」

「……そうですね」

朋也君と杏さんに冷たい視線を向けられて、春原君はガツクリしてしまった。でもまあ、これがこの三人の付き合い方なんだろうなどと、僕と棕さんは苦笑いを浮かべながら三人の後をついていったのだ。

素直になれない杏

陽平を弄りながら、あたしたちは椋と勝平さんの部屋に向かう。前に陽平も招かれた事がある場所で、特に気を使わなくても良い場所となると、自然と二人の部屋って事になってしまふのだ。

「悪い春原、今から買い出しに行ってくれ」

「何で僕が来る前におかなかったんですかね!？」

「えっ？ だって春原に買い出しに行かせるために決まってるだろ」

「そうでしたね……貴方、そういう人でしたね」

朋也に買い出しメモを渡されて、陽平はシヨンボリと肩を落としてスーパーへと向かった。

「あつ、陽平、陽平」

「何ですか?」

「これ、追加の買い出しメモね」

「行く前に追加ですか!？」

「別に帰ってきてすぐに渡してあげても良いのよ?」

「杏さんの優しさに感謝します……」

棒泣きしながらあたしからメモを受け取った陽平は、今度こそスーパー目指して歩き始めた。

「お姉ちゃん、春原君に何を頼んだの?」

「ん? 特に必要無いものよ」

「じゃあなんで頼んだの?」

「だって陽平のお金だし、運ぶのも陽平だし」

「うわあ……」

「お前、相変わらず春原には容赦ないな」

「あつたり前でしょー! そういうあんただって陽平をパシってるじゃないの」

「俺は必要なものを頼んだからな」

確かに朋也のメモには、この後必要となる食材や飲み物が書かれていた。

「でも、ある程度はウチにあるよ？ 何でわざわざ春原君に買いに行かせたの？」

「だって春原の分は用意してないから。みんなが食べたり飲んだりしてるのに、春原だけ何も無しじゃ可哀想だろうが」

「うわあ……朋也君も杏さんと大して変わらないよ……」

あたしと朋也が大して変わらない？ それは聞き捨てならないわね……

「勝平さん」

「は、はい！」

「あたしは陽平が野宿するのは可哀想だからテントとランプとかを買いに行かせたの。朋也みたいに最初から陽平の分を用意しなかった訳じゃないのよ！」

「結局は野宿だろうが！」

「なによ？ テントがあるだけマシでしょ？ それともそこら辺に寝させるっていうの、あんたは？」

「可哀想だと思うなら、お前の部屋に泊めてやればいいだろ」

「冗談じゃないわよ！ なんて陽平なんて部屋に招待しなきゃいけないのよ！」

朋也と言い争いながら、二人の部屋に到着した。なお二人はあたしたちの言い合いを聞いて、凄く呆れたような表情をしていたのだった。

「さて、それじゃ早速料理を作るとするか」

「朋也が作るの？ それって人間が食べても大丈夫なものよね？」

「お前だって何度か喰った事あるだろうが！ 文句があるなら杏はボタンでも食えばいいだろ」

「何であたしがペットを食べなきゃいけないのよ！」

「だって俺の料理喰いたく無いんだろ？」

あたしと朋也が言い争ってる中、陽平が買い物を終えて部屋にやってきた。

「買ってきたぞー！　って!?　何で岡崎と杏が喧嘩してるんだよ!?!」

「別に喧嘩じゃないぞ。杏が俺の料理を喰いたくないって言ったからボタンでも食ってろって言ったただけだ」

「あたしは自分のペットを食べるなんてあり得ないって言っただけよ!」

あたしと朋也の言い分を聞いて、陽平が頷いた。

「相変わらずお互いに思っただけの事を書いてるんだねー」

「ああん?」

「ヒイ!?　だって杏は岡崎の料理を食べたいんだろ?　それなのに反対の事を言っちゃやうなんてーツンデレってレベルじゃ無いんじゃない?　グフウ!?!」

陽平が余計な事を言い出したので、私は陽平の荷物の中から手頃なものを取り出して投げつけた。相変わらず陽平に物をぶつけるのは快感ね。

「痛いよ!　何で僕は杏に攻撃されなきゃいけないんですかね?」

「あんたが余計な事を言ったからよ。手加減してあげただけ感謝しなさい」

あたしが陽平に攻撃したおかげで、朋也との言い争いは終わった。その代わり朋也と椋と勝平さんが、私に生温かい視線を向けていた。

ヘタレ・春原

高校時代からずっと思ってる事がある。それは杏が岡崎の事を好きなんじゃないかって事だ。

「なあ岡崎」

「何だよ？」

「どうして僕のだけ明らかに見た目が違うんですかね？」

「えっ？ だって春原だろ？ 春原に人間の食べ物を与えたら駄目だって習っただろ？」

「そんな事習うか！ 大体僕だって人間です!!」

岡崎にそれとなく探りを入れようとしても、こうやってはぐらかされてしまうし、杏に聞こうものなら辞書なりなんなりが飛んでくるに違いないのだ。

「しょうがないな。春原のもちやんと作ってやるか」

「初めからそうしろよな！」

「あ？ 作ってもらっておいてその態度は無いんじゃないやねえか？ なんなら本当に残飯でも構わねえんだけど？」

「ありがとうございます。僕の為にわざわざ料理を作ってくれて」

対等な友人のはずなのに、岡崎のあの目には逆らう事が出来ない。だって右肩が上がらないけど、岡崎はそれなりに喧嘩が強い。腕が使えない分足技が豊富なのだ。

「春原君、こっちきてゆっくりしなよ」

「ありがとう、柊ちゃん……」

「うわあ、まだそんな呼び方してるのかよ。いい加減勝平って呼べばいいのに」

「まだ傷が癒えないんだよう……」

「キモ」

杏が僕と岡崎のやり取りを横から聞いていて、バツサリと僕の事を

切り捨てた。

「五月蠅いよ！好きな相手に素直になら……」

「何か言ったかしら？」

「いえ、何でも無いです……」

ステキな笑顔を浮かべた杏に睨まれて、僕は反撃を諦めて部屋の隅っこに移動して膝を抱えた。

「だいたい彼女もいないあんたに言われたくないわよ」

「お前だって彼氏いないだろうが！ツンデレって言葉で何でもかんでも片付くと思うなよ！」

「どうやらお星さまを見たい様ね、陽平は」

「あ、あの……その手に持つてるのは何でしょうか？」

「何って、見ての通りフライパンよ」

「そ、それで何をするのでしょうか？」

「分からない？あんたを殴るに決まってるでしょ！」

「ヒイ!？」

杏がフライパンを振りかぶったのをみて、僕は頭を護る為に手を頭上に翳した。

「まあ待て、杏」

「なによ？」

いざ殴ろうとしていた杏を、岡崎が止めてくれた。さすが岡崎！

マイベストフレンドだね！

「春原なんて殴ったら、フライパンが駄目になるかもしれないだろ？」

「そうね。もったいないわね、フライパンが」

「あんたら酷いよ！僕の心配はしてくれないんですかね？」

「えっ？当たり前だろ（じゃない）」

「うわーん！柊ちゃん、二人が僕の事をいじめるよー！」

慰めてもらおうと柊ちゃんに飛びつこうしたら、何やら固いものが

頭にぶつかった。

「イテエ!? 何ですか、いったい?」

確認すると、缶箱の蓋を持った棕ちゃんが僕と柊ちゃんの間で割って入っていた。

「何するの、棕ちゃん?」

「春原君が男色なのは知ってますが……勝平さんは駄目です」

「だから違えっての!」

高校時代に岡崎が棕ちゃんにウソを吹き込んでから、棕ちゃんは僕が本場に男色だと勘違いしているのだ。

「へー春原って男色だったのか」

「変態だとは思ってたけど、違うベクトルの変態だったのね」

「あんたらが広めた嘘だろうが! 何てことしてくれたんですかね!?」

主犯と共犯者がしらばっくれた態度を取っているのを見て、僕の堪忍袋の緒が切れた。

「今日という今日はもう許さねえ。岡崎! 杏! 僕と勝負だ!!」

「ああん?」

「……トランプで」

岡崎と杏に揃って睨まれてしまい、僕はまたヘタレた……あの目は逆らえない、そんな刷り込みが僕の中にあるのかもしれないと思っただ瞬間だった……

酒の力

朋也君が作ってくれた料理を食べながら、僕たちは乾杯した。ちなみに、僕と朋也君はジュースで、あとの三人はお酒を飲んでる。

「いやー、まさか岡崎がこんな料理上手になってるなんてな」

「ほんとよねー。あの朋也がこんなに美味しい料理を作るなんてねー」

「お姉ちゃん、春原君。それは岡崎君の失礼だよ」

アルコールが入ったからか、春原君も杏さんも異様に明るくなっている。さつきまで険悪なムードだった気がするけど、これがお酒の力なのだろうか？

「てか杏、いいかげん岡崎に告白したらどうなんだ？ 高校時代から周りにはバレバレだよ？」

「うっさいわねー！ あたしだってしたいとは思ってるけど、それで振られたら友達としてもいられなくなっちゃうかもしれないでしょ？ だから出来ないのよ」

「お姉ちゃんは意外と小心者だからね」

「掠、あとで覚えてなさいよね。お風呂でその胸、揉みしだいてあげるんだから」

「うひょー！ 僕もみたいですわね、その光景」

まだそれほど飲んでないはずなのに、三人は盛大に酔っ払っている。杏さんに至っては、朋也君が側にいる事を完全に失念している様子だった。

「勝平、俺は帰るな」

「えっ？ 朋也君、何で帰っちゃうの？」

「正気に戻った時、俺がいたら拙いだろ」

「でも……僕一人じゃこの三人を相手に出来ないんだけど」

何とも情けない理由だが、酔っ払った杏さんや掠さんを介抱するの

は、僕よりも朋也君の方が上手だ。それに、春原君には何となく近づきたくないし……

「そこら辺に転がしとけばいいだろ。春原が買つて来たテントにでもくるんどけば問題無いだろ」

「組み立て無くて良いの?」

「そこまですてやる義理なんざネエよ。風邪さえ引かなければ別に文句も言わねえだろ」

朋也君はそう言って立ち上がり、本当に部屋から出て行ってしまった……

「だいたいねー、陽平が邪魔しなきゃあたしと朋也は二人っきりになれたのよ?」

「気を利かせようとしても、貴女が逃がさなかつたんじやなかつたですかね?」

「お姉ちゃん、二人つきりになった途端に逃げ出しそうだし」

「それはあつたかもねー」

「「あははははは」」

この酔っ払い三人衆を、僕一人でどうしろというのさ……朋也君、お願いだから帰ってきて……

目が覚めると、側には椋と陽平が転がっていた。

「何であたしの側に陽平がいるのよー!」

「ゲバア!? 何事ですか……!」

あたしに蹴られて陽平が目を覚ました。良く見れば少し離れた場所に勝平さんが寝ている……そうか、昨日はお酒を飲んで何か言っただけ盛り上がったんだっけ……

「ねえ陽平」

「何でしょう?」

「昨日、あたしたちって何話してたっけ?」

そう訊ねると、陽平も首を傾げて会話の内容を思い出そうとしている。

「確か、岡崎の料理が上手いって話を……その後は覚えてないや」「あー確かに朋也の料理が……って、その朋也は?」

部屋を見渡しても朋也の姿は無い。それどころかテーブルの上には、昨日の惨状を物語るように空き缶や空き瓶が転がっている。

「帰ったんじゃないの? 岡崎はこの部屋に泊まらないんだろ?」

「てか、何であんたがこの部屋にいるのかしら? 何のためにテントを買ったのよ、あんたは」

「一緒に飲んで盛り上がった相手に失礼じゃないですかね!」

「うーん……二人とも五月蠅い」

目を擦りながら勝平さんが起き上がった。どうやらあたしたちの声が五月蠅かったらしく、勝平さんには珍しく、あたしに対してもタメ口だった。

「勝平さん、朋也は? それと、あたしたちって昨日何の話をしたた?」

「一気に質問しないでくださいよ……えっと、朋也君なら昨日の内に

帰りましたよ。それと、なにを話してたかは聞かない方が良いと思います」

「気になる言い方しないでよ。聞きたくなるでしょ」

「じゃあ言いますけど、杏さんが朋也君を好き、って話をしましたよ」

「……………」

それってつまり、朋也にも聞かれたって事よね…………

「陽平」

「なに？」

「とりあえず殴らせなさい」

「意味が分からないよ！」

陽平を殴って気持ちを整理しようとしたけど、まったく意味は無かった。どうしよう……………今日も朋也はここに来るのよね……………どんな顔して会えばいいって言うのよ、まったく！

妹の説得

昨日の夜、早々に逃げ出した朋也君が、お昼過ぎに再びこの部屋にやって来た。ちゃんと食材の買いだしを済ませてきて……

「と、朋也！」

「あ？ 何だよ」

「昨日、あたし変な事言わなかった？」

朋也君が来てすぐ、杏さんが昨日の発言について確認を取り始める。

「ああ、俺が好きだとかどうとか言ってたな」

「ツ!? じよ、冗談だからね！ 本気に取らないでよね！」

杏さんもいい加減素直になればいいのに……僕がそんな事を思っていると、僕の横で棕さんが僕と同じ目をして杏さんを眺めていた。おそらく……いや、確実に僕と同じ事を思ってたんだろうな。

「別に酔っ払いの言葉を本気に取るような真似はしねえよ」

「いやーあれは杏の……ゲバァ！ なにするんですかねえ!？」

春原君が余計な事を言いそうになったので、杏さんが傍にあつた辞書で春原君の顔面を振り抜いた。あれは痛そうだな……

「陽平、素卷きにされて川に流されるのと、コンクリート詰めになされて海に流されるのと、どっちがいい？」

「ステキな選択肢だね……出来ればどっちも遠慮したいかな……」

「ダメ。素卷きにしてコンクリート詰めしてあげる。そして川から海まで漂流しなさい」

ステキな笑顔を浮かべながら、杏さんが春原君に死の宣告をする。春原君もこうなるって分かっているのに、何で杏さんによけいな事を言うんだろう……

「そもそもあたしが朋也を好きになるわけないじゃないの！」

「お姉ちゃん、ちよつとコツチ来て」
「えっ、棕？　なによいつたい……」

杏さんの腕を、棕さんが引つ張つて朋也君の側から移動させる。僕も二人についていく事にした。

「お姉ちゃん、いい加減素直になりなつて。岡崎君の事好きだつて、昨日言つちやつてるんだからさ」

「あ、あれは！　酔つ払つたから言つた戯言よ！　本気なわけないじゃないのよ！」

「私にウソを言つても意味無いつて。お姉ちゃんの気持ちは高校の時から知ってるんだから」

「僕も何となく知つてましたし、棕さんから聞きましたので」

杏さんが朋也君の事が好きだつて事は、僕と棕さんだけじゃなく春原君も気が付いている。朋也君も気づいてるけど、あえてそれに気付かないフリをしているのだ。

「ちゃんと告白しなよ。岡崎君だつて何時までもあんな態度を取るのも大変だと思ふよ……」

「……どういう意味よ」

「気づいてるんでしょ？　岡崎君もお姉ちゃんの気持ちを知つてるつて」

散々お酒の力を借りて言っているのだ。いい加減朋也君も冗談じゃないつて気づいている。いや……もしかしたらその前から気づいてたかもしれないのだ。

「春原君じゃないけど、昨日のアレだつて本心から言つたんだよね？」

「だからあれは……」

「あれは？」

言い訳をしようとしたのだろうが、棕さんが真つすぐに杏さんを見詰めていたので、杏さんの言葉は途切れてしまった。

「……本心です」

「でしょ？ だったら今度は酔っ払いの戯言なんかじゃなく、素面のお姉ちゃんと言えばいいだけでしょ」

「それが出来れば苦労しないわよ……」

「お姉ちゃん……昔から思っても無い事はすんなり言えるのに、どうして本心になるとこんな言い淀んじやうのさ？」

「分からないわよ、そんなの……」

「今日中に岡崎君に告白する事。じゃないと私から岡崎君に言っちゃうからね」

「なっ!? ……分かったわよ。今日中に朋也に『好き』って言えばいいんでしょ！」

自棄になったのか、杏さんは僕たちの前で、今日朋也君に告白する事を宣言した。これで朋也君と杏さんが付き合う事になって、結婚までいけば、僕は朋也君と家族になれるんだな……何だか不思議な気分だ。

決意

椋に脅される日が来るなんて思っても無かったわ……でも、あれくらい言ってくれなかったらきつと決心なんて出来なかったと思う。「あたしは、朋也の事が好き。それはずっと分かったた事なのに……）」

自分の気持ちなのに、ああして言われるまで向き合う事が出来なかったのは、心の中できつと恐れていたからだろう。

「なあ、杏」

「な、なによう？」

「いや、近すぎ。邪魔だ」

「ご、ゴメン……」

いざ決心したは良いけど、何をすればいいのか分からず、とりあえず朋也の傍に立っていた。それも調理中の朋也の傍に……

「手伝うなら良いが、なにもしないで突っ立ってられると邪魔でしようがないんだが」

「じゃあ手伝う」

「……そうか」

朋也が一瞬だけ怪訝そうな顔をしたけども、それ以上踏み込んで来る事は無かった。昔からあたしや椋の変化に目敏く気づく癖に、あたしが悶々としてる事なんて気にもかけてないんだろうな……そう思うと腹立たしいわね。

「ところろで」

「な、なに？」

「何で春原は素巻きにされてるんだ？」

廊下に転がっている陽平を指差して、朋也があたしに訊ねてくる。「余計な事を言いかけたから、反省させてるのよ」

「余計な事？ それは何時も通りじゃないのか？」

「……言われてみればそうね。陽平の存在そのものが余計だしね」

「何気に酷いですよね、あんたら」

素巻きにされ、棒泣きしていた陽平があたしたちにツツコミを入れてくる。こうしたやり取りは高校時代から変わらないわよね。

「そもそも何で俺が春原の飯を作らなきゃいけないんだよ」

「だって僕、料理出来ないもん」

「ならそこら辺の草でも食ってろ」

「食えるか！」

「ダメよ朋也。草なんて食べさせたら」

「杏……やっぱり僕の事を心配して……」

「緑が減っちゃうでしょ」

「そうだな。悪い、春原。土でも食っててくれ」

「変わってねえし、より酷いわ！」

陽平を弄ってる時は自然に朋也と話せてるのに、これが陽平弄り以外だと全然ダメなのよね……ホントどうしたらいいんだろう……

朋也君と杏さんの会話を、僕と棕さんはこっそりと盗み聞きしてい

る。今のところ杏さんが朋也君に「好き」と言いそうな雰囲気は無い。「お姉ちゃん、勢いで言っちゃえばいいのに」「それが出来てれば、今更苦労してないと思うけど」

高校の時から杏さんは朋也君の事が好きだったのだ。勢いで告白が出来るのであれば、本当に今更だ。

「春原君を弄ってる時は楽しそうなのにね」

「お姉ちゃんと岡崎君は、昔から春原君を弄って遊んでましたから」

「じゃあある意味、春原君は朋也君と杏さんを繋ぎとめる役割をしてたんだね」

「どうでしょう……普通に弄られてただけのような気がしますけど」

棕さんにこんな風に思われてるなんて……春原君、本当に哀れな人だね……

「勝平、棕、お前ら何してるんだ？」

「と、朋也君……」

盗み聞きしてた事が朋也君にバレた……てか、最初からバレてたかもしれないけどね……

「そろそろ出来るから大人しくしてろ」

「う、うん……分かった」

多分僕たちの会話は朋也君には筒抜けだったんだろう。何時もの朋也君の眼差しとは違い、鋭さを持った視線を僕たちに向けて来たのだった。

「あの視線なら、朋也君が不良だって思われてても仕方なかったと思うよ……」

「殆どあんな視線なんて見せてませんでしたが……したとしても理不尽な教師相手や、数で弱者を囲ってた余所の不良相手くらいじゃないでしょうか……」

棕さんでも見た事無いあの視線……朋也君の恐ろしさを初めて実感した瞬間だったんだろうな……

「棕、勝平さん、ちよつといいかしら」

「お姉ちゃん？」

「どうかしましたか？」

杏さんが手招きしていたので、僕と棕さんは杏さんの傍まで近づく。近くには素卷きにされた春原君が転がってるけど、杏さんが強制的に聞き耳を立てられないようにしたので気にする必要はなさそうだった。

「あたし、頑張って告白する」

「何時？」

「それは……ご飯食べてから……」

「そう……頑張ってるね、お姉ちゃん」

もし杏さんの告白が上手く行つて、結婚まで行くとなると、朋也君は僕のお義兄さんになるのか……年下だけど、朋也君の方がしつかりしてるもんね。お義兄さんでもおかしくないな……思つてて情けないけど。

春原で気晴らし

お姉ちゃんがついに決心をしてくれたので、私と勝平さんは早くその瞬間が訪れないかと楽しみにしていた。その瞬間が近づくとつれて、お姉ちゃんのお拳動がおかしくなっていくのだけ……

「さつきから杏のヤツおかしくない?」

「誰がおかしいって!」

「ゲバア!? だってうろろうしたり立ったり座つたりを繰り返してるし……」

「拳動がおかしいって言いなさいよね! ホント、アンタって表現の仕方がおかしいわよね。良く卒業出来たわね。もしかして親に頼んでお金でも積んだの?」

「そんな事してねえよ! そもそも岡崎だって似たような感じだろ?」

「朋也はまともに授業に出て無かったけど、赤点は無かったわよ」

「そう言われれば……」

自分と岡崎君の差に気がついた春原君は、その場でゴロゴロと転がり始めました。ずっと岡崎君と行動を共にしてたのに、岡崎君の成績の事は知らなかったんだ。

「あーもう! 鬱陶しいからどっか行きなさいよね! てか、そのまま帰ってこなくても良いわよ」

「なんでだよ! さつきまでお前の行動の方が鬱陶しかったんだぞ!」

「へー。陽平、アンタやっぱり海まで漂流したいようね」

漸く解放されたばかりなのに、春原君は再び素巻きにされてしまった。

「お前ら五月蠅い」

「あたしは悪くないわよ! 悪いのは全て陽平よ」

「半分以上はお前だよね! 僕だけが悪いわけじゃねえよ!」

「……春原、お前五月蠅い。少し黙ってる」

そういつて岡崎君は、どこからか持ってきたガムテープで春原君の口を塞ぎました。

「もがー！ もがもが！」

「え、なに？ 鼻も塞いでほしいって？」

「それなら洗濯バサミがあるわよ」

「むがー！」

岡崎君とお姉ちゃんのコンビネーションの良さに、私と勝平さんは互いに向かい合い頷きました。この二人ならきつと上手くいくんだろうな、つて感想を私と勝平さんは同時に抱いたのです。春原君の生死はとりあえず横に置いて……

杏と春原を弄り倒して、それに飽きたので春原は放置した。その後すぐに料理が完成したので、とりあえず四人で昼食にする事にしたのだ。

「ねえ朋也君……さすがに春原君が可哀想だよ」

「大丈夫だ、勝平。あいつは存在自体が可哀想だから」

「そうだけどさ……ほら、さつきから棒泣きしてるから解放してあげ

「ようよ」

「お前も何気に酷いよな……」

「え?」

勝平の腹黒さは昔から知ってはいたが、やっぱり普段からハツキリと物を言うやつが春原の存在を可哀想だと判断したんだから、春原が泣いても仕方ないよな。

「ほら、春原。可哀想だから飯を恵んでやる」

「お前ら、僕の事何だと思ってるんだよ!」

「バカだなー。言わなきゃ分からないか?」

「そうだよね! 友達だよね!」

「ふざけるな! 誰が友達だ!」

「えっ?! 違うんですか?」

「お前なんて友達だなんて思った事ないわ」

「酷い……」

何時か似たようなやり取りをした記憶があるが、あの時と同じような反応を春原は見せた。ホント、こいつは変わらないな……

「嘘だよ。お前は親友(笑)だよ」

「カツコの中身! それはいらないよね!」

「良いじゃない。親友(下僕)じゃないだけ」

「それも悪いけど(笑)も酷いよね!」

「じゃあ、親友(自称)にしとくか?」

「どつちも嫌だよ!」

高望みをする春原に、俺と杏の冷たい眼差しが突き刺さる。それだけで春原は泣き出してしまった。

「さてと……朋也、ご飯が終わったら話があるの。少し付き合っ
てよ
ね」

「今じゃダメなのか?」

「ダメ! 心の準備ってものがあるのよ!」

「はあ……まあ分かった」

何の用件なのかは、何となく分かってるが、ここはあえて気づいて無いフリをするのが得策だろう。だって知られてるって分かったら杏のヤツ、何をしでかすか分からないからな……

始まりの坂

飯を食い終えて片づけを済ませたタイミングで、俺は杏に誘われて外に出る事になった。春原も来たそうにしていたが、おそらくあれは杏をからかうネタが手に入るかも、という直感からだったのだろう。まあ、その春原は既に杏が沈めたので今頃はあの部屋の押し入れで寝てるだろうがな。

「何処まで行くんだ？」

既に結構歩いたが、杏の足が止まる事は無い。俺はため息を吐きながらも杏の後に続いて足を動かし続ける。普段から重いものを運んだりしてるから、疲れたわけではないのだが、目的地も分からずただ歩き続けるというのは、結構精神的に来るものがあるのだ。

「おい、杏」

「うっさいわね！ 黙ってついてきなさいよ！」

さつきからこの答えしか返ってこない。何を焦ってるのかは分からないが、杏がイライラしている事だけは理解出来る。

そんなやりとりをしながら数分、杏は漸く足を止め俺の方に振り返ってきた。

「それで？ 何でこの場所に来たんだ？」

「始めるならここかなって思っただけよ」

杏が足を止めた場所、それは高校の前の坂だった。

「始める？ いったい何を始めるって言うんだ」

「始める、って言うか、前に進む、って言うか……」

「うん？」

何か言いにくい事でも言うのだろうか。杏は何時ものハキハキとした喋り方ではなく、妙にしおらしい、普通の女子の感じがした。

「朋也」

「なんだよ」

「アンタ、今付き合ってる人、いないわよね？」

「ああ、いないな。そもそも俺なんかと付き合いたいなんて物好きな女なんてそうそういないだろ」

好意は持たれる事はあっても、それイコールで付き合いたいにはならないだろ。それは俺が良く分かっているつもりだし、実際にこれまで誰かと付き合った事は無い。

「アンタそれ、本気で言ってるの」

「悲しいが事実だろ？ そうじゃなきゃお前とこうやって歩く事も出来て無かったかもしれないんだし」

「どういう事よ……」

「彼女がいたとして、他の女と休日以外を歩いてたら、その彼女はなんて思う？ 例え相手が友達だったとしても、良い思いはしないだろ」

「……確かに」

そんな事を考えるだけ無駄なのだが、杏が何を言いだそうとしてるのか、何となく分かってる俺としては、こうやって和ませるくらいしか出来ないのだ。

「それで、何を始めるって言うんだ？ まさか、この坂道を駆け上がるとか言い出さないよな。それなら俺はお断りだ」

「あたしだって嫌よ！ この坂を駆け上がるなんて、遅刻しそうな学生じゃないんだから！」

「俺は何時もノンビリ上ってたけどな」

俺と春原は遅刻上等だったからな。駆け上がるなんて疲れる事をするはずも無かったんだがな。

「って！ そんな事はどうでもいいのよ！ 朋也、アンタわざと話題を逸らして無い？」

「まあな。何となく、杏が言いたい事に心当たりがあるんだよ。自惚れじゃなく、色々と情報を踏まえてな」

てか、既に何度か告白まがいな事はされているのだ。杏が酔っ払って
る時の事なので、冗談として処理してきたのだが。

「鈍感なアンタでもさすがに気づいてるのね……」

「いや、酔っ払いの戯言で済むならそれでよかったんだけどな……椋
や勝平からあれはお前の本心だって言われてたから」

そもそもだ、酔っ払ったからといって好きでも無い相手に告白など
するのだろうか？ 俺はあまり呑まないし、そういった感情を持った
事も無いから分からないが、少なくとも杏が春原に告白する事は無い
だろうと断言できるくらいには酒を知ってるつもりだ。

「そうよね……朋也、あたしはアンタが好き。友達としてじゃなく、一
人の男として……」
「そうか」

そうか……それしか言いようが無かった。言われると分かっていた
ても、実際に告白されたらなんて答えるべきなのか、俺は答えを持ち
合わせていなかったのだ。

「そうかって……それだけ？ 他に何か無いの？」

「そうだな……とりあえず嬉しいとは思ってるから安心しろ。その
……ちよつと処理するのに時間がかかってるんだよ」

「だって、朋也は何を言われるのか分かってたんじゃないの？」

「分かった！ でも実際に言われるとどうなるかなんて分かるわけ
ないだろ」

精神を落ち着かせるために、俺は一度大きく息を吸い、そして吐い
た。所謂深呼吸だ。

「杏」

「は、はい！」

「ありがとう、俺を好きでいてくれて」

「う、うん」

「これからは、友達としてじゃなく、恋人として過ごして行こう」
「う、うん！」

俺は杏の告白を受け入れ、そして泣きそうになっている杏を抱きしめた。もちろん、周りに誰もいないかを確かめての行動だったんだけどな。

人の恋路を邪魔する奴は――

朋也君と杏さんが何処かに出かけてしまったので、僕と椋さんは部屋でのんびりと昼下がりを過ごしていた。

「上手く行きますかね?」

「お姉ちゃんの事ですし、また思っても無い事を言っちゃうんじゃないですかね」

「あー、あるかもしれないですね、それ。朋也君も杏さんの気持ちを知ってるんだから、朋也君から告白してあげるって考えは出来ないんですかね?」

「岡崎君は今のままの関係でも良いって考えなんじゃないですか?」

自分から告白するのは違う、って思ってるのかもしれないし」

「ありえるかもしれないね。朋也君は面倒事を嫌うから」

椋さんとしみじみとお茶を飲みながら話していると、下の方から声が聞こえてきた。

「あのー、僕は何時までこんな格好でいなきやいけないんですかね……」

「あつ、春原君いたんだ」

「すっかり忘れてました」

「何気に酷いよね……二人ともさ……」

素で忘れていた事を謝って、春原君を縛っていた縄を解く。それにしても、杏さんは何処でこんな縛り方を習ったんだろう……複雑に絡み合って解きにくかったよ……

「それで、岡崎と杏は何処にいったのさ?」

「それは僕たちにも分からないよ。杏さんの気の向くままに出かけたんだし」

「そうですね。それに、今二人の邪魔をしようとすれば、馬に蹴られちゃいますよ」

「は? 何で馬に蹴られるのさ?」

棕さんの遠回しな答えの意味に気づけない春原君……そう言えば高校時代、現国の成績は酷い物だったって朋也君が言ってたな……普通に勉強してれば分かっただろう表現も、春原君には通用しなかった。

「とにかく、今は大人しくここに居る事を勧めるよ」

春原君の分のお茶を淹れて、僕は春原君にこの場所に留まる事を勧めた。はつきりと言わないと探しに行きそうだし、こうやってお茶を出せば大人しく留まってくれるだろうしね。

「いいや、僕は杏に文句を言わなきゃ気が治まらないからね！ 探してくる！」

「あつ、ちよつと……行つちやつたよ……」

「まあ昔から空気が読めない人でしたからね、春原君は」

棕さんの何気ない一言に、僕は苦笑いを禁じえなかった……だって、さらつと毒を吐いたから……

「まあさすがのお姉ちゃんも、いい加減告白はしたと思いますけどね」

「それじゃあ朋也君は僕の義姉である杏さんの恋人になったのかな？」

「お義兄ちゃんって呼んでみようかな？」

「私は岡崎さんのままで良いのでしょうか？ それとも朋也さん？」

「うーん……呼び方を変えるのって難しいよね」

昔、朋也君が僕の方が年上だと分かった時に慌ててたけど、それと同じような感覚が今の僕にもある。急に呼び方を変えようとしても出来る物じゃないもんね。

「当面は今のままで良いかな。でもいずれは変えなきゃいけないのかな？」

「どうでしょう？ もし結婚まで行けば変える必要もあるでしょうけども、岡崎君が私の事を名前で呼ぶ時も結構時間が掛りましたしね」「朋也君はずっと『藤林』って呼んでたもんね」

棕さんの旧姓である「藤林」の苗字で朋也君は棕さんの事を暫く呼んでいた。何回か僕と棕さんで注意、お願いして漸く「棕」と名前で呼ぶようになったのだ。

まあ、朋也君が渋つてた原因は僕にもあつたんだけどね……夫である僕が「さん」付けなのに自分が呼び捨てにするのはおかしい、つて朋也君は言つてたっけ……いまだに僕は棕さんの事を呼び捨てに出来て無いけどね。年上で夫なのに……

「どうかしましたか？」

「えっ？ ううん、何でも無いです」

しかも、まだ敬語が抜けきつて無いし……棕さんもだけど、彼女は年下つて事もあつておかしくは無いけども、僕はどう考えてもおかしいよね……夫婦で、しかも僕は年上なのに……

「後で朋也君に相談しよう……」

「何をですか？」

「えっと……人と上手く付き合う方法、かな？」

「？」

僕の表現が変だったのか、棕さんはずっと首を傾げて、僕の事をじつと見つめていた。嬉しいけど恥ずかしい気分になるよね、こうやって見つめられるのは……

お義兄さん

勝平さんと二人で（春原君はいないと考える事にして）、岡崎君とお姉ちゃんが帰ってくるのを待っていたら、外から二人の声が聞こえてきた。

「やっど帰って来ましたね」

「二人の家は別にあるから、『帰ってきた』って表現は違うんだろうけども、帰ってきたね」

私の表現を一部否定しながらも、勝平さんは私が使った表現のまま答えてくれた。

「上手くいったのでしょうか？」

「大丈夫だとは思うよ。二人で戻ってきたんだし」

「そうですね。岡崎君もお姉ちゃんの気持ちを知ってたわけですし」

大丈夫と言い切るには微妙な感じだけでも、そもそも断ったのなら一緒に帰ってくるわけ無いですよね。

「ただいまー！」

「ここはお前の家じゃないだろ……」

「細かいわねー！ そんなんじゃないかと付き合っていけないわよね？」

「お前が大雑把なんだろう！ だいたい、お前とはもう何年の付き合いだと思ってるんだよ……中抜けしてるとはいえ、再会してすぐ元通りの付き合いが出来たんだから大丈夫だろう」

「それもそうね。あんたがあたしのノリに付き合えるのは昔からだもんね」

「それじゃあ二人とも、付き合う事になったんだね？」

二人の会話から何となくは分かったけども、私は二人の口から結果を聞きたかった。

「しようがないから朋也と付き合っただけであげたのよ」

「お前が告白してきたんだろ。何で嫌々なんだよ」

「岡崎君、これはお姉ちゃんの照れ隠しですよ」

「いや……さすがに分かってるんだが……」

「ですよ。岡崎君とお姉ちゃんのやり取りは昔から変わりませんし」

「それはそれで……喜んで良いのか、哀しむべきなのか分からない評価だな……」

「お姉ちゃんが素で付き合える相手はそういませんよ。だから、喜んで良いんです」

私がそう断言すると、岡崎君は複雑そうながらも、はにかんでくれた。

「これからはお義兄さん、って呼んだ方が良いかな？」

「なっ!? 気が早いわよ、勝平さん! まだ付き合っただけなんだから!」

「お姉ちゃん……そんな反応見せたら、いずれは結婚するつもりなんだってバレバレだよ」

「……そ、そんなわけないわよ! あたしと朋也が結婚? あり得ないって! ねっ、朋也?」

お姉ちゃんは一人では勝ち目が無いと思ったのか、岡崎君に応援を頼んだ。けど岡崎君は興味なさげで、春原君を突いて遊んでいた。

「ん? 何か言ったか?」

「だから! あたしと朋也が結婚なんてあり得ないわよね! って言ったのよ! ちゃんと聞いてなさいよね!」

「別に俺は結婚しても良いぞ? どうせ他に出会いなんて無いだろうし、折角こうして付き合ったんだ。そのまま結婚しても問題は無いと思うが」

「……何であんたはそうなのよ」

「何だって?」

「何でも無いわよ！　と言う事で掠！」
「な、なに？」

いきなり矛先がこっちに向いて来て、私はたじろいってしまった。お姉ちゃんがこういった眼をしてる時は、必ずと言っていいほど良い事や悪い事を言われるのだ。

「あんたこれから、朋也事を名前で呼ぶ事！　結婚したらあたしも『岡崎』になるんだし、何時までも『岡崎君』じゃダメなんだからね！」
「で、でも……高校の時からずっと『岡崎君』だったのに、今更呼び方を変えろって言われても……」

「俺も言われたんだ。掠だつて出来るだろ？」

「そ、それはそうですね……私の事を名前で呼ぶのと、岡崎君の事を名前で呼ぶ事を同じだと考えちゃダメですよ……」

昔好きだった男の子を名前で呼ぶのは、私にとってかなり勇気がいる事だ。いくらお姉ちゃんと付き合う事になったからといって、岡崎君は岡崎君なのだ。

「別に今すぐじゃなくても良いけどな、俺は」

「ダメよ！　掠だつて何時までも先延ばしに出来る問題じゃないって分かってるんでしょ？　だったら今すぐにも変えちゃいなさい！」

「相変わらず横暴だね」

「陽平は黙ってなさい！」

「は、はひい!？」

春原君にお姉ちゃんがキツイ睨みを向けたら、春原君は竦み上がって裏返った声で返事をした。

「えつと……朋也お義兄さん」

「別に呼び捨てでも構わないんだが」

「これ以上は無理です！」

「まっ、及第点ね。追々慣れて行きましょう」

お姉ちゃんの笑顔が、今はとても怖かった。でも、何時かは恥ずか
しげらずに「お義兄さん」と呼べる日が来るのだろうか？

ダブルデートのお誘い

朋也君と杏さんがお付き合いを初めて暫くして、僕たち夫婦と朋也君と杏さんの四人で出かける事になった。

「お姉ちゃん、本当に邪魔じゃないの？ 付き合っただけのデートでしょ？」

「そんな大袈裟なものじゃないわよ！ それに、また緊張してまともに喋れなかつたら嫌だし……」

なるほど、そっちが本音だな。この間朋也君と杏さんの二人でお出かけた時の事は、まだ僕の記憶に新しい。あの惨状は確かに酷かったな……

「勝平さん、なに考えてるのかしら？」

「えっ？ ……何でも無いです」

年齢的には僕の方が上だけど、杏さんはお義姉さんなのだ。睨まれたらそう答えるしかないのだ。

「じゃ、そういう事だから。朋也にも了承は取ってるからね」

「二人がそれで良いなら私は構わないけど……」

「僕もお邪魔じゃ無きや良いですよ」

「じゃ決まり！ それじゃあまた今度ね！」

嵐のようにやってきて、嵐のように去って行った杏さんを見送り、僕は棕さんに話しかけた。

「本当に良いのかな？ この間の事は棕さんにも話したから知ってるだろうけど、今回もああなるとは限らないんじゃないのかな？」

「でも、お姉ちゃんがああ言ってますし、勝平さんがあんなったお姉ちゃんに逆らえるとは思えませんか？」

「……棕さんの言うとおりだね。あの杏さんに逆らえるのは朋也君くらいだと思うよ」

春原君なら絶対に逆らえないだろうし、他の人間だつて逆らい難いだろうな。そう考えると朋也君つてかなり凄い人なんだな。

「おかざ……じゃなかった、朋也お義兄さんも了承してるのなら、私たちがとやかく言う事じゃないのかもしれないかもしれませんね」

「棕さん、本人がいないんだから呼びやすい方で良いと思うけど」

棕さんは未だに朋也君を「お義兄さん」と呼ぶのに慣れていない。まあ、実質二週間も経ってないのだから仕方ないのかもしれないけどね。

「でも、いないところでもこう呼んで行かないと、本人を前に呼べないですよ」

「朋也君は気にしないと思うけどなー」

実際、気にしてるのは杏さんだし。朋也君は呼ぶたびに詰まってる棕さんを見て苦笑いを浮かべてるだけだもんね。多分前の呼び方で呼んでも、朋也君は応えてくれるだろう。それは言いきれる。

「勝平さんは私にお姉ちゃんを怒らせろ、つて言うんですか?」

「……確かに怒りそうだね」

付き合うまでに色々あった二人だけど、相性は悪くない、むしろ良い方だろう。既に結婚まで意識しているのだろうか、杏さんは棕さんが朋也君の事を苗字で呼ぶ事を禁止したのだ。理由は、いずれ自分もその姓になるのだから、だろう。

「岡崎杏さん、か……」

「それ、お姉ちゃんの前で言ったら失神するかもしれませんね」

「そうかもね。二人きりで出かけるのも難しいのに、そんな事聞いたら失神するかもしれませんね」

僕は棕さんにそんな感じでプロポーズしたのだけでも、杏さんには刺激が強すぎるかもしれない。そう考えると、実は棕さんの方が肝が据わってるのかもしれない。

「勝平さん、今何を考えてました？」

「えっ？ 杏さんより椋さんの方が肝が据わってるのかも、って思ってただけだよ。ほら、僕のプロポーズの言葉はさ……」

「確かにそうかもしれないね。お姉ちゃんだったら卒倒してるかもしれない言葉ですものね」

ちなみに、僕が椋さんに言った言葉とは――

『椋椋。木偏が揃ってて何だかイケてない？』

――という感じだ。

手術を拒み、生きる事を諦めていた僕に希望を与えてくれた椋さんに、朋也君の前で言ったのだ。あの時は椋さんの嘘に動揺したけど、あれは僕に生きてほしいと言う椋さんなりの精一杯だったのだ。

「お姉ちゃんって意外と純情ですからね」

「そう言ってる椋さんだって、それほどスレてるわけじゃないけどね」

二人で笑いあって、僕たちは週末のデートの事を考える事にした。僕たち夫婦も、そう考えるとデートしてないんだな……殆どリハビリだったし。

純情夫婦

杏と二人で出かける予定だったが、何時の間にか勝平と棕を巻き込んだダブルデートに変更されていた。どうせ杏が誘ったのだろうし、当日になって帰れとも言えなかつたので、俺はそのまま勝平たちと出かける事にした……のだが――

「杏のやつ、また遅刻か？」

――肝心の杏がまだ待ち合わせ場所に姿を現さないのだ。

「まあまあおかぎ……朋也お義兄さん、お姉ちゃんにも色々準備があるんですよ」

「棕、呼びにくいんなら今まで通りで構わないぞ」

「でも、お姉ちゃんに怒られそうですし……」

「呼び方なんて、そうすぐに変えられる訳じゃないんだし、杏も許してくれるだろうさ」

俺だって散々頼まれて漸く「棕」と呼べるようになったのだし。

「ごめーん、ちよつと遅れちゃったわね」

「別に構わないが、遅れるなら連絡くらいしてほしかったぞ」

「だから謝ったでしょ。男が細かい事気にしちゃダメ！」

「お前が大雑把過ぎるんだろうが……」

俺が言っているのは大人として当然の事だと思っただが、どうやらこういう事を男が言うのはダメらしい。ホント良く分からんが……

「それじゃあ行きましょ！ ほら朋也、おいていくわよ」

「お前が言うセリフじゃねえだろ！」

遅刻した杏においていかれるなんてなんか納得出来ないし、そもそも俺とお前が一緒に出かけるからデートなのであって、俺を置いていったらタダのお邪魔虫にしかないだろ……

「椋と勝平さんを巻き込んだおかげで、今日のデートは緊張する事無く過ごせた。もちろん、別行動をした時もあったけども、椋と勝平さんがいると思えばそれ程緊張する事無く朋也と二人つきりで過ごせたのだ。」

「それにしても、良かったの？ 僕たちまで朋也君に奢ってもらっちゃって」

「気にしないの。朋也だって稼いでるんだし、未来の義妹夫婦に奢るのは当然でしょ」

「別に良いけどよ……何でお前が偉そうに威張るんだよ」

「あたしが買った服とか色々持っている朋也が、あたしのことを半目で睨んできているけど、今はそんな事は気にならないくらい気分が良い。だから朋也の反論は黙殺したのだった。」

「それじゃ、椋たちの部屋に帰りましょ。ほら朋也、きびきび歩く」

「お前は……」

「朋也君、僕も持つよ」

「いや、別に重いわけじゃねえから……勝平だって椋の荷物持つてるんだし、気にするな」

「何やら男二人で話しているけど、あたしには関係なさそうだったの」

で椋とおしゃべりに興じる事にしたのだ。

「楽しかったわね」

「うん。あまり遠出する機会も無かったから、今日は誘ってもらえて良かったよ」

「あれだけ歩けるなら、勝平さんもそろそろ大丈夫かしらね？」

「どうだろう。一応は歩けるけど、長時間動き続けるのはまだ苦しそうだよ」

「そうなの？ まあ看護師の椋が言うんだからそれが正しいんでしようけどね」

勝平さんが完全に復活して、仕事でも始めれば二人の関係も更に発展するかもしれないものね。

「そう言えば二人とも、子供はどうするの？」

何気なく聞いた質問に、椋と勝平さんの顔が一瞬で真っ赤になる。

「えっ、なに？ 何で赤くなるのよ」

「お前……往來の場所で何を聞いてるんだ」

「へっ？ 別に子供をどうするかなんて、聞かれても問題は……」

そこまで言って、自分がとんでもない地雷を踏んだ事に気がついた。この二人の純情ぶり、そしてこうなった後どんな行動を取るのかが分かっていったのに、その事を完全に失念してしまっていたのだ。

「私、先に行くねー！」

「僕も！ 朋也君、ゴメン！ これもお願い！」

「お、おい！ ……杏、お前も持てよな」

「分かってるわよ……」

勝平さんに押し付けられた荷物の半分を、朋也があたしに突き出した。さすがにあたしでも今のはあたしが悪いって分かるので、素直に椋の荷物を持って歩く事にしたのだった。

近況

朋也君と杏さんが付き合いだして暫くは、僕や棕さんをも巻き込んだダブルデートが多かったのだけでも、今では自然に二人きりで出かけられるようになったらしい。そのせいかな、最近では朋也君と杏さんの二人と顔を合わせる機会が減ってしまっている。

「勝平さん、今日こそは上手く出来たはずです」

「どれどれ……う、うん……美味しいよ？」

二人が遊びに来ていた時には、杏さんの差し入れや朋也君が作ってくれた料理でご飯を済ます事が多かったけど、最近では時間をみつけては棕さんが料理を作ってくれているのだ。

作ってくれる事自体は凄くうれしいし、愛する奥さんが僕の為だけに料理を作ってくれるのだから、旦那冥利に尽きるというものなのだろう。

だけど棕さんの調理の腕は、未だに改善される事無く、むしろ悪化しているのではないだろうかと思いたいくらい、口に入れた瞬間に泣きたくなるくらいなのだ。

「やっぱり今日もダメですか……」

「いや、大丈夫だから！ ちゃんと全部食べるよ」

ここ数日で、確実に僕の胃は強くなっている事だろう。そうじゃ無ければ、僕は既に意識を失つても仕方ないくらいの衝撃を受けているのだから、こうやって起きてるのがおかしいもんね。

「時間があれば、お姉ちゃんか朋也お義兄さんに教えてもらうんですけどね……」

「最近、二人とも忙しいのか遊びに来ないもんね」

杏さんは幼稚園の夏休みが終わり、再び園児たちの相手などで忙しくなってしまう、朋也君は業績が認められてめでたく昇進、管理職へと就いたのだ。その為に残業なども増えてしまい、また後輩たちの指

導などもあつて毎日へロへロで自宅に帰っていると前にメールを貰った。

「僕も早く仕事を見つけなきゃね」

「まだ一人で遠出するのは難しいので、そこまで急がなくても良いですよ」

「でも、棕さん、杏さん、朋也君が忙しそうにしてるのに、僕だけリハビリをノンビリとやってるのはさ……」

とりあえずは歩けるようになり、補助も必要なくなったけども、それでも手術前と比べると筋力は落ちてしまっているのだ。とりあえずは一人で遠出出来るくらいまでには戻したいんだけど、これがまた大変なのだ。

「朋也お義兄さんのメールでは無いですけど、自分のペースでしっかりと治していかなければダメですよ」

「分かってるよ。ところで棕さん」

「はい、何でしよう勝平さん」

「『お義兄さん』って呼ぶの、随分とスムーズに出来るようになったね」

ついこの前までは、呼ぶ度に聞えてたはずなのに、最近では聞える事無くすんなり呼ぶ事が出来ているような気がする。

「本人を前にしたら、多分まだ聞えるでしょうけども、いない場所でも時までも聞えてたらダメですからね。私もゆっくりと慣れたんでしょう」

「なるほどね。ところで、あの二人は結婚するんだよね？」

「だと思えますよ。お姉ちゃんはずっと朋也お義兄さんの事が好きだったんですし、したい気持ちは絶対にあると断言出来ます」

「朋也君の方も、いい加減結婚しても良いとは思ってるだろうしね」

高校を卒業してからまともな出会いが無い、と前に聞いた事があるし、二人の相性はバツチリだからしてもおかしくないと僕も思うけどね。

「でも当分は忙しそうですけどね、お姉ちゃんもお義兄さんも」

「仕事が忙しいのは良い事だと思うよ。僕みたいに家で暇を持て余してるより、全然」

「もう少しで許可は出るでしょうし、あと少しの辛抱ですよ」

　　棕さんにそう励まされて、僕は棕さんを伴って病院へと向かう事にした。一人でも問題なく行けるのだけでも、棕さんが休みの日はこうして付き添ってもらうのだ。だって何時までも二人で出かけられる時間があるわけでもないのだから、こういうったチャンスを存分に生かすと決めたのだから。

けじめ

僕のリハビリも順調に進み、いよいよ働いても大丈夫なくらいまで回復したある日、朋也君から一通のメールが届いた。

「重大な話があるから、今日お前たちの部屋に行く」

そう書かれたメールを何度も読み返したけど、そこから話の内容を推理するのは僕には出来なかった。それに、久しぶりに朋也君が僕たちの部屋を訪れてくれるのだ。理由は何であってもこれは嬉しい事だ。

「あのダブルデート以降、朋也君とは会ってないからね」

仕事が忙しいのと、杏さんの相手で朋也君の時間は更に忙しさを極め、僕たちに会いに来る余裕が無くなってしまっていたのだ。

「僕の方も伝えたい事が出来たし、丁度いいタイミングだったな」

漸く働いてもいいという許可が出たのだ。朋也君に報告しようと思っただけでタイミングでメールが着いたので、僕は手間が省けたのと、朋也君からも報告があるという事に驚きを覚えたのだ。

「とりあえず、椋さんにも報告しておかなきゃね。今日は非番で部屋にいるだろうし」

僕のリハビリの結果と、朋也君が来るという二つの報告を持って、僕は自分の家までの道のりを少し浮かれながら歩く。こんな気持ちで歩けるのは何時以来なんだろうな？ 少なくとも、僕の病気が発覚してからはこんな気分にはなれなかったと思うけど……

「いや、朋也君や椋さんと出会ってからは、少し病気の事を忘れられてたんだっけ」

あの頃は、僕にとって未来など無いとうっ向いていた時期だったんだ。そんな時、杏さんのバイクに撥ねられて椋さんと出会い、そして

朋也君と出会ったのだ。

普通バイクに撥ねられたなどという出来事は、人生の中でも最悪な出来事に部類されるだろうけども、僕の場合は、そのおかげで人生のパートナーと出会い、親友と呼べる相手と出会う事が出来たのだ。人生、何が良い影響をもたらすか分からない、まさにそんな感じだった。

夕方になり、朋也君が部屋にやってきた。その横には杏さんもいる。どうやら重大な話というのは、二人に関係している事らしい。

「まずは、久しぶりだな」

「そうだね。もう結構会って無かったもんね」

「俺も杏も、そして椋も仕事で忙しかったし、勝平もリハビリがあったからな」

「そうだね。でも、僕のリハビリは一先ず忙しさは無くなるよ」

「どういう事？」

僕の切り返しに、朋也君ではなく杏さんが首を傾げた。朋也君の方は、何となく僕の答えに想像がついているようだった。

「今日、担当の先生に働いても良いって言われたんだ。もちろんリハビリはまだ続けて行くけども、とりあえずは一区切り、って事」

「そうだったんだ、おめでどう、勝平さん。椋も良かったわね」

「勝平さんが頑張った結果だよ、お姉ちゃん」

杏さんの言葉に、棕さんが目を押さえながら答えた。まさか泣いてくれるとは思ってなかったから、僕もつられて泣きそうになってしまった。

「なんだ、棕にも言っていなかったのか？」

「ううん、一応先に伝えただけど、また感動してくれたみたい」

「……それで、何でお前まで泣きそうになってるだよ」

朋也君に呆れたのを隠そうともしない声色でツツコまれて、僕は少し慌てた。

「と、ところでさ！ 朋也君の重大な話ってのはなに？」

「何か誤魔化してるような気もするが……まあいいか」

追及するのもバカらしくなったのか、朋也君は咳払いを一つしてから正面を向きなおした。その表情につられるように、僕と棕さんも居住まいを正した。

「今日、籍を入れた」

「……えっ？」

「だから、杏と結婚したって言ったんだよ」

「……ええっ!？」

「反応遅いな……」

実を言うと、僕以外反応出来なかったのだ。杏さんは照れて顔を真っ赤にしてるし、棕さんはフリーズしたまま再起動出来てなかったから。

「とにかくそういう事だ。これからもよろしくな」

「本当に朋也君がお義兄ちゃんになったんだね」

「言っとくが、年齢はお前の方が上なんだからな」

「分かってるよ、朋也お義兄ちゃん！」

「何かムカつく……」

こうして、僕と朋也君の間には、新たな絆が誕生したのだった。これから先、色々とあるだろうけども、この絆が無くならないように願っていたいな。

杏の相談事

お姉ちゃんと朋也お義兄さんが籍を入れたという事で、私と勝平さんはささやかながらお祝いをする事にした。折角の機会だから、私も料理を作ろうとしたのだけど、三人に全力で止められてしまった……そりゃ、私の料理の腕は酷いですけど、そこまで全力で止めること無いじゃないですか……

「本当に朋也君が僕の義兄になるなんて思わなかったよ」

「そうだな。初めて会った時は、ここまで親密な関係になるとは思っ
てなかったな」

「運命の出会い、って本当にあるんだね」

「何だか気持ち悪い勘違いをしそうな言い方だが、確かにあれは運命的だったな」

そういつて朋也お義兄さんはお姉ちゃんの方に視線をずらした。それにつられるように、お姉ちゃんも視線を逸らしている。

「これでこの部屋にいてもおかしく無くなったね」

「別におかしいなんて思っていないが、前よりはいやすくはなったな」

「アンタが遠慮しすぎだっただけでしょ？ アタシは前からいやす
かったけどね」

「あのな……夫婦の——しかも漸く新婚生活を送れるようになった妹夫婦の部屋に姉が居座ってたらどう思う？ 邪魔だろ？ 少しは遠慮しろって思ってたんだが」

「別にいいでしょ！ 椋はアタシの実妹なんだから！」

こういつたやり取りは相変わらずのようだけど、前より楽しそうに見えるのはきつと気のせいじゃ無いはず。だってお姉ちゃんもお義兄さんも笑ってるんだもん。

「ところで、二人は結婚式はどうするの？」

「そうだよ。僕たちみたいな事情があるわけじゃないんだし、二人はしっかりと式を挙げなよ」

「そうは言ってもな……」

「時間も無いし、それにアンタたち夫婦より先に式を挙げるのは……ね」

二人とも遠慮してるのか、私たち夫婦の事を優先的に考えてくれている。その事は嬉しいけど、私たち夫婦がお姉ちゃんたちの邪魔をしていると思うといたたまれない気持ちになってきてしまう。

「そういえば勝平、お前仕事見つかったのか?」

「えっ? まだだけど」

「知り合いの会社で事務員を探してるんだが、お前パソコンとか使えるよな?」

「一応は……でも、僕みたいな人材で良いのかな?」

「問題ない。計算出来れば猫でも猿でも良いって言ってたし」

「……随分と人材不足なんだね、その会社」

お義兄さんが勝平さんに仕事を紹介してくれている横で、私とお姉ちゃん姉妹の会話をしていた。

「これでアタシも『藤林』じゃなくなったわね」

「これからは『岡崎先生』って言われるのかな?」

「ずっと『杏先生』って呼ばれてたから、子供たちは問題ないわね。ただ先生たちは『藤林先生』って呼んでるからね……そっちは少し混乱しそうね」

「結婚したんだから仕方ないけど、暫くは旧姓でも良いんじゃない?」

私はすぐ『柊』姓に変えたけど」

一緒にいられる時間が少なかったので、せめてもの繋がりを持つとすぐに『藤林』姓から『柊』姓に変えたのだ。そのおかげなのか、同僚にはかなりからかわれたんだけど……

「まっ、それは園長先生と相談して決めるわ。それよりも、奥さんの先輩として、色々教えてほしいんだけど」

「……何か教えるような事があるの?」

別段特別な事はしてないんだけどな……

「ほら、夜はどっちから求めるの、とか」

「……………」

お姉ちゃんが言ってる事の意味が分からず、私は数秒考え込む。そして、その答えに行きついた時、私は自分の顔から火が出るんじゃないかと思うくらいの熱を感じたのだ。

「そんなの知らないよ！」

「っ、どうしたんだ、掠？」

「あっ…………えっと、何でも無いです、お義兄さん」

「そ、そうか」

離れたところにいたお義兄さんに驚かれてしまったけど、こんな事話せないので誤魔化す事にした。

「とにかく、そんな事は私には分からないよ」

「そっか…………二人とも奥手そうだもんね」

お姉ちゃんが何か納得したように頷いたけども、私はそれに反論するだけの気力も度胸も無かった、だって、反論しても墓穴を掘るだけな気がしてならなかったのだもの……

「だいたい、お姉ちゃんも求めるような事はしないでしょ？」

「……………かもね」

せめてもの反論をして、私はお姉ちゃんとの会話を終わらせた。向こうも終わったようだし、漸くお祝いを始められるのだった。

初仕事

朋也君に紹介してもらった事務所に面接を受けに行ったのだが、その場で採用されてしまった。どうやら本当に人手不足だったらしく、面接に来たはずなのにすぐに働かされてしまった……まあ、明細の整理と計算だけだったからそれ程大変じゃ無かったんだけど。

「でもまさか、受けに来たその日に働かせるとは……」

今日はまだ正式に採用されていたわけじゃ無かったので日当が貰えた。中身は結構入っていたので、間違いじゃないかと確認したほどだ。

「正式な採用は明日からだけど、今日だけでこんなに貰えるとは思ってなかったな」

どうやらあの事務所で働いている人の殆どが、明細の整理と計算が苦手なようで、古いものだと二ヶ月くらい前の明細なども出てきた。期限などは良いのだろうかとも思ったけど、これだけ放置されていて誰も焦って無かったのを考えると、二ヶ月からは大丈夫なんだろうな。

「勝平」

「んっ？ あっ、朋也君」

帰り道の途中で朋也君が声を掛けてくれた。どうやら朋也君も仕事終わりのようで、その手には今晚のおかずらしきものが入ったスーパーの袋が握られていた。

「面接に行ったんだろ？ どうだった？」

「うん、なんかその場で採用してもらって、いきなり働かされたよ」

「まあ明細とか山積みだったからな……」

「でもちゃんと日当貰えたし、明日から正式に働かせてもらえる事になったしね」

「事務だから足の事気にする事も無いしな」

「そんなに歩かないからね」

その事も考慮して、朋也君はあの事務所を紹介してくれたのだろう。高校の時は不良だとか言われていた朋也君だけでも、そこら辺の人より余程優しい心の持ち主なのだ。

「ところで、その袋は？」

「杏に頼まれた。買い物する時間が無いから代わりに買ってこいだと」

「ふーん……あれ？ 朋也君と杏さんって同居してるわけじゃないよね？」

「ああ。行き来するだけだな」

「……じゃあ何で朋也君が代わりに買い出しさせられてるの？」

「知らん。何だか忙しくてタイムセールに間に合わないから、とか言ってたが……何で俺がスーパーのタイムセールに行かなきゃいけないんだよ……凄く浮いてたんだぞ」

「あはは……お疲れ様です」

主婦の方々に交ざって朋也君がタイムセールに挑んでいる姿を想像したら、乾いた笑いしか出て来なかった……朋也君の言うように、確かに浮いてしまっているのだ。

「まあ別にいいけどな。俺も食うんだし」

「朋也君が作るの？ それとも杏さん？」

「家主が作る事にしてる。だから今日は杏が作る日だな」

「毎日行き来してるの？」

「いや、三日に一度だな。杏が酔い潰れたらそのまま泊まる事もあるが」

「そうなんだ……まあ、籍は入れてあるんだから問題は無いもんね」

「一段落したら、もう少し広い部屋を探そうとは言ってるんだがな」

僕と棕さんみたいに、漸く一緒に暮らせる夫婦とは違い、朋也君と杏さんは本物の新婚さんだ。一緒に住める部屋を探すのは、なるべく

早い方が良いのではないだろうか？

「そう言えば、春原君からメールが着たんだけど」

「春原から？　なんだって？」

「最近朋也君にメール送っても返って来ないって」

「メール？」

僕の言葉を聞いて、朋也君が携帯を取り出した。

「あつ、春原からメール着てるわ。全然気づかなかった」

普段から仕事用にしか使っていないので、朋也君は基本的に携帯を弄らない。だからメールが着ても気づかなかったのだろう。

「アイツ、向こうに友達とかいないのか？」

「まあ春原君だし」

かなりひどい事を言ってる自覚はあるけども、「春原君だから」で分かる朋也君も大概なんだなと思いつながら、僕は朋也君と家路を歩いたのだった。

椋の心配事

勝平さんが仕事を始めて暫くの間、私は勝平さんの事が心配で仕方ありませんでした。いくらリハビリの経過が順調で、先生が働いても大丈夫と許可してくださったとしても、勝平さんは五年間寝たきりの生活だったのです。それをいきなり働き始めたりしたら、心配するなという方が無理だと私は思います。

「椋、なに怖い顔してるんだよ……」

「なにかあったの?」

「えっ? ……ううん、何でも無い」

私は今、お姉ちゃんとお義兄さんと一緒に夕ご飯の支度をしている最中だった。もちろん私はあくまでもお手伝いで、実際に調理するのはお姉ちゃんとお義兄さんの二人だ。

「そんなに勝平の事が心配なのか?」

「別に取りつて食われるような場所じゃないんでしょ? それに、重たいものを運んだり、走り回ったりする職場でも無いんだし」

「分かってる……分かってはいるんですが、やっぱり心配なんです」

「まあ、分からないではないが……少しは勝平の事を信じてやっても良いんじゃないか?」

「勝平さんを……信じる?」

お義兄さんの言葉に、私は思わず固まってしまった。確かにこんなに心配しているという事は、見方を変えれば勝平さんを信じていないと思われても仕方ない事だった。

別にそんな事は無いし、お義兄さんも本気では私が勝平さんを疑っているとは思ってなかったでしょう。でも、一度その考えに至ってしまった私は、自分で自分が許せなくなってしまうました。

「ただいま……あれ? 椋さん、何かあったの?」

「い、いえ! お帰りなさい、勝平さん」

軽い自己嫌悪に陥っていたら、そのタイミングで勝平さんが帰って来ました。何時も通り明るく、そして元気な勝平さんの表情を見て、やっぱり心配する必要は無いのかもしれないと思えました。

「朋也君、今度事務所に来てほしいって社長から言伝を預かったんだけど」

「また何か壊したのか？」

「テレビの調子が良くないみたいだよ」

「まったく……勝平に伝言を頼むんじゃないかと、会社に電話しておけばいいものを……」

「あはは……僕が朋也君の義弟だって事がバレてるんだし、そっちの方が確実に朋也君を呼べるでしょ？ ほら、朋也君は管理職になっちゃったんだし……」

「現場に出てないわけじゃないんだがな……」

お義兄さんと楽しそうに話す勝平さんを見ると、こんなにも楽しそうにしているのを見るのは久しぶりだなと思えてきました。

入院生活が長く、退院しても通院しかする事の無かった時を考えると、こうして自分の意思で出かけられるのは楽しいんだろうなと今更ながらに思いつきました。

「朋也、話しこむのは良いけど、こつちもちゃんとやってよね」

「分かってる。勝平、詳しい事は後でな」

「うん、分かった。それじゃあ頑張ってるね」

とりあえずの話合いが終わったので、勝平さんは着替えの為にキッチンから姿を消した。最近はお姉ちゃんとお義兄さんも前より頻繁にこの部屋に来てくれるので、私は料理を二人に教えてもらっているのでここに留まっています。本音を言えば、勝平さんの着替えを出してそれを手伝いたいのですが、過保護だと言われるのが分かったので諦めました。

「さてと……後はこれを焼けば終わりか」

「これなら掠でも出来るわよね？」

「ふえ？ ……でも、この前私が焼いた茄子は……」

「あれはいきなり強火でやったからだろ？ 今度はしつかり指導するから」

「そうよ！ 失敗は成功の元なんだから！ 失敗しても気にしなくて良いのよ」

「うん……慰めてくれてありがとう」

二人の顔が引きつってるのが良く分かった。多分二人ともあの時の事を思い出したんだろうな。私も自分の顔が引きつってるって分かるし……

夫婦の会話

僕がこの事務所で働きだして、もう一ヶ月経とうとしている。最初は明細の整理や領収書の整理、電話番号などが主な仕事だったけど、最近では現場に赴いての交渉も任されるようになってきた。

交渉と言っても、殆ど口論になる事も無く、予定調和な会話をして契約書にサインしてもらっただけなのだが。

「やっと一人前扱いされた気分だよ」

僕は棕さんに今日あった出来事を話してそう締めくくった。朋也君に紹介してもらった手前、すぐに辞めてしまったら朋也君にも迷惑がかかってしまうと恐れていたけど、今ではそんな事は杞憂だったと思えるくらいに仕事に慣れてきたのだ。

「そうですか。でも勝平さんはまだ通院が必要な身体なんですから、その事を忘れてはいけませんよ?」

「分かってるよ。棕さんが僕の事を心配してくれている事もね」

自分の足で歩けるようになったからといって、完全に回復したわけではない。リハビリはまだ当分必要だろうし、問診なども定期的に受けなければならぬだろう。

それでも、ベッドに寝たきりだったあの頃と比べれば、かなり自由に動けるし楽しい生活を送れているだろうな。何より棕さんと一緒に生活出来ているんだから。

「今日は朋也君たちは来ないんだよね?」

「はい。お姉ちゃんもお義兄さんも忙しいらしく、今日はこれないとメールが届いてました」

「そっか……じゃあ今日は久しぶりに二人きりだね」

棕さんは非番、僕は仕事を終えて帰宅済み。そして義姉夫婦は仕事が忙しいらしく来られない。ここ最近二人きりの時間が減っていたので、これはこれで良かったのかもしれない。

「思えば、再会してからあつという間だったね」

「どうしたんですか、急に？」

「ううん、ただ何となくそんな事を思ったんだ。退院間近だった僕と朋也君が再会して、その縁で杏さんも朋也君と再会を果たして、色々合って今は夫婦になつてゐるんだなつて思つてさ」

「確かに、お姉ちゃんはきつかけが無かつたら未だにお義兄さんの事で頭を悩ませていたかもしれないね。そう考えると、私たちはお姉ちゃんとお義兄さんの関係を進展させたのではないでしょうかな？」

「少し古いけど、恋のキューピット役だったのかな？」

元々想い合っていたらしいから、キューピットというより橋渡し役かな？ それでも、二人の関係の進展に貢献出来たのなら嬉しいけどね。

「そう言えば最近、お義兄さんの事を病院で聞かれるんですよ」

「そうなの？」

朋也君は別に通院しているわけでも、僕みたいに看護師さんたちと顔見知りなわけでもないんだけどな……何で話題になつてゐるんだろう？

「偶に勝平さんを車で迎えに来てますよね。その光景を他の看護師に見られてたんですよ」

「ああ、そうなんだ」

「はい。それで『あの男の人は旦那さんとういって関係なの？』と聞かれてたんですが、最近では『彼女はいるのか』とか『好みのタイプとか分からない』とか色々聞かれるんですよ」

「あ、あはは……朋也君はもう結婚してるのにな」

「そうなんですよ。だから私が『彼は私の姉の旦那さんです』と言つたら、結構な数の看護師がショックを受けてました」

「無自覚にモテてるんだね、朋也君は」

聞けば高校時代も意外と人気と人気が高かったらしいけど、本人はその事に気づいていなかったらしいし、棕さんも僕と出会う前は朋也君の事が気になってたらしいしね。

「お義兄さんは少し怖い印象ですけど、話せば優しい人だと分かりますからね」

「うん。僕と初めて会った時もそうだった」

バイクに撥ねられた僕を見捨てずに起こしてくれて、更に僕が落とした履歴書も保管してくれていた。普通なら破り捨てられてもおかしくなかったのに、朋也君はそうしなかったのだ。

「僕と棕さんの関係が進展出来たのは、杏さんと朋也君のおかげだね。よくよく考えればさ」

「つまり私たち姉妹は、互いの恋の進展に一役買っていたんですね」
「仲良しだね、棕さんと杏さんは」

改めてそんな話をしながら、僕と棕さんは笑いあったのだった。

義兄との会話

勝平さんと共働きという事になったので、家計はかなり潤い始めています。もともと私一人の稼ぎで夫婦二人くらいなら何とかなるくらいだったのですが、そこに勝平さんの稼ぎも加わりましたので、当然のように家計は潤うのです。

「椋さんの方が稼ぎは良いからね。僕なんてまだ見習いの見習いだし」

「そんな事気にしなくて良いですよ。私の方が長く働いているんですし、勝平さんはまだ社会復帰したばかりなんですからね」

「社会復帰って聞くと、僕がまるで何処かに入ってたように聞こえるね」

「実際に入院して病院内で生活していたんですから、社会復帰でも間違っただけだと思えますけどね」

世間から隔離されていたのは同じですし、勝平さんは新聞などは読みませんでしたからね。

「そういえばお姉ちゃんが来るそうですよ？」

「そうなの？ そう言えば朋也君も来るってさっきメールが着てたよ」

「久しぶりに四人ですね」

「そうだね。朋也君も杏さんも忙しそうだもんね」

お義兄さんは出世して営業部部长兼教育係として常に忙しそうにしていますし、お姉ちゃんの方も何かと忙しいようで、ここ最近はこの部屋に来る事はありませんでした。

「椋さんも忙しそうだし、僕だけおいていかれてる気分だよ」

「お義兄さんはもうしばらくすれば落ち着くとは言ってますけどね」

研修を終えていよいよ現場に出てきた新人さんたちを、お義兄さんが教育しているらしいのですが、もうじき使い物になると言っていま

したし、そうなれば再びこの部屋に訪れる余裕が生まれるかもしれない。

「朋也君ってさ、うちの事務所でも信頼されてるみたいなんだよね。壊れたら朋也君に頼むって社長も言ってるしさ」

「真面目な人ですからね。それに、勝平さんの義兄である事も知られてるんですし、その好みもあるのかもしれないね」

「僕なんて気を使われるまでになって無いよ。朋也君個人の實力だよ、きつと」

「謙遜する事もないんじゃないですか？ 勝平さんが入ってから、あの事務所の経理がスムーズになってるとお義兄さんから聞いてますよ」

領収書の整理や見積もりなどがスムーズに進んでいるのは、間違いなく勝平さんのおかげらしいですし、その事も関係ないとは思えませんしね。

「最近では外回りにも随行してるしね」

「物凄い勢いで信頼を勝ち取ってるんですよ、勝平さんは」

「そうだな。勝平の活躍は俺の耳にも届いてるぞ」

「朋也君！」

「よっ。これ差し入れだ」

玄関横の小窓から顔を覗かせているお義兄さんが笑いながら勝平さんの活躍を認めてくれました。

「久しぶりだな、棕も元気そうだな」

「お義兄さんも。お仕事忙しいんですね？」

「まあ、あと少しの辛抱だろ。アイツらが使い物になれば、修理や回収は任せそうだし」

「でも、朋也君が良いって人も多いんでしょ？」

「そうみたいだな。ありがたい事に」

お義兄さんは買ってきたお茶のペットボトルに口をつけながら少

し恥ずかしそうに答えてくれました。

「ところで、お姉ちゃんは一緒じゃなかったんですか？」

「杏？ アイツなら一度家に帰ってから来るってメールがあったが？」

「本当ですか？ ……あつ、私にも着てました」

「ついでに言えば、俺に調理は任せるとも書いてあったが」

「すみません、私がもう少し出来れば良いんですけど……」

何時まで経っても私の調理の腕は成長する事無く酷いままなのだ

……

「仕方ないだろ。粽だって忙しいんだし、練習する時間だって満足にとれないんだろ？」

お義兄さんに頭をポンポンと叩かれ、そのままお義兄さんはキッチンで作業を始めます。最近では普通の兄妹のようにふるまってくれるようになったので、何となく嬉しいです。

「朋也君も『お義兄ちゃん』が板について来たね」

「そうか？ 一人っ子だったし、『きょうだい』というものに憧れた時期もあったからな」

「そうだったんだ」

勝平さんと話ながらも、お義兄さんは手際よく調理を進めています
……私もあれくらい、とは高望みしませんが、もう少しくらい上達
したいですよ……

花嫁姿

先に椋たちの部屋に向かっていた朋也が用意してくれた料理で、あたしたちは夕食を済ます事にした。明日は全員休みだし、今日くらいは呑んでもいいわよね。

「だからー最近忙しいのは結婚したからなのよー」

「そうなの？ 私は別に忙しくならなかったけど」

「椋の場合は相手が勝平さんだからよー。旦那が入院患者としているんだから、見に行こうとすれば幾らでも見に行けるでしょ」

「うん、確かに暫く色々な看護師さんが僕の病室に来てた」

「でしょ？ でもあたしの場合には朋也がすぐそばにいるわけでもないし、どんなヤツなのか質問責めに遭って全然仕事がかどらないのよ」

主に先生たちからの質問責めなのよね。偶に子供たちからも聞かれるけど、先生たちの質問に比べたら優しいものなのよ。

「それって俺の所為なのか？ ただの好奇心だと思っただが」

「バカねー、アンタは一回ウチの幼稚園に来た事があるのよー？ 園長先生が口を滑らせちゃって大変だったんだからー」

園長先生がアタシの苗字を聞いて――

「岡崎さんって前に冷蔵庫の修理に来た？」

――と呟いた時の先生たちの目は、アタシでも怖いと思うくらい光っていた。

「よく覚えてるな、あの人。たった一回しか顔を合わせてないのに」

「どうでもいい事は覚えてるのよ。大事な事はしよっちゅう忘れてるくせに」

「本人の前では言うなよ」

「わかってるわよー！」

言いたくても言えないんだから、本人がいないこの場所で言うくらい良いじゃないの！ 朋也も固いところがあるんだから、まったく。

「そうだ、お姉ちゃん」

「んー？ 何よ、椋」

「お母さんからメールなんだけど」

「お母さんから？」

「うん。私たちの事もなんだけど、お姉ちゃんたちの事も聞いて来たから」

それなら直接アタシにメールしてくれば良いのに……お母さんも面倒くさがりなところがあるから、椋たちの近況を聞くついでにアタシたちの事も聞いて来たんだろうな。

「それで？ お母さんはなんて言ってきたのよ」

「うん……『結婚式はしないのか？』って」

「結婚式かー……暇が無いのよねー」

「私たちはお金が無かったからしなかったけど、お姉ちゃんたちはそれなりに蓄えもあるでしょ？ どこかでしないの？」

「籍は入れたし、アタシも朋也叫ぶような友人も少ないしねー」

「会社に報告して終わりだったな、俺も」

「アタシも報告しておしまい。根掘り葉掘り聞かれたけどね」

今までろくに付き合ってる男の匂いもしなかったアタシが、いきなり結婚の報告をすれば仕方ないのかもしれないけど、あの勢いは驚いたわよ……

「でも、お母さんもお父さんもお姉ちゃんの花嫁姿は見たいと思ってるんじゃない？」

「それは椋も一緒でしょー？ アンタたちの方が先に結婚してるんだから、アンタこそ花嫁姿を見せてあげるべきなんじゃないのー？」

お金がどうこう言ってるけど、それくらいならもう問題なさそうに思える。勝平さんも働きだしたし、椋に関しては既に結構な貯金があ

るはずだし。

「親族だけでしたら、それほど金は掛らないと思うぞ。勝平は施設出身だし、俺は親族と呼べる相手なんてオヤジくらいだ。まあ、疎遠になって今どうしてるかは知らないがな」

「じゃあ貸衣装で写真を撮りましようよ。前からアンタたちが計画していたのに、アタシたちも同行するからさ。料金は朋也が立て替えてくれるから」

「おいっ！……まあそれくらいならいいか」

初めは声を荒げた朋也だったが、何を思ったのかすぐに了承してくれた。

「結婚祝い、してなかったしな」

「それはお互い様じゃ……」

「義弟が気にするな。それくらいの蓄えなら、俺にだってあるんだ」

「……何時か返すからね」

「期待しないで待ってるさ」

こうして、アタシたち夫婦と椋たち夫婦で貸衣装を着て写真を撮る事が決定した。まあ、日程とかは未定なんだけどね……

姉妹での入浴

結婚式は兎も角、衣装を借りて写真だけは撮る事に決まった。朋也君と杏さんは間違いなく新婚だけど、僕と椋さんは既に結婚してから数年経っているの、少しだけ違和感があるのだ。

まあ、結婚しても暫くは僕は入院生活を余儀なくされていたし、椋さんも忙しそうにしながらも僕の病室に顔を見せてくれただけなので、本当の意味での結婚生活は僕が退院してからの、この数ヶ月なんだろうけどね。

「椋、最近また胸大きくなって無い？」

「そ、そんなことないよー」

「嘘！ だってこんなに揉みごたえが……」

な、何をしてるんだろうか……姉妹二人きりでお風呂に入っているのだけど、その声はこっちの部屋まで聞こえていた。

「何してるんだアイツは……」

「朋也君、なんだか落ち着いてるね」

「ん？ まあ杏の奇行は今に始まった事じゃないしな」

「そうなんだ」

妹の胸を揉むなんて、普通に考えたらおかしいんだけどな……朋也君の中では杏さんならやりかねないと思える範疇の行動のようだ。

「それにしても、漸く結婚した実感が湧いて来たんだよな」

「そうなの？ まあ朋也君たちは今のところ同居はしてないもんね」

「契約の関係上な。もうじき杏の方が契約満了だから、その機会で同居はするつもりだ」

「僕の場合は入院してたからそんな事考えなかったけどね」

まず部屋が無かったのだから、契約云々は考える必要が無かったのだ。その点では朋也君と杏さんよりは簡単同居する事が出来たんだろうと感謝している。

「お前が入院してたから、椋も満足に新婚生活を送れなかったんだろ」
「それは僕も同じだよ。椋さんと一緒に生活出来なかった数年は、本当にもつたいたいと思うもん」

「そうか……ところで、アイツらは何時まで風呂に入ってるつもりなんだ？」

朋也君に言われて、僕は時計に目をやった。椋さんと杏さんがお風呂に入ってから既に一時間は経っていたのだ。

「女の子のお風呂は長いんじゃないの？ 椋さんだって何時も三十分以上は入ってるけど」

「そうなのか？ 杏の奴は早いと十分で出てくるんだが……まあ良いか。偶には男同士でゆっくり話し合うのも」

「そうだよ。あつ、そう言えば写真を撮る時に、春原君の分の写真も焼き増ししてもらった方が良いのかな？」

「春原の？ 何でアイツの分を考えるんだ、勝平は」

「だって、僕も朋也君も結婚したという事実を突き付ければ、春原君も焦るかなと思って。それに、未だに僕に未練があるようだし……」

「ああ……アイツは変態だからな……」

昔、春原君は僕の事を女だと勘違いしていたのだ。一応誤解は解けたはずなのだけど、それでも春原君は僕にただならぬ視線を向けてきたりしていたのだ。

「ここ最近はずっと普通に接してくれてるけど、何時までも男の僕に未練を残してるのもね、彼の為にならないからさ」

「別に焼き増ししなくても、アイツにその写真をメールで送れば良いだけだろ。データは貰えるだろうし、PCさえあればそのデータを携帯に送る事も可能だろ」

「そうなの？ 僕PCとか詳しくないんだけど、朋也君は出来るの？」

「一応はな。それじゃその作業は俺がやるとして……何だか風呂場からおかしい声が聞こえるんだが」

朋也君が訝しげな目をお風呂場に向ける。つられるようにして僕もお風呂場の方に視線をやると、確かにおかしな声が聞こえてきた。

『おねくひゃん、私らつてまけらいんだから』

『ひゃっ!? 掠、もうひゃめてよ〜』

「……アイツら、酒でも飲んだのか?」

「逆上せたんじゃない……」

呂律が回って無い掠さんの声と、普段の強気が影を潜めている杏さんの声を聞いて、僕と朋也君は揃ってため息を吐いた。こんなんで明日の写真撮影は大丈夫なのだろうか、一抹の不安を抱きながら……

長い道のりを…

僕と椋さん夫婦と朋也君と杏さん夫婦で衣装を借りて写真を撮った日。僕たち四人は珍しく外食をしたのだ。

「これで漸く結婚した自覚が出てくるわね」

「なんだ、杏はまだ無かったのか？」

「少しはあったけど、役所に紙を提出しただけだったでしょ？　だからイマイチ実感が無かったのよね」

「確かにそうだが、『紙』ってお前な……」

杏さんの大雑把な捉え方に、朋也君が呆れたようにため息を吐く。この義姉夫婦は何時もこんな感じなのだろうかと少し心配になるが、するだけ無駄なのですぐに忘れてしまうのだけだ。

「勝平たちは既に同居してるしな。写真を撮ったからといって何か思う、なんて無いだろう？」

「いえ、漸く勝平さんと夫婦になったって気がしてます。前から思っ
てはいましたけど、あの衣装は特別ですから」

「うん、そうだね。僕も椋さんの晴れ姿を見て感動してるよ。この人が僕の奥さんだって、改めて実感もしてるし」

「そんなものか？　お前たちは俺たちと違って何年も夫婦をやって来たんだろ？　入院してたからと言って、そこは変わらないんじゃないのか？」

「一緒に暮らし始めたのは今年に入ってからだし、その後もリハビリとか夜勤とかで一緒にいられる時間は多く無かったからさ」

朋也君たちのように、付き合っすぐ結婚したのも驚くけど、僕たちのように、結婚してから暫くは入院患者と看護師の間柄だった夫婦も珍しいのかもしれない。

「藤林家には結婚の報告と共に写真を持っていけば良いんだよね？」

「そうね。お父さんもお母さんも、娘が結婚してるといふ事は受け容れてくれるけど、写真を見るまでは半信半疑っばいからね」

「私はもうとつくに結婚してただけだね。疑われてるのはお姉ちゃんだけでしょ」

「そんな事無いわよ。椋だって結婚してた、って言っても暫くは勝平さんは入院してたし、退院してからも色々忙しくてまともな新婚生活は送れてないでしょ？ だからお母さんたちも疑ってたんじゃない？」

「どうだか。とりあえず挨拶に行くのは一緒に行こうぜ」

「そうだね。僕も挨拶に行った事ないし、朋也君と一緒に心強いしね」

既に娘さんを貰っている僕たちに、『娘はやらん』などと言う定番の言葉は無いだろうし、二人のご両親ならそこまで迫力のある人ではないだろうけども、それでも心細いと思うところはあるのだ。

「そういうえば、この近くに三人の母校があるんじゃないか？」

「ん？ 確かに近くだな」

「あたしが朋也に告白した場所でもあるけどね」

「お姉ちゃん、ここで告白したの？」

「そうよ。朋也を好きになった場所の傍で告白したかったの」

「意外とロマンチストなんだね」

椋さんの言葉に、杏さんが恥ずかしそうに頬を染めて椋さんを追いかけ回す。その光景を僕と朋也君は苦笑いを浮かべながら眺めていた。

「ホントに、この姉妹は仲が良いんだか悪いんだか……」

「少なくとも、悪くは無いと思うよ。だってホントに仲が悪かったら、あんな風にじゃれ合ったり出来ないもん」

追いかけている杏さんも、追いかけてられている椋さんも、何処か楽しそうな顔をしている。本気で怒ったりしてないと言い切れる顔なのだ。

「仲が良いという事は、昔から知ってるがな。成長してないとも言え

るのかもしれないが」

「朋也君だってあの二人と一緒にの時は高校生のままでしょ？ 僕も人の事は言えないけど」

「……かもしれないな。とりあえず、一緒にいて退屈しないのは確かだ」

僕たちは笑いあいながら長い坂道に視線を向ける。僕は何回かしか上った事が無い坂道だけでも、三人には思い入れのある場所、上り慣れた坂道。これから僕たちの夫婦生活にも、このような険しい坂道があるのかもしれないけど、二人だけでは無理でも、四人なら登りきれのかもしれない。僕は朋也君に視線を戻し、そつと心の中でそんな事を思っていた。

「朋也君」

「あん？」

「これからもよろしく」

「なんだ、急に」

「特に意味は無いよ。とにかく、これからもよろしく」

「良く分らんが、まあよろしく」

僕たちはこれからも長い付き合いになっていくだろう。それこそ、この坂道よりも長い付き合いに。途中で躓くかもしれないけど、最後までその道が途切れないように頑張ろうと、改めて誓ったのだった。